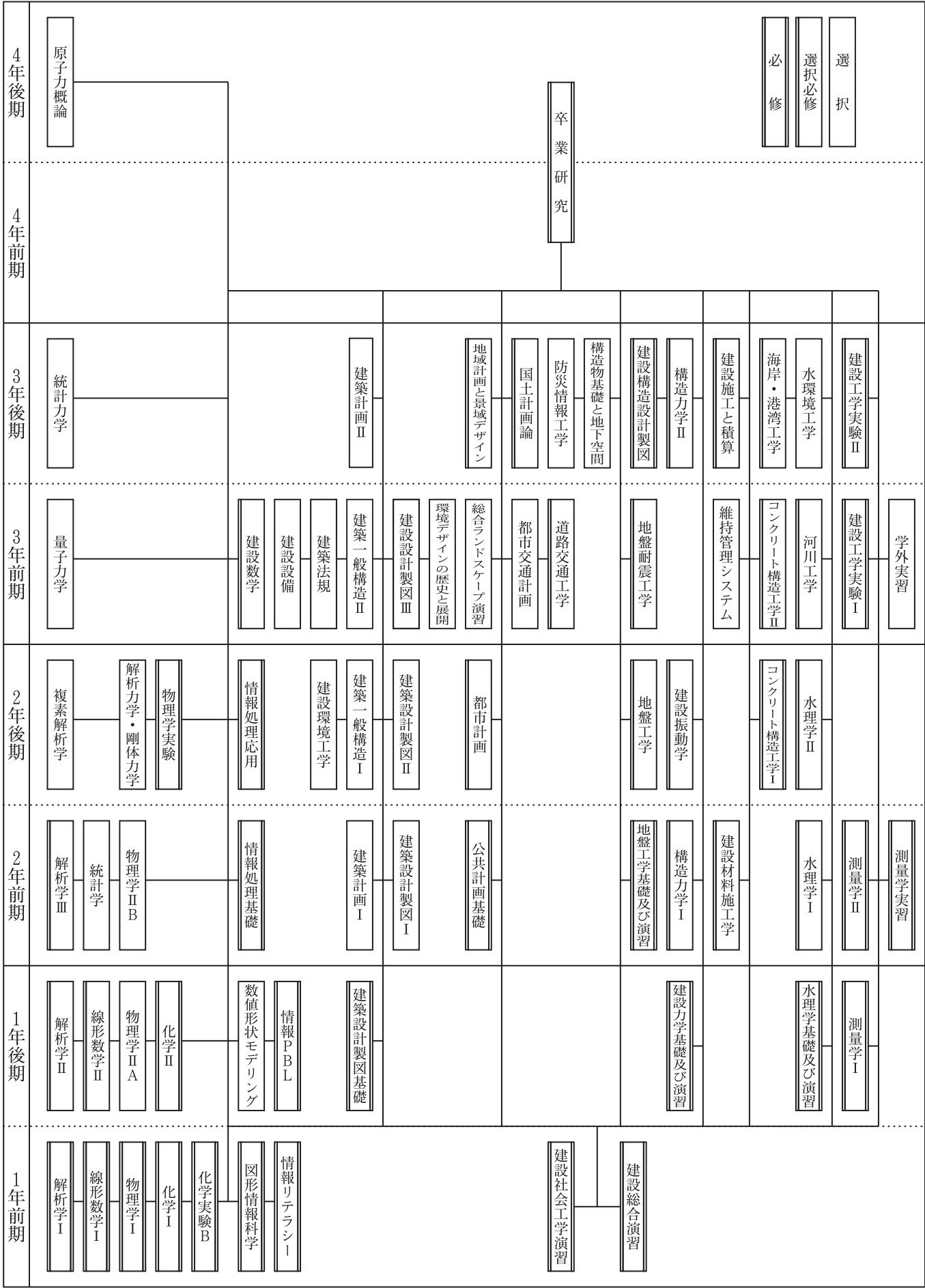


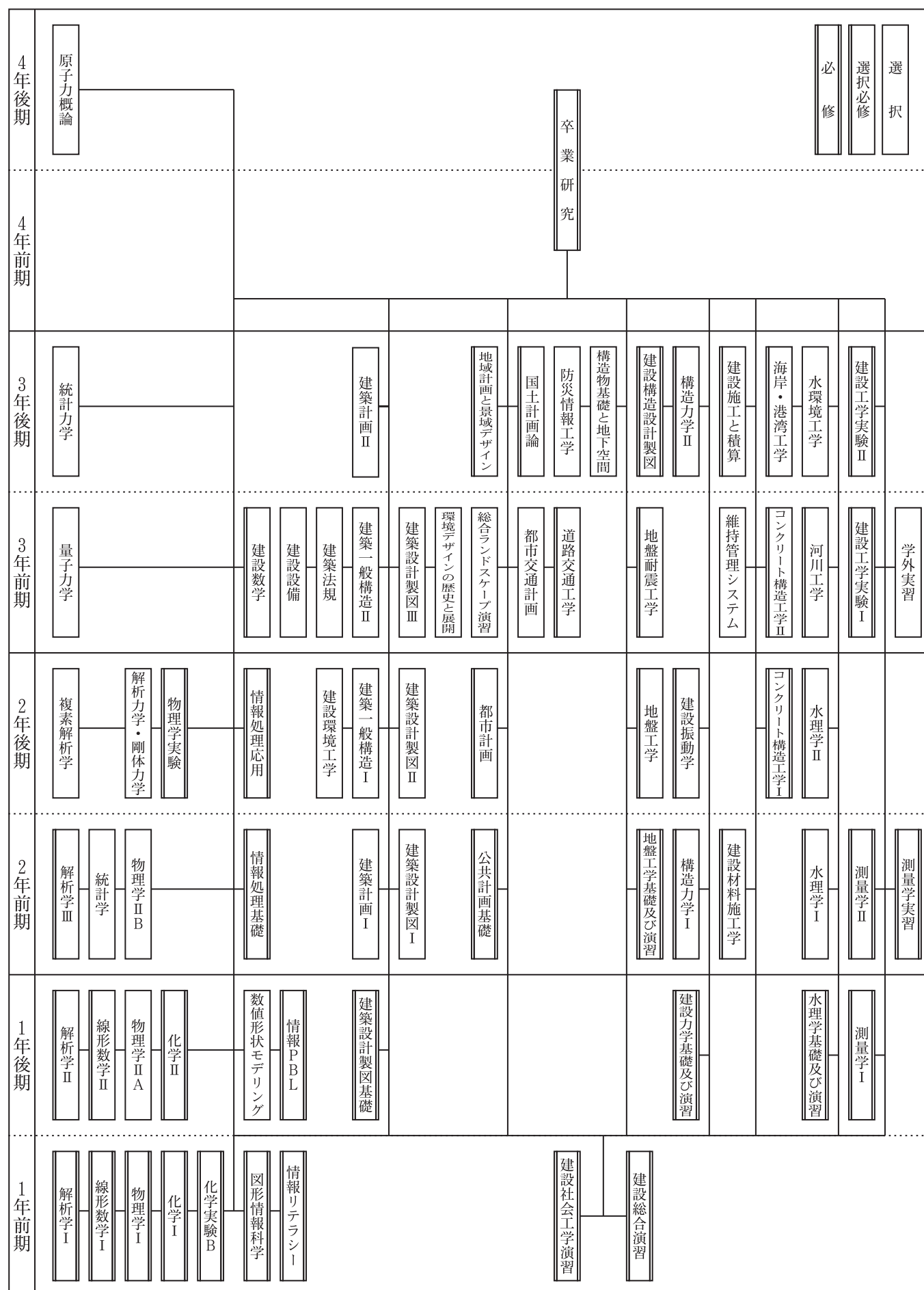
Ⅲ. 建設社会工学科

— 79 —

建設社会工学科・地域環境デザインコース授業科目系統図（人間科学系科目を除く）



建設社会工学科・都市再生デザインコース授業科目系統図（人間科学系科目を除く）



工学部の「学習・教育目標」

■建設社会工学科（全コース共通）

- （A）人々の健康と福祉および建設技術者の使命を支える能力と倫理的素養を身につける。
- （B）自己学習の過程を通じて技術者として責任を自覚するとともに、専門的視点に立った責任ある説明・提案能力を身につけ、地域固有の文化・社会的環境を視野に入れた思考能力を身につける。
- （C）基礎的な自然現象について、特に数学と理科に重点を置きながら科学的に深く理解する。
- （D）科学技術分野において国際的に活躍出来るコミュニケーション能力を身につける。
- （E）もの創りを支える9つの分野系、すなわち構造・耐震工学系、水工水理学系、土質力学・地盤工学系、建設材料学系、都市・交通計画学系、環境・景観デザイン学系、建築構造学系、建築計画デザイン系、建築環境設備系の基礎を理解する。
- （F）これらの主分野に関する実験・調査を与えられた時間で計画・遂行・解析・考察する能力、およびそれらを総括しまとめる能力を身につける。
- （G）実験および演習を通じて、自己学習の習慣および問題を解決する能力を身につける。
- （H）技術の社会および自然に及ぼす効果・影響を理解し、自然と共生し災害に強い豊かな人類の生活環境について考え、生涯にわたる自己学習・研鑽（さん）能力を身につける。
- （I）建設工学の専門的な知識、技術を統合して課題を組み立て、解決策を提案・実行する能力、および建設工学分野に関連する環境問題や実務上の問題に対応する基礎能力を身につける。
- （J）大学院へ進学、あるいは民間の研究機関に就職した際にも、十分な応用力を発揮できるように基礎学力を身につける。

解析学Ⅰ Analysis I

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：4 単位
担当教員名 坂本 隆則・池田 敏春

1. 概要

計算に主眼をおきながら、1 変数関数について微分積分学の基礎を修得させる。将来、必要に応じて数学の自習ができるように、理論的な取り扱いにも慣れるよう留意して講義を進める。

2. キーワード

極限、1 変数関数の微積分

3. 到達目標

- ・極限と連続性の概念がわかり、具体的に極限の計算ができる。
- ・微分概念を理解し、種々の関数の導関数の計算ができる。
- ・微分法を用いて、関数の形状を調べたり、不等式を示したりすることができる。
- ・不定積分、定積分、広義積分の概念を理解し、種々の関数の積分計算ができる。
- ・定積分を用いて、面積や曲線の長さの計算ができる。

4. 授業計画

- 1－2 実数と複素数
- 3－4 数列の極限
- 5－6 関数の極限と連続性
- 7－8 導関数
- 9－10 高次導関数
- 11－12 平均値の定理
- 13－14 テーラーの定理
- 15－16 微分法的应用
- 17－18 不定積分
- 19－20 有理関数の積分
- 21－22 三角関数と無理関数の積分
- 23－24 定積分
- 25－26 広義積分
- 27－28 積分法的应用
- 29－30 まとめ

5. 評価の方法・基準

試験および演習の結果で評価する。

評価方法の詳細は担当教員より通知する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) ネット上には種々の解説が出ているので、上記のキーワードなどで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効である。
- 2) うまく理解できない場合には、参考図書を数冊、見比べること。

7. 教科書・参考書

1. 高橋泰嗣・加藤幹雄：微分積分概論（サイエンス社）413.3/T-41
2. 高木貞治：解析概論（岩波書店）413.1/T-1

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

解析学Ⅱ Analysis II

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：4 単位
担当教員名 永井 敏隆・坂本 隆則

1. 概要

「解析学Ⅰ」で1 変数関数について微分積分学の基礎を学んだ学生に対して、2 変数関数の微分積分、また線積分の基本事項について授業する。将来、必要に応じて数学の自習ができるように、理論的な取り扱いに慣れるよう留意して講義を進める。

2. キーワード

多変数関数、偏微分、陰関数、重積分、級数

3. 到達目標

- ・偏微分の計算ができる。
- ・極値問題を解くことができる。
- ・重積分の計算ができる。
- ・変数変換ができる。
- ・整級数の微分積分ができる。

4. 授業計画

- 1－2 2 変数関数と極限値
- 3－4 偏微分・全微分
- 5－6 合成関数の微分法・テーラーの定理
- 7－8 偏微分的应用（極値）
- 9－10 陰関数の存在定理・陰関数の極値
- 11－12 条件付き極値
- 13－14 2 重積分
- 15－16 変数変換
- 17－18 広義 2 重積分・3 重積分
- 19－20 積分的应用（1）
- 21－22 積分的应用（2）
- 23－24 級数・正項級数 1
- 25－26 正項級数 2・絶対収束と条件収束
- 27－28 整級数・整級数展開
- 29－30 まとめ

5. 評価の方法・基準

試験および演習の結果で評価する。

評価方法の詳細は担当教員より通知する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 本講義が十分に理解できるためには、「解析学Ⅰ」を修得していることが望ましい。
- 2) ネット上には種々の解説が出ているので、上記のキーワードなどで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効である。
- 3) うまく理解できない場合には、参考図書を数冊、見比べること。

7. 教科書・参考書

1. 高橋泰嗣・加藤幹雄：微分積分概論（サイエンス社）413.3/T-41及びプリント
2. 高木貞治：解析概論（岩波書店）413.1/T-1

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

線形数学Ⅰ Linear Mathematics I

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 加藤 崇雄・西川 充

1. 概要

理工学諸分野の科目を学ぶうえで、また数学が工学に応用される場面で、行列や行列式などの線形代数の基礎知識は必要不可欠である。授業では、行列と行列式の計算法を説明し、それらと連立1次方程式の解法を通して、線形代数の基本的な事柄を解説する。

2. キーワード

ベクトル、行列、行列式、連立1次方程式

3. 到達目標

- ・行列および行列式の意味と基本的性質を理解し、それらの計算が正確に行える。
- ・掃き出し法や余因子を用いて逆行列を求めることができる。
- ・掃き出し法やクラメル公式により連立1次方程式を解くことができる。

4. 授業計画

1. 空間のベクトルの演算
2. 直線と平面の方程式
3. 行列の演算とその性質
4. 種々の行列、行列の分割
5. 演習
6. 行列式の定義とその基本的性質
7. 行列式の性質と計算（1）
8. 行列式の性質と計算（2）
9. 逆行列とクラメル公式
10. 演習
11. 行列の基本変形と階数
12. 連立1次方程式とはき出し法（1）
13. 連立1次方程式とはき出し法（2）
14. 演習
15. まとめ

5. 評価の方法・基準

試験および演習の結果で評価する。

評価方法の詳細は担当教員より通知する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) ネット上には種々の解説が出ているので、上記のキーワードなどで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効である。
- 2) うまく理解できない場合には、参考図書を数冊、見比べること。

7. 教科書・参考書

1. 池田敏春：基礎から線形代数（学術図書出版社）411.3/I-27

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

線形数学Ⅱ Linear Mathematics II

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位

担当教員名 西川 充

1. 概要

「線形数学Ⅰ」で学んできた知識をもとに、数ベクトル空間と線形写像に関する線形代数の基本的な事柄を引き続いて講義する。幾何学的観点からもそれらを解説し、理論の本質を理解する基礎力を身につけさせる。

2. キーワード

数ベクトル空間、基底、次元、線形写像、内積、固有値、行列の対角化

3. 到達目標

- ・ベクトルの1次独立性を理解し、部分空間の次元と基底を求めることができる。
- ・線形写像と行列の関係を理解し、線形写像の核と像を求めることができる。
- ・ベクトルの内積と長さの性質を理解し、部分空間の正規直交基底を構成できる。
- ・行列の固有値と固有ベクトルを求めることができ、対角化可能な行列を対角化できる。

4. 授業計画

1. 数ベクトル空間と部分空間
2. 1次独立と1次従属
3. 基底と次元（1）
4. 基底と次元（2）
5. 演習
6. 線形写像と行列の対応
7. 線形写像の核と像
8. ベクトルの内積と長さの性質
9. 正規直交系
10. 演習
11. 固有値と固有ベクトル
12. 行列の対角化（1）
13. 行列の対角化（2）
14. 演習
15. まとめ

5. 評価の方法・基準

試験および演習の結果で評価する。

評価方法の詳細は担当教員より通知する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 本講義が十分に理解できるためには、「線形数学Ⅰ」を修得していることが望ましい。
- 2) ネット上には種々の解説が出ているので、上記のキーワードなどで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効である。
- 3) うまく理解できない場合には、参考図書を数冊、見比べること。

7. 教科書・参考書

1. 池田敏春：基礎から線形代数（学術図書出版社）411.3/I-27

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

解析学Ⅲ Analysis III

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 永井 敏隆

1. 概要

工学諸分野において様々な現象が微分方程式により表現される。それらの現象を扱っていくためには微分方程式論の理解が必須となる。本講義の目的は微分方程式論への入門であり、常微分方程式をとりあげて、この解き方（解法）と理論の一端を紹介する。解法では求積法と演算子法を述べて、基礎的な知識を修得させる。さらに、ラプラス変換による微分方程式の解法について述べる。

2. キーワード

変数分離形、同次形、線形常微分方程式、ラプラス変換

3. 到達目標

- ・代表的な 1 階常微分方程式の解法ができる。
- ・基本的な n 階線形常微分方程式の解法ができる。
- ・ラプラス変換を用いた微分方程式の解法ができる。

4. 授業計画

- 第 1 回 1 階常微分方程式－変数分離形
- 第 2 回 1 階常微分方程式－同次形
- 第 3 回 1 階常微分方程式－完全形
- 第 4 回 1 階線形常微分方程式
- 第 5 回 クレーローの微分方程式
- 第 6 回 n 階線形常微分方程式
- 第 7 回 定数係数 n 階線形同次微分方程式
- 第 8 回 定数係数 n 階線形非同次微分方程式
- 第 9 回 演算子法
- 第 10 回 オイラーの微分方程式
- 第 11 回 初等関数のラプラス変換
- 第 12 回 ラプラス変換の基本法則
- 第 13 回 微分方程式の初期値問題・境界値問題
- 第 14 回 演習
- 第 15 回 まとめ

5. 評価の方法・基準

評価方法の詳細は担当教員より通知する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 本講義が十分に理解できるためには、「解析学Ⅰ」及び「解析学Ⅱ」を修得していることが望ましい。
- 2) 各回の講義を受けるに際しては、事前に教科書の該当箇所を目を通し、必要に応じて関連する既修得科目の復習をしておくこと。
- 3) 講義後には、各節末の問を解いてみること。
- 4) ネット上には種々の解説が出ているので、キーワード＝微分方程式、などで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効。
- 5) 理解を深めるためにも、参考書や他の微分方程式関連の図書を数冊見比べること。

7. 教科書・参考書

●教科書

水本久夫：微分方程式の基礎（培風館）413.6/M-57

●参考書

杉山昌平：工科系のための微分方程式（実教出版）413.6/S-82

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第 1 回の講義のときに指定する。

複素解析学 Complex Analysis

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位
担当教員名 酒井 浩

1. 概要

本講義では、複素解析学の初等的知識を与え、工学の研究に必要な基礎的常識の育成を目的とする。複素関数における微分・積分の計算法を示し、応用上重要な正則関数に対するコーシーの積分定理・積分表示、複素関数の諸展開、留数定理へと言及する。

2. キーワード

正則関数、複素微分、複素積分、コーシーの積分定理、留数定理

3. 到達目標

複素関数における微分・積分の基礎の修得

4. 授業計画

- 第 1 回 複素数と複素関数
- 第 2 回 指数、三角、対数関数
- 第 3 回 複素微分とコーシーリーマンの式
- 第 4 回 正則関数の性質を用いる複素微分
- 第 5 回 複素積分（その 1）
- 第 6 回 複素積分（その 2）
- 第 7 回 講義の復習・演習
- 第 8 回 コーシーの積分定理
- 第 9 回 コーシーの積分表示
- 第 10 回 テーラー展開
- 第 11 回 ローラン展開
- 第 12 回 孤立特異点と留数定理
- 第 13 回 留数定理の応用
- 第 14 回 演習
- 第 15 回 まとめ

5. 評価の方法・基準

試験（100％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 本講義が十分に理解できるためには、「解析学Ⅰ」及び「解析学Ⅱ」を修得していることが望ましい。
- 2) ネット上には種々の解説が出ているので、キーワード＝複素解析、などで検索、確認し、簡単な読み物を読んでみる。ウィキペディアなどの百科事典も概略の把握には有効。
- 3) うまく理解できない場合には参考図書を数冊見比べること。

7. 教科書・参考書

●教科書

樋口・田代・瀧島・渡邊：現代複素関数通論（培風館）413.5/H-44

●参考書

- 1) 青木・樋口：複素関数要論（培風館）413.5/A-28
- 2) 梯：複素関数（秀潤社）413.5/K-62

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第 1 回の講義のときに指定する。

統計学 Statistics

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 藤田 敏治

1. 概要

確率論の考察や統計的推測の能力は工学全般にわたってますます重要度を増している。この講義は、確率的な（不確定な）現象に対する基本的な概念を与えると同時に、このような現象を解析するための統計的方法を解説する事を目的とする。統計学的な見方・考え方を理解するために必要な数学的基礎にも重点をおき、統計学を応用していくうえでの基礎を築く。

2. キーワード

確率、確率変数、分布関数、推定問題、仮説の検定、回帰、相関

3. 到達目標

- ・確率論の基礎（確率変数、確率分布、平均と分散など）を習得する。
- ・代表的な確率分布を理解し応用できる。
- ・推定・検定の考え方を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 データ解析の基礎
- 第2回 事象
- 第3回 確率
- 第4回 順列と組み合わせ
- 第5回 確率変数、確率分布
- 第6回 分布の平均と分散
- 第7回 2 項分布、ポアソン分布、超幾何分布
- 第8回 正規分布
- 第9回 いくつかの確率変数の分布
- 第10回 ランダム抽出とパラメータの推定
- 第11回 信頼区間
- 第12回 仮説の検定、決定
- 第13回 回帰分析、相関分析
- 第14回 演習
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

試験（100％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 本講義が十分に理解できるためには、「解析学Ⅰ」及び「解析学Ⅱ」を修得していることが望ましい。
- 2) 各回の講義を受けるに際しては、事前に教科書の該当箇所にも目を通し、必要に応じて関連する既修得科目の復習をしておくこと。
- 3) 講義後には、各節末の問題を解いてみる。
- 4) 図書館には確率や統計に関連した図書が多数あります。知識の幅を広げたり、理解を深めたりするために、それらの図書にも目を通すこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

クライツィグ：確率と統計（技術者のための高等数学7）（培風館）410/K-5-8/7

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

物理学Ⅰ Fundamental Physics I

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：4 単位

担当教員名 鎌田 裕之・出口 博之・西谷 龍介・

美藤 正樹・渡辺 真仁・高木 精志・岡本 良治

1. 概要

●授業の背景

物理学は工学の自然科学的な基礎として、その方法と考え方を身につけることは必要不可欠である。

●授業の目的

自然現象に対する物理的なものの見方、考え方、すなわち、物理の原理・法則性の認識と法則の定量的な取扱い方を会得させ、物理学の理工学への多岐にわたる応用のための基礎的知識を習得させる。よく用いられる極座標、多変数の微積分学、ベクトル解析の初歩および常微分方程式の数学的知識・手法については必要に応じて教授する。

●授業の位置付け

理工系の大学における基礎教育の必修科目である。専門科目を習得する上での基礎となる。

2. キーワード

速度と加速度、運動方程式、運動量、仕事とエネルギー、角運動量、トルク（力のモーメント）、非慣性系と慣性力、多粒子系、重心運動と相対運動、慣性モーメント、回転運動、見かけの力

3. 到達目標

- ・運動方程式をたてられるようになる。
- ・ベクトル量としての物理量の取り扱いに慣れる。
- ・微積分法を駆使して粒子の力と運動を解析する能力を習得する。
- ・多粒子系と剛体の平面運動を解析する能力を習得する。

4. 授業計画

- 第1回 物理学と科学技術（ガイダンス）
- 第2回 速度と加速度（1）
- 第3回 速度と加速度（2）
- 第4回 運動の法則と力の法則（1）
- 第5回 運動の法則と力の法則（2）
- 第6回 力と運動（1）
- 第7回 力と運動（2）
- 第8回 力と運動（3）
- 第9回 中間試験（1）
- 第10回 単振動（1）
- 第11回 単振動（2）
- 第12回 減衰振動
- 第13回 仕事とエネルギー（1）
- 第14回 仕事とエネルギー（2）
- 第15回 仕事とエネルギー（3）
- 第16回 粒子の角運動量とトルク（1）
- 第17回 粒子の角運動量とトルク（2）
- 第18回 粒子の角運動量とトルク（3）
- 第19回 中間試験（2）
- 第20回 2 粒子系の重心運動と相対運動（1）
- 第21回 2 粒子系の重心運動と相対運動（2）
- 第22回 多粒子系の重心
- 第23回 多粒子系の運動量と角運動量
- 第24回 剛体のつりあい
- 第25回 剛体の慣性モーメント
- 第26回 固定軸の周りの剛体の回転
- 第27回 剛体の平面運動
- 第28回 加速度系と慣性力
- 第29回 回転系と遠心力・コリオリの力
- 第30回 まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験1（20％）、中間試験2（20％）、期末試験（30％）、レポート（30％）で評価する。
60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日の復習が必要である。
関連する数学の講義内容を理解していれば、本講義の理解はより深く、確実になる。

7. 教科書・参考書

●教科書

教科書は各教員がそれぞれ定める。

●参考書

- 1) 原康夫：物理学基礎（第4版）（学術図書出版社）ISBN 4-7806-0217-3 420/H-29/4
- 2) 鈴木芳文・近浦吉則：Mathematicaで実習する基礎力学（培風館）423/S-28
- 3) 鈴木賢二・伊藤祐一：物理学演習1－力学－（学術図書）423/S-31
- 4) D.ハリディ/R.レスニック/J.ウォーカー：物理学の基礎 [1] 力学（培風館）423/H-17

8. オフィスアワー

教員により設置が異なる。以下のHPを参照。

<http://www.mns.kyutech.ac.jp/~kamada/officehour>

物理学ⅡA Fundamental Physics II A

学年：1年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2単位

担当教員名 美藤 正樹・山田 宏・西谷 龍介・河野 道郎

1. 概要

●授業の背景

物理学諸分野において、波動現象及び熱学は、力学・電磁気学と並んで基礎科目である。

●授業の目的

波動現象を数学的に記述し、干渉や回折現象について学ぶ。理想気体の熱的性質を理解し、熱力学第1法則と第2法則について学ぶ。また、エントロピーの概念を用いて状態変化を理解する。

●授業の位置付け

理工系の大学における基礎科目である。専門科目を習得する上での基礎となる。

2. キーワード

波、振幅、位相、干渉、回折、熱平衡状態、相、理想気体、熱力学第1法則、熱力学第2法則、エントロピー

3. 到達目標

- ・波動現象の数学的取り扱いに習熟する。
- ・波としての光の性質を理解する。
- ・熱の概念について理解する。
- ・熱力学の法則を用いて気体の状態変化を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 波動を表す関数（振幅と位相）
- 第2回 波動方程式の解とその重ね合わせ
- 第3回 反射、屈折、干渉、回折
- 第4回 波の分散と群速度
- 第5回 光の反射、回折と干渉
- 第6回 単スリットと回折格子
- 第7回 中間試験
- 第8回 熱と温度、熱の移動
- 第9回 気体分子運動論
- 第10回 熱力学第1法則
- 第11回 いろいろな熱力学的変化
- 第12回 熱力学第2法則
- 第13回 カルノー・サイクルと熱機関の効率限界
- 第14回 エントロピー増大の原理
- 第15回 まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）、レポートの結果（30%）で評価する。

60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日の復習が必要である。
関連する数学の講義内容を理解していれば、本講義の理解はより深く、確実になる。

7. 教科書・参考書

●教科書

教科書は各教員がそれぞれ定める。

●参考書

- 1) 原康夫：物理学基礎（第4版）（学術図書出版社）ISBN 4-7806-0217-3 420/H-29/4
- 2) 原康夫：物理学通論Ⅰ（学術図書出版社）420/H-25/1
- 3) D.ハリディ/R.レスニック/J.ウォーカー：物理学の基礎 [2] 波・熱（培風館）424/H-7
- 4) S. J. Blundell他：Concepts in Thermal Physics (Oxford) ISBN 978-0-19-956210-7 426/B-3

8. オフィスアワー

教員により設置が異なる。以下のHPを参照。

<http://www.mns.kyutech.ac.jp/~kamada/officehour>

物理学ⅡB Fundamental Physics II B

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：2 単位
 担当教員名 高木 精志・山田 知司・石崎 龍二・
 津留 和生・松平 和之・岡本 良治

1. 概要

●授業の背景

物理学諸分野において、電磁気学は、力学と並んで基礎科目である。

●授業の目的

電磁気学の基本的で重要な部分について、特に真空における電磁気学について詳しく講義する。

●授業の位置付け

理工系の大学における基礎科目である。専門科目を習得する上での基礎となる。

2. キーワード

静電場、ガウスの法則、電位、ローレンツ力、電流と磁場、電磁誘導、マクスウェル方程式

3. 到達目標

- ・電磁気現象の数学的取り扱いに習熟する。
- ・電場の概念を理解する。
- ・磁場の概念を理解する。
- ・電磁誘導を理解する。
- ・マクスウェル方程式の内容を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 クーロンの法則と電場
 第2回 ガウスの法則
 第3回 ガウスの法則の応用
 第4回 電位
 第5回 導体と静電場
 第6回 電流とオームの法則
 第7回 中間試験
 第8回 磁場とローレンツ力
 第9回 ビオ・サバールの法則
 第10回 ビオ・サバールの法則とその応用
 第11回 アンペールの法則とその応用
 第12回 電磁誘導（1）
 第13回 電磁誘導（2）
 第14回 変位電流とマクスウェルの方程式
 第15回 まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）、レポート（30%）で評価する。

60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日の復習が必要である。関連する数学の講義内容を理解していれば、本講義の理解はより深く、確実になる。

7. 教科書・参考書

●教科書

教科書は各教員がそれぞれ定める。

●参考書

- 1) 原康夫：物理学基礎（第4版）（学術図書出版社）ISBN 4-7806-0217-3 420/H-29/4
- 2) キッテル他：パークレー物理学コース、1-6（丸善）420/B-9
- 3) 原康夫：物理学通論Ⅱ（学術図書出版社）420/H-25/1
- 4) ファインマン他：ファインマン物理学（岩波書店）420/F-5
- 5) D.ハリディ/R.レスニック/J.ウォーカー：物理学の基礎 [3] 電磁気学（培風館）427/H-18
- 6) 鈴木賢二・高木精志：物理学演習－電磁気学－（学術図書）427

8. オフィスアワー

教員により設置が異なる。以下のHPを参照。

<http://www.mns.kyutech.ac.jp/~kamada/officehour>

物理学実験 Practical Physics

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：1 単位
 担当教員名 高木 精志・太田 成俊・能智 紀台

1. 概要

●授業の背景

物理学は工学の自然科学的な基礎の学問である。その方法と考え方を実験を通して身につけることは必要不可欠である。

●授業の目的

- 工学基礎としての物理学実験では、以下の3つの目的がある。
- ①物理学の原理・法則性を抽象的に理解するだけでなく、実験にもとづいて体得すること。
 - ②物理実験の基本的方法を習得し、実験装置の使用に習熟すること。
 - ③報告書の作成の訓練を行うこと。

●授業の位置付け

物理学Ⅰ、物理学ⅡA及び物理学ⅡBなどで学習した物理学の原理・法則性を実験に基づいて体得する。

また物理学実験は理工学の種々の研究実験に共通する基礎的実験法の学習という重要な役割を担っている。

2. キーワード

力学、熱学、光学、電磁気学、原子物理学、コンピュータ・シミュレーション

3. 到達目標

1. 種々の基本的物理現象を実験を通して理解する。
2. 基礎的な測定方法を習得する。
3. 基本的実験機器の使用方法を習得する。
4. 測定データの取り方、記録方法を習得する。
5. 測定データの誤差評価方法を習得する。
6. 種々のグラフの使い方を習得する。
7. グラフより実験式の求め方を習得する。
8. 実験データの解析方法を習得する。
9. レポートのまとめ方、記述方法を習得する。

4. 授業計画

- 第1回 物理学実験についての講義（注意事項、データ処理および安全教育）
 第2回 物理学実験準備演習（測定器具使用法、グラフ利用法、データ処理方法など）
 第3回～第14回

力学、熱学、光学、電磁気学、原子物理学に関する14種の独立な実験テーマを準備している。これらのテーマの中から適当に割当てて実験を行なわせる。

実験テーマの例

- (1) ボルダの振子
- (2) ヤング率
- (3) 空気比熱比
- (4) 熱電対の起電力
- (5) 光のスペクトル
- (6) ニュートン環
- (7) 回折格子
- (8) 光の回折・干渉
- (9) 電気抵抗
- (10) 電気回路
- (11) 等電位線
- (12) オシロスコープ
- (13) 放射線
- (14) コンピュータ・シミュレーション

第15回 実験予備日

5. 評価の方法・基準

原則として割当てられた実験テーマの実験をすべて行い、そのレポートをすべて提出することが合格の必要条件となる。実験中の態度（20%）およびレポートの内容（80%）によって総合的に評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

上記の目的を達成するためには、単に教科書の指示どおりに測定をした、計算をした、というのでは実効をあげえない。そこで、実験を行う前日までに、実験計画を立て当日の実験と実験結果の検討・考察を効果的に行い、物理的なものの見方、考え方を身につけるような学習実験態度が必要である。

7. 教科書・参考書

西谷龍介・鈴木芳文・出口博之・高木精志・近浦吉則：新編「物理学実験」（東京教学社）ISBN：9784808220624

8. オフィスアワー

各担当教員によって異なるので、初回の講義時に通知する。

解析力学・剛体力学

Analitical Mechanics and Rigid Body Dynamics

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 津留 和生

1. 概要

●授業の背景

工学諸分野において、力学法則を現実の系に応用する力は必須である。

●授業の目的

物理学 I で学んだ力学の基礎知識を運用して工学上の問題をモデル化し、これを解く応用力を養う。

●授業の位置付け

理工系の大学における基礎科目である。専門科目を習得する上での基礎となる。

2. キーワード

剛体、角運動量、トルク、慣性モーメント、変分原理、ラグランジュ方程式、ハミルトンの方程式、基準振動

3. 到達目標

- ・慣性モーメントが計算できるようになる。
- ・剛体の運動について運動方程式をたてられるようになる。
- ・剛体の運動の運動方程式を解くことができる。
- ・変分原理・最小作用の原理を理解する。
- ・ラグランジュ方程式を解いて多粒子系と剛体の運動が解析できる。

4. 授業計画

- 第1回 粒子と粒子系の力学（復習）から剛体力学、解析力学へ
 第2回 剛体の力学（1）基礎：慣性モーメント
 第3回 剛体の力学（2）回転：角運動量とベクトル積、オイラー方程式
 第4回 剛体の力学（3）微小振動と安定性：固定点の周りの振動、安定点の周りの振動
 第5回 剛体の力学（4）オイラー角、慣性テンソル、慣性主軸
 第6回 剛体の力学（5）固定点の周りの自由回転：対称コマの歳差と章動
 第7回 中間試験
 第8回 物理と変分原理・最小作用の原理：ニュートン力学から解析力学への発展
 第9回 ラグランジュ方程式の導出
 第10回 ラグランジュ方程式の応用（1）：単振動、単振子、伸縮する振子
 第11回 ラグランジュ方程式の応用（2）：基準振動解析（2重振子、2原子分子）
 第12回 ラグランジュ方程式の応用（3）：基準振動解析（1次元格子振動）
 第13回 ハミルトンの正準方程式（1）：ラグランジアンとハミルトニアン
 第14回 ハミルトンの正準方程式（2）：位相空間、調和振動子
 第15回 まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）、レポート（30%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日の復習が必要である。関連する数学の講義内容を理解していれば、本講義の理解はより深く、確実になる。

7. 教科書・参考書

●教科書

教科書は各教員がそれぞれ定める。

●参考書

- 1) 原康夫：物理学通論Ⅱ（学術図書出版社）420/H-25/2
- 2) 宮下精二：解析力学（裳華房）423/M-11 ISBN 4-7853-2090-7
- 3) ファインマン他：ファインマン物理学（岩波書店）420/F-5
- 4) 阿部龍蔵：力学 [改訂版]（サイエンス社）423/A-16

8. オフィスアワー

教員により設置が異なる。以下のHPを参照。

<http://www.mns.kyutech.ac.jp/~kamada/officehour>

化学Ⅰ Chemistry I

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 大賀 一也

1. 概要

●授業の背景

化学は物質の構造とその性質を取り扱う学問であり、いわゆる化学系でない学生にとっても、それぞれの分野で用いられる材料・新素材に関連した化学、あるいは生命の化学、環境の化学など様々な形で化学の基本を理解していることが求められる。また、物理学や生物学とも関連付けた理解が重要である。

●授業の目的

我々の身の周りに存在する物質、あるいは各種の産業の場において生産・使用される諸々の化学物質について、それらの構造や物理的・化学的性質および反応性が、どのような原理・法則によっているのかを理解する。「化学Ⅰ」では、まず（1）個々の原子・分子の構造や反応性を電子状態、化学結合など微視的観点から理解し、次いで（2）原子・分子の集団としての振る舞いについて巨視的観点から学習する。

●授業の位置付け

高等学校で履修した物理や化学の学習内容を復習し発展させながら、原子の構造、化学結合と分子、分子間の相互作用、さらには原子・分子の集合体としての物質の状態を理解する。重要なことは、個々の知識を有機的に組み合わせることによって化学的事象を総合的に把握することであり、それによって化学をより深く理解できるようになることである。

2. キーワード

原子構造、分子構造、電子配置、化学結合、相図

3. 到達目標

- ・原子、分子、イオンなど、物質を構成する要素について説明できる。
- ・原子の構造、元素の周期律について説明できる。
- ・化学結合の様式を基に分子や物質の化学的性質・状態を説明できる。
- ・物質の三態の特性について説明できる。

4. 授業計画

- 第1回 化学の世界
 第2回 単位と測定値の扱い
 第3回 原子の構造（ボーアのモデル、電子の波動性）
 第4回 原子の構造（原子軌道、電子配置）
 第5回 原子の構造（周期表、元素の分類・性質）
 第6回 化学結合（イオン結合、共有結合）
 第7回 中間試験
 第8回 化学結合（分子軌道、配位結合）
 第9回 化学結合（金属結合、分子間力）
 第10回 分子の形（分子の立体構造、混成軌道）
 第11回 化学量論（モルの概念、化学反応式）
 第12回 物質の三態（相図、気体の状態方程式）
 第13回 物質の三態（液体）
 第14回 物質の三態（個体）
 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

中間試験（40%）と期末試験（60%）で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

大筋では教科書に従うが、関連した内容を含めて授業を進める。

7. 教科書・参考書

●教科書

小林憲司、三五弘之、中村朝夫、南澤宏明、山口達明 編著：「化学の世界への招待」（三共出版）

●参考書

- 1) A.Sherman他著、石倉洋子他訳：「化学－基本の考え方を中心に－」（東京化学同人）430/S-21
- 2) 井上祥平著：「化学－物質と材料の基礎－」（化学同人）430/I-12

8. オフィスアワー

初回の授業時に通知する。

化学Ⅱ Chemistry II

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位
担当教員名 大賀 一也

1. 概要

●授業の背景

前学期の「化学Ⅰ」に引き続き、化学の基礎的な内容について理解を深め、それぞれの分野で用いられる材料・新素材に関連した化学、あるいは生命の化学、環境の化学など様々な領域における化学的思考力を身につけることが求められている。

●授業の目的

(1) 燃焼などの化学変化に伴う熱の出入り、変化の進行方向、あるいは平衡状態の達成などを取り扱う化学熱力学、(2) 電解質溶液、酸と塩基、緩衝溶液、および(3) 反応の速度について学ぶとともに、(4) 電極反応や電極電位、電池の構成を中心とした電気と化学のつながりや(5) 原子核の崩壊・分裂について理解する。

●授業の位置付け

「化学Ⅰ」に引き続いて「化学Ⅱ」では、原子・分子の集合体としての物質を主に巨視的な観点から取り扱う。「化学Ⅰ」と同様に、個別の知識を有機的に組み合わせることによって化学的事象を総合的に把握し、それによって化学をより深く理解できるようになることが重要である。

2. キーワード

化学熱力学、化学平衡、反応速度論、電気化学

3. 到達目標

- ・水溶液における電解質、酸と塩基、緩衝作用などの概念を把握する。
- ・化学変化の速度、反応の次数、反応機構、素反応、律速段階、活性化エネルギー、触媒反応などに関する説明や計算ができる。
- ・電池とそれを構成する電極で起こる化学反応、電池の起電力と電極電位、電気分解などについて説明や計算ができる。
- ・エンタルピー、エントロピー、自由エネルギー、化学平衡などの意味を理解し、熱力学第一法則および熱力学第二法則を説明できる。

4. 授業計画

- 第1回 化学平衡の原理(質量作用の法則、ルシャトリエの原理)
- 第2回 溶解と沈殿
- 第3回 酸と塩基(定義、強弱)
- 第4回 酸と塩基(中和反応、中和滴定、緩衝溶液)
- 第5回 酸化と還元(定義、酸化数、酸化還元反応)
- 第6回 電気化学(電池、電極電位)
- 第7回 中間試験
- 第8回 電気化学(電気分解、電気透析)
- 第9回 化学反応の速度(反応速度式、反応機構)
- 第10回 化学反応の速度(速度定数の温度依存性、触媒の働き)
- 第11回 化学反応と熱(エンタルピー)
- 第12回 化学反応の自発性(エントロピー、自由エネルギー)
- 第13回 三態以外の状態(液晶など)
- 第14回 物質材料の化学
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

中間試験(40%)と期末試験(60%)で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

大筋では教科書に従うが、関連した内容を含めて授業を進める。

7. 教科書・参考書

●教科書

小林憲司、三五弘之、中村朝夫、南澤宏明、山口達明 編著：「化学の世界への招待」(三共出版)

●参考書

- 1) A.Sherman他著、石倉洋子他訳：「化学－基本の考え方を中心に－」(東京化学同人) 430/S-21
- 2) 井上祥平著：「化学－物質と材料の基礎－」(化学同人) 430/I-20

8. オフィスアワー

初回の授業時に通知する。

化学実験B Chemical ExperimentB

学年：1 年次 学期：前期または後期 単位区分：必修
単位数：1 単位

担当教員名 荒木 孝司・清水 陽一・柘植 顕彦・森口 哲次・高瀬 聡子

1. 概要

●授業の背景

工学を専攻する学生にとって基本的な実験操作技術を習得することは必要不可欠である。実験とレポート作成を通して、観察力、考察力を向上させることは、講義での理解をさらに深める。

●授業の目的

定性分析と定量分析の実験を行い、分析法の原理と化学実験の基本操作を習得する。

●授業の位置付け

「化学Ⅰ」、「化学Ⅱ」の内容を基礎として分析化学の原理を理解し、基本的実験技術を習得する。

2. キーワード

化学分析、定性分析、定量分析、中和滴定、沈殿滴定

3. 到達目標

- ・分析法の原理について理解できる。
- ・実験器具を適切に扱うことができる。
- ・実験結果から化学現象を論理的に考察することができる。
- ・操作、結果、考察をレポートにまとめることができる。

4. 授業計画

- 第1回 説明会1(安全教育と定性分析実験の基礎)
- 第2回 定性分析実験1(第1、2属陽イオンの分析)
- 第3回 演習1
- 第4回 定性分析実験2(第3属陽イオンの分析)
- 第5回 演習2
- 第6回 定性分析実験3(未知イオンの分析)
- 第7回 説明会2(定量分析実験の基礎)
- 第8回 定量分析実験1(中和滴定)
- 第9回 演習3
- 第10回 定量分析実験2(沈殿滴定)
- 第11回 演習4
- 第12回 無電解メッキ
- 第13回 演習5
- 第14回 環境科学センター見学
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

中間試験、期末試験およびレポートで評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

実験終了後一週間以内でのレポート提出を原則とする。

7. 教科書・参考書

●教科書

坂田一矩、吉永鐵太郎、柘植顕彦、清水陽一、荒木孝司：理工系、化学実験－基礎と応用－(東京化学社) 432/S-7

●参考書

高木誠司：改稿 定性分析化学 上中下巻(南江堂) 433.1/T-1

8. オフィスアワー

時間については、学期初めに掲示する。

メールアドレス：tsuge@che.kyutech.ac.jp、

shims@che.kyutech.ac.jp、araki@che.kyutech.ac.jp、

moriguch@che.kyutech.ac.jp、satoko@che.kyutech.ac.jp

図形情報科学 Science of Technical Drawings

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位
担当教員名 大島 孝治

1. 概要

●授業の背景

情報伝達手段として図形は重要な位置を占め、工学系においては図面で代表される。研究、設計、生産、納入検査、保守点検など、物にかかわる活動において図面は手放せないものであり、工学を修める者には図面の読み書き能力が最低限要求される。

●授業の目的

上記の要求に応えられるよう、ここでは、三次元空間における立体の二次元面への表示法およびその逆の場合に対する理論と技術を講義し、立体形状に対する的確な認識力、創造力、表現力を養成する。

●授業の位置付け

本講義で取り扱う内容は工学設計／製図のみならず、あらゆる分野で使用する図表現の基礎理論／技術として修得する必要がある。

2. キーワード

図形、情報、図学、設計、製図、三次元空間

3. 到達目標

- (1) 三次元空間における立体を正確かつ的確に二次元面へ表示できるようにする。
- (2) その逆もできるようにする。
- (3) 設計製図に対する基礎知識を修得する。

4. 授業計画

- 第1回 工学における図形情報処理の基本
- 第2回 投象法の基礎と投象図
- 第3回 立体の正投象と副投象
- 第4回 空間に置かれた直線の投象
- 第5回 空間に置かれた垂直2直線と平面の投象
- 第6回 交わる直線と平面の投象
- 第7回 交わる平面と平面の投象
- 第8回 交わる平面と立体の投象（断面図）
- 第9回 交わる平面と立体の投象（三次元切断線）
- 第10回 交わる多面体と多面体の投象
- 第11回 交わる多面体と曲面体の投象
- 第12回 交わる曲面体と曲面体の投象
- 第13回 立体表面の展開法
- 第14回 単面投象による立体的表示法
- 第15回 試験
- 第16回 試験解説等

5. 評価の方法・基準

期末試験結果と毎回行う作図演習レポートをほぼ同等に評価し、60 点以上を合格とする。ただし、講義への出席率が悪い場合（1／3 以上欠席）には、前述の評価結果にかかわらず再履修となる。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

教科書、演習問題、製図用具（コンパス、ディバイダ、三角定規）を持参して受講すること。講義内容を十分理解するためには、予習復習を必ず行うこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

金元敏明：製図基礎：図形科学から設計製図へ（共立出版）501.8/K-19

●参考書

- 1) 磯田 浩：第3角法による図学総論（養賢堂）414.9/I-2
- 2) 沢田詮亮：第3角法の図学（三共出版）414.9/S-11
- 3) 田中政夫：第三角法による図学問題演習（オーム社）414.9/T-3
- 4) 吉澤武男：新編 J I S 機械製図（森北出版）531.9/Y-7

8. オフィスアワー

前期：木曜 2、4 時限を除く随時
後期：月曜 2、3 時限、木曜 1、2 時限を除く随時

数値形状モデリング Numerical Modeling of Geometry

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位
担当教員名 金元 敏明

1. 概要

●授業の背景

マルチメディア時代では、コンピュータによる図形情報処理は必要不可欠になっている。理工学分野においては、計算機援用設計製図（CAD）、種々な機器の性能や強度などの理論解析（CAE）における物体形状や計算領域など、図形や形状情報の的確な把握と表現能力がとくに要求される。

●授業の目的

上記の要求に応えるため、ここでは、二次元および三次元形状に関する情報をコンピュータ内に構築するための基礎理論、汎用ソフトに多用されている図形処理関係の基礎理論、理論的な数値解析における計算領域や形状の数値表現法、実験で得られた離散データを連続量に変換して任意点における物理量などを推定する方法について、演習を交えながら講義する。

●授業の位置付け

本講義の内容は、理工学全分野において形状あるいは離散データを取り扱うときに要求される理論／技術である。これまでに見聞しない分野であり今後もないが、将来必ず役に立つので、ここで修得することが望ましい。なお、全国の大学でもこのような講義は極めて少ない。

2. キーワード

形状モデリング、数値表現、数値解析、図形処理、CAD、CAE、離散データ

3. 到達目標

- (1) 図形処理関係の基礎理論を修得する。
- (2) 実験等で得られた離散データを連続量に変換して任意点における物理量などを推定する方法を修得する。
- (3) 数値シミュレーションに関連した形状処理技術を習得する。

4. 授業計画

- 第1回 形状データとコンピュータ
- 第2回 スプライン曲線セグメントの形成
- 第3回 スプライン曲線の数値表現
- 第4回 数値解析におけるスプライン関数の有効利用とその応用 1
- 第5回 数値解析におけるスプライン関数の有効利用とその応用 2
- 第6回 最小二乗法による近似曲線の数値表現
- 第7回 物理量に対する最小二乗法の適用
- 第8回 ベズィエ関数による近似曲線とその特徴
- 第9回 ベズィエ曲線の数値表現
- 第10回 パッチによる曲面の数値表現
- 第11回 パッチの形成演習
- 第12回 座標変換、立体モデル、正・軸測投象変換
- 第13回 斜投象変換、透視投象変換・隠れ面処理の基礎
- 第14回 法線ベクトルによる隠れ面処理
- 第15回 試験
- 第16回 試験解説等

5. 評価の方法・基準

基本的には期末試験の結果を重視するが、出席状況や適時行う課題レポートも評価に加える（30%程度）。60 点以上を合格とするが、講義への出席率が悪い場合（1／3 以上欠席）には前述の評価結果にかかわらず再履修となる。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

形状の認識力を要するため、「図形情報科学」の科目を修得していることが望ましい。講義にはレポート用紙および電卓を持参すること。講義内容を十分理解するためには、予習復習を必ず行うこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

金元敏明：CAEのための数値図形処理（共立出版）549.9/K-58

●参考書

- 1) 峯村吉泰：BASICによるコンピュータ・グラフィックス（森北出版）549.9/M-297
- 2) 川合 慧：基礎グラフィックス（昭晃堂）549.9/K-397
- 3) 桜井 明：パソコンによるスプライン関数（東京電気大学出版）413.5/Y-12
- 4) 市田浩三：スプライン関数とその応用（教育出版）413.5/I-28

8. オフィスアワー

前期：木曜 2、4 時限を除く随時
後期：月曜 2、3 時限、木曜 1、2 時限を除く随時

建設社会工学演習 Introduction to Civil Engineering

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：1 単位

担当教員名 建設社会工学科全教員

1. 概要

●授業の背景

建設社会工学が対象としている分野と各分野での専門技術を生徒に紹介するために、全教員が担当するオムニバス形式の講義を行う。

●授業の目的

建設社会工学の各分野の専門技術とこれを支える工学基礎科目と工学専門科目との関連を理解し、建設社会工学に関する包括的な知識の習得することを目的とし、あわせて建設社会工学技術者としての問題意識形成にも重点をおいている。

●授業の位置付け

本授業は、建設社会工学が対象とする技術と大学で提供される工学基礎科目、工学専門科目との関連を示すもので、今後学生諸氏が修得すべき専門知識・技術の指針を与えるものである。

2. キーワード

建設社会工学、インフラストラクチャ、都市、河川、構造物、建築物

3. 到達目標

1. 建設社会工学が対象とする技術分野に関して包括的な知識を修得すること。
2. 建設社会工学技術者としての問題意識を自覚すること。

4. 授業計画

- 第1回 生活を豊かにする道の姿
- 第2回 バリアフリーとまちづくり
- 第3回 鋼橋のメンテナンス
- 第4回 風と構造物
- 第5回 橋の耐震補強
- 第6回 循環型社会と建設材料
- 第7回 インフラストラクチャのデザイン
- 第8回 生態学と環境計画
- 第9回 河川の水利と環境
- 第10回 魚のすみやすい川づくり
- 第11回 海岸・港湾工学－海岸防災と港湾建設
- 第12回 地盤災害－液状化と斜面災害－
- 第13回 大地を創る
- 第14回 多種多様な建築構造物
- 第15回 建築の計画と設計

5. 評価の方法・基準

毎回の講義で課されるレポートを10点満点で評価し、合計を講義回数で除して60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

毎回の講義で課されるレポートで成績が評価されるため授業への出席と、レポートの内容（自分で学んだことも含めるのが望ましい）が重視される。

7. 教科書・参考書

各教員が必要に応じて指定する。

8. オフィスアワー

各教員が他の授業で設けているオフィスアワーを参考にすること。

建設総合演習 Introductory Tutorials for Civil Engineering

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：1 単位

担当教員名 伊東 啓太郎

1. 概要

●授業の背景

学生生活を有意義なものとするためには、大学で何をどのように学ぶかといった知識・ノウハウはもちろんのこと、建設社会工学科を卒業した後の、自分の将来の選択肢に関して明確なイメージを持っていることが必要である。そこで、卒業生の代表的な就職先において、実際に活躍されている方々に特別講義をお願いし、仕事の内容・やりがいや、学生時代に身に付けておくべきことなどを紹介いただくことにより、就職やそのために必要なことを具体的にイメージできるようになることを期待している。また、大学の卒業研究や社会において直面する問題は、試験問題とは特性が全く異なる「工学的問題」である。工学的問題へのアプローチ法を学ぶとともに、卒業研究の現場となる研究室を少人数のグループに分かれて訪問することにより、大学における研究内容や手法を学ぶ。さらに、大学においては、一人の独立した社会人として行動することが期待されている。そのために必要な素養にはどのようなものがあるかを講義し、それらを念頭において行動することにより、卒業時までには確実に身に付けることが要望される。

●授業の目的

1. 建設社会分野において活躍している方々の話を伺うことで、卒業後の進路のイメージを明示する。
2. 卒業研究時に配属される研究室を訪問することで、研究内容や手法を実感させる。
3. 社会人としての素養や、グループディスカッションの手法、大学での勉学・研究手法、について講義して理解させる。

●授業の位置付け

建設社会工学科で有意義な4年間を過ごすための知識・ノウハウ・心構えを身に付けさせようとする、入門的授業である。

2. キーワード

ゼネラルコントラクター、建設コンサルタント、メーカー、工学的問題、社会人の素養

3. 到達目標

1. 大学卒業後の進路の選択肢について明確なイメージを持つこと。
2. 大学で行う研究や勉学といった活動の内容や手法を理解していること。
3. 社会人としての常識・素養について理解して実践できること。

4. 授業計画

- 第1回：建設業におけるプロジェクトの実際。発注者、建設コンサルタント、建設会社、メーカーの役割。
- 第2回：大学生活のヒント。どのように過ごすか大学をより活用できるか。
- 第3回：特別講義（1）建設会社
- 第4回：特別講義（2）建設コンサルタント
- 第5回：特別講義（3）公務員
- 第6回：特別講義（4）メーカー
- 第7回：特別講義（5）建築設計事務所、環境系コンサルタント
- 第8回：社会人としての素養とは何か
- 第9回：大学における研究の位置づけ
- 第10回：研究室訪問（1）
- 第11回：研究室訪問（2）
- 第12回：研究室訪問（3）
- 第13回：工学的問題へのアプローチの方法（1）
- 第14回：工学的問題へのアプローチの方法（2）
- 第15回：講義全体を通じたディスカッション

5. 評価の方法・基準

各回の授業に対して提出する小レポートに基づいて評価する。
全体で 60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

明確な目標を持って大学生活を送ることができるように、この講義を皆さんが十分に活用することを期待する。なお、特別講師のスケジュールなどにより、授業計画が変更になることもあるが、そうした場合は授業中に適宜案内する。興味をもった事柄について自分で調べるとともに、日々の生活やその計画において、学んだことを活かしてほしい。

7. 教科書・参考書

●教科書

なし

●参考書

必要に応じて、各時間に紹介または参考資料を配布する。

8. オフィスアワー

オフィスアワーは、第 1 回目の授業で確認し、かつ木村教員室の前に掲示してあるので、(なるべくその時間内に)積極的に質問に来て欲しい。質問はメール (kimura@civil.kyutech.ac.jp) でも受け付ける。

建設力学基礎及び演習

Fundamentals of Mechanics for Civil Engineers and Tutorial

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 松田 一俊

1. 概要

●授業の背景

建築物や、橋やトンネルなどの社会基盤施設の設計においては、建設中および供用後の安全性・使用性などを確保するために、構造各部に作用する力の特性を把握しておくことが不可欠である。そうした検討を行っていく上で必要となる基本的な知識である、建設力学の基礎について講義する。

●授業の目的

力のつり合い式のみによって作用する力が求められる静定構造の場合を対象として、構造物に作用する反力や、構造物を構成する部材に作用する断面力の、物理的意味や求め方を説明する。また、演習によって、反力や断面力を早く確実に求められる能力を身に付ける。さらに、応力・ひずみや構造材料の特性といった、材料力学の基礎についても説明する。

●授業の位置付け

建設力学基礎で習熟すべき内容は、構造力学 I、構造力学 II、建築設計製図、コンクリート構造工学、建設振動学、建設構造設計製図等多くの専門科目の内容を理解するための基本となるものであり、それらの履修のために必要である。

2. キーワード

静定構造、反力、軸力、せん断力、曲げモーメント、応力、ひずみ

3. 到達目標

1. 梁やラーメンなどの構造やそれを支持する支点の種類を理解し、力のつり合いから反力の大きさと向きを求められる。
2. 静定構造物の断面力の意味を正確に理解し、それらを求めて図示できる。
3. 応力・ひずみや構造材料の特性といった材料力学の基礎知識を理解する。

4. 授業計画

- 第 1 回 ガイダンス、構造物に関する基礎知識
- 第 2 回 反力の求め方 (1)
- 第 3 回 反力の求め方 (2)
- 第 4 回 反力の求め方 (3)
- 第 5 回 反力の求め方 (4)
- 第 6 回 断面力の求め方・断面力図 (1)
- 第 7 回 断面力の求め方・断面力図 (2)
- 第 8 回 断面力の求め方・断面力図 (3)
- 第 9 回 断面力の求め方・断面力図 (4)
- 第 10 回 中間試験
- 第 11 回 トラスの断面力 (格点法)、静定・不静定、安定・不安定
- 第 12 回 トラスの部材力 (断面法)、断面 1 次・2 次モーメント (基本)
- 第 13 回 断面 2 次モーメント (応用)
- 第 14 回 応力とひずみ、構成方程式、構造材料
- 第 15 回 部材の破壊と応力状態、二軸応力状態、平面応力状態

5. 評価の方法・基準

期末試験 (50%) および中間試験・小テスト (50%) の結果で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

本講義内容の習熟には、自分で問題を多く解き、理解度を高め、短時間で間違いなく正解が得られるよう演習を重ねることが不可欠である。宿題や演習中の課題だけでなく、参考テキストなどの演習問題などを積極的に自分で解いていくことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

米田昌弘：構造力学を学ぶー基礎編 (森北出版) 501.3/Y-43/1

●参考書

講義中に適宜指示するが、ここでは下記を挙げておく。

山本 宏・久保喜延著：わかりやすい構造力学 I (鹿島出版会) 501.3/Y-27-1

8. オフィスアワー

オフィスアワーおよび質問のための教員のメールアドレスは、第 1 回目の授業で確認する。

水理学基礎及び演習 Basic Hydraulics and Tutorial

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 重枝 未玲

1. 概要

●授業の背景

水理学は、水の運動を取り扱う学問であり、建設工学の分野のうち、河川工学、海岸・港湾工学、水環境工学などの基礎を形成する学問である。

●授業の目的

流体運動に関する基本的な考え方、質量、エネルギー、運動量保存等を用いた現象解析に関する基礎的な事項について説明する。

●授業の位置付け

「水理学基礎及び演習」は、2 年次選択必修の「水理学Ⅰ」、「水理学Ⅱ」や 3 年次選択必修または選択科目の「河川工学」、「水環境工学」、「海岸・港湾工学」を学習するための水理学に関する基礎知識を講義する。そのため、講義内容を十分習得する必要がある。

2. キーワード

流体、水、静水力学、質量・運動量・エネルギー保存、次元解析

3. 到達目標

- (1) 流体の基本的性質を理解する。
- (2) 静水力学を理解する。
- (3) 質量、エネルギー、運動量保存則、次元解析を用いた流体解析手法を理解する。
- (4) 壁面に作用する静水圧、管内の流速・圧力、管の曲がりや流体中の物体に作用する力を予測できる。

4. 授業計画

第1回 水理学概説・水理学に関連する物理法則

第2回 水の性質

第3回 静水力学（その1）

第4回 静水力学（その2）

第5回 静水力学（その3）

第6回 静水力学（その4）

第7回 流れの表示と連続の式

第8回 ベルヌーイの定理（その1）

第9回 ベルヌーイの定理（その2）

第10回 ベルヌーイの定理（その3）

第11回 運動量の定理（その1）

第12回 運動量の定理（その2）

第13回 次元解析

第14回 流れの方程式

第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（100％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義後、演習を行う。解答できない問題がある場合には講義内容の復習を行い、その問題を再度解くこと。また、教科書の例題や章末問題に取り組むこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

小松利光・矢野真一郎 監修：新編 水理学（理工図書）517.1/A-8

●参考書

1) 樫東一郎：基礎土木工学全書 6 水理学Ⅰ（森北出版株式会社）517.1/T-3/1

2) 日野幹雄：明解水理学（丸善）517.1/H-7

3) 大西外明：最新 水理学Ⅰ（森北出版株式会社）510.8/S-2/4

4) 樫東一郎・荒木正夫：水理学演習上巻（森北出版株式会社）517.1/T-2/1

8. オフィスアワー

オフィスアワー：毎週水曜 5 限

メールアドレス：mirei@civil.kyutech.ac.jp

公共計画基礎

Introduction to the Infrastructure Planning

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 寺町 賢一

1. 概要

●授業の背景

建設技術の進歩は高速道路や長大橋などの大事業を可能とした。その一方で、これらは自然環境や周辺地域の人々の生活に多種多様なインパクト（影響）を与えている。それゆえ、現代の建設技術者には強くて安価な構造物を設計・施工するだけでなく、それを計画する段階でも重要な役割を果たすことが求められる。

●授業の目的

本授業では、建設技術者が計画を科学的に実行する際に必要な基礎知識と、それに関連する確率、統計学に関する数理手法を習得させる。

●授業の位置付け

後に続く関連専門科目（都市計画、都市交通計画、道路交通工学、地域計画と景観デザインなど）の基礎となる講義であるので十分な理解が必要である。

2. キーワード

土木計画、データの整理、区間推定、検定、標本設計

3. 到達目標

1. 土木計画学の基礎知識と、それに関連する確率、統計学に関する数理手法を知り、それを理解する。
2. その基本的なもののいくつかについては、実際に利用できるようになる。

4. 授業計画

第1回 土木計画学の必要性

第2回 土木計画の要素と体系化

第3回 課題の明確化

第4回 調査データの整理

第5回 度数分布と平均値・分散

第6回 確率の計算と離散型確率変数の確率分布

第7回 4-6の講義の演習または補講

第8回 連続型確率変数の確率分布

第9回 正規分布

第10回 8-9の講義の演習または補講

第11回 中間試験

第12回 母平均の統計的推定法

第13回 母平均の統計的仮説検定法

第14回 様々な標本抽出法と単純無作為抽出法

第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（70％）と小テスト（30％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 自主的に学ぶ態度が重要である。授業の理解を深めるために講義中に演習を行うので、演習について復習をしっかり行うことが望ましい。
- 2) 講義中に実施する小テストをWEBにて公開しているので、講義終了後に各自復習すること。講義の十分な理解を得るために予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

なし

●参考書

1) 樫木 武他：土木計画数学Ⅰ（森北出版）513.1/C-2

2) 松本嘉司：土木解析法Ⅰ（技報堂）513.1/M-1

3) 松本嘉司他：土木解析法Ⅱ（技報堂）513.1/M-1

4) 樫木 武：土木計画学（森北出版）513.1/T-5

8. オフィスアワー

オフィスアワー：毎週金曜日 16：20～17：50

連絡先 電子メール：teramati@civil.kyutech.ac.jp

建築設計製図基礎

Fundamentals of Architectural Design and Drafting

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：1 単位

担当教員名 徳田 光弘・佐久間 治

1. 概要

●授業の背景

本科目は、建築の計画、設計、施工をする上で、不可欠な初歩的な技術と知識を習得するものである。

●授業の目的

三次元空間の思考・表現を体験することを通じて、建築空間を三次元として捉える能力と表現する技術を習得する。また、簡便な製作課題を通じて、建築行為に不可欠な用・強・美に対する理解を深め、建築設計の基本的な方法と技術を習得する。

●授業の位置付け

本科目は、以降に開講されている建築設計製図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの準備段階として位置付けられる。

2. キーワード

建築設計、建築計画、空間、デザイン、用強美

3. 到達目標

1. 三次元の空間を思考する基本的な能力を身につける。
2. 三次元の空間を二次元上に表現する基本的な能力を身につける。
3. 用・強・美に根差した立体物を創出するための基本的な技術を身につける。

4. 授業計画

- 第1回 空間の表現と創作（1）
- 第2回 空間の表現と創作（2）
- 第3回 空間の表現と創作（3）
- 第4回 空間の表現と創作（4）
- 第5回 透視図（1）
- 第6回 透視図（2）
- 第7回 透視図（3）
- 第8回 スツール製作（1）
- 第9回 スツール製作（2）
- 第10回 スツール製作（3）
- 第11回 スツール製作（4）
- 第12回 スツール製作（5）
- 第13回 スツール製作（6）
- 第14回 スツール製作（7）
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

各課題で提出される成果と各作業段階におけるプレゼンテーションによって成績を評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建築設計製図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを履修する前に、本科目を履修しておく必要がある。授業時間外にも課題に取り組み、成果物を仕上げる必要がある。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

- 1) 日本建築学会：建築設計資料集成、丸善 525.1/N-5
- 2) 「新しい建築の製図」編集委員会編：新しい建築の製図（学芸出版社）525.1/A-4/2
- 3) 大西正宜他：建築学テキスト建築製図（学芸出版社）525.1/O-6

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

情報リテラシー Computer and Network Literacy

学年：1 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 浅海 賢一・木村 広・真田 瑞穂・本山 晴子

1. 概要

工学においてコンピュータとネットワークを活用することは、情報の収集、資料の作成、表現力の向上のためにも重要である。情報科学センターの教育用コンピュータの利用方法を学び、在学中の勉強・研究に活用できるよう習熟する。

●授業の目的

情報化時代の読み書き能力を習得する。学内ネットワークの利用方法を理解し、以降の情報系科目の基礎となるコンピュータ活用能力を身につける。

●授業の位置付け

電子メール、オフィス、エディタなどの在学中に必要となるソフトウェアの利用方法を知り、コンピュータやインターネットに親しむ。

2. キーワード

インターネット、情報倫理、オフィス、ホームページ

3. 到達目標

- ・ワードプロセッサを使って文書を作成、印刷できること。
- ・コンピュータやインターネットの用語について熟知する。
- ・HTML言語を用いて自由にホームページを作成できること。
- ・キーボードを見ずに文字入力するタッチタイプに習熟する。

4. 授業計画

- 第1回 ログイン・ログアウト
- 第2回 ワードプロセッサ
- 第3回 電子メール
- 第4回 図書館システム
- 第5回 ファイルシステム
- 第6回 Linuxのコマンド
- 第7回 外部ストレージの利用
- 第8回 データ転送
- 第9回 リモートログイン
- 第10回 エディタ
- 第11回 インターネット
- 第12回 HTML（1）
- 第13回 HTML（2）
- 第14回 セキュリティ、情報倫理
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

レポート（40%）、試験（60%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

情報学習プラザのコンピュータ及びインターネットを授業時間外にもできる限り活用することが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。

●参考書

- 1) パパート：マインドストーム（未来社）375.1/P-1
- 2) 佐伯：コンピュータと教育（岩波新書）375.1/S-9, 081/I-2-3/332

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

情報PBL PBL on Computer Literacy

学年：1年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2単位
担当教員名 浅海 賢一・井上 創造・木村 広・三浦 元喜

1. 概要

前半には表計算・数式処理のためのアプリケーションの活用方法を学び、後半にはPBL (Project-Based Learning)を実施する。少人数(3～6人)のチームを構成し、チームごとにテーマの調査、作品の制作、プレゼンテーションを行う。テーマはコンピュータ科学を中心とする科学技術全般、ビジネスなどの分野から選ぶ。

●授業の目的

コンピュータを効果的に活用する実践力を獲得することを目的とする。コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、チームワーク能力の向上を図る。

●授業の位置付け

情報活用能力とプレゼンテーション技術は4年次に取り組む卒業研究を円滑に遂行するためにも体得しておく必要がある。

2. キーワード

課題解決型学習、情報活用能力、プレゼンテーション技術

3. 到達目標

- ・コンピュータを用いた問題解決能力を身につける。
- ・議論やプレゼンテーションを通した説得力を身につける。
- ・プレゼンテーションに情報技術を活用する。

4. 授業計画

- 第1回 表計算(1)－数式、関数、書式
- 第2回 表計算(2)－グラフ描画、統計関数
- 第3回 表計算(3)－検索関数、データベース関数
- 第4回 数式処理(1)－シンボル計算、組み込み関数
- 第5回 数式処理(2)－グラフィックス、ファイル入出力
- 第6回 数式処理(3)－代数方程式、常微分方程式
- 第7回 PBL(1)－グループ構成、プロジェクト立案
- 第8回 PBL(2)－検索サイト、テーマの理解と共有
- 第9回 PBL(3)－中間報告、テーマ調査のまとめ方
- 第10回 PBL(4)－作品の作成、ホームページ作成
- 第11回 PBL(5)－作品の作成、テーマ調査の仕上げ
- 第12回 PBL(6)－プレゼン準備、スライド作成
- 第13回 PBL(7)－プレゼン準備、発表練習
- 第14回 PBL(8)－発表会、相互評価
- 第15回 PBL(9)－発表会、相互評価

5. 評価の方法・基準

表計算のレポート(20%)、数式処理のレポート(20%)、作品とプレゼンテーション(60%)で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

前期の「情報リテラシー」をよく理解しておく必要がある。PBLでは主体的にテーマの調査に取り組み、メンバー間で協力しあうことが特に大切である。情報学習プラザのコンピュータ及びインターネットを授業時間外にもできる限り活用することが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。

●参考書

- 1) 金安岩男：プロジェクト発想法(中公新書)081/C-1/1626
- 2) 川喜田二郎：発想法(中公新書)507/K-4/1,2,081/C-1/136
- 3) 鶴保証城：ずっと受けたかったソフトウェアエンジニアリングの授業(1)(翔泳社)549.9/T-468

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

情報処理基礎 Elementary Course for Programming

学年：2年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2単位
担当教員名 井上 創造・三浦 元喜・平原 貴行

1. 概要

代表的なプログラミング言語の一つを取り上げ、プログラミングの基礎を講義する。演習を多く取り入れ、基本的な概念の習得に重点を置く。

●授業の目的

工学においてプログラミングは計算機を用いた制御や処理の自動化、データ処理や数値解析等に欠かせない技能の一つである。これ以外にもアプリケーションに備わっているプログラミング機能を利用する機会もある。将来の応用を見据えて、プログラミングの基本を身につけることが本講義の主目的である。また、プログラミングを通して、論理的思考能力を鍛えることも本講義の目的に含まれる。

●授業の位置付け

1年次の「情報リテラシー」「情報PBL」では主として既製のアプリケーションの利用方法を学んだが、コンピュータを思い通りに使うためにはプログラミングの知識が必要不可欠である。本科目の内容は、2年後期の「情報処理応用」において前提となっているだけでなく、3年次の情報系科目や卒業研究等においても必要とされることが多い。

2. キーワード

構造化プログラミング

3. 到達目標

- ・高級プログラミング言語に共通な概念を理解し習得する。
- ・基本的なプログラムの読解能力を身につける。
- ・基本的なプログラムの作成能力を身につける。

4. 授業計画

- 第1回 イントロダクション：プログラミングの役割
- 第2回 プログラムの基本構造、入出力と基本演算
- 第3回 条件分岐(1)
- 第4回 条件分岐(2)
- 第5回 繰り返し処理
- 第6回 制御構造の組み合わせ
- 第7回 配列
- 第8回 中間試験
- 第9回 関数(1)
- 第10回 関数(2)
- 第11回 ポインタの基礎(1)
- 第12回 ポインタの基礎(2)
- 第13回 構造体
- 第14回 ファイル処理
- 第15回 総括

5. 評価の方法・基準

レポート(30%)、中間試験(30%)、期末試験(40%)で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義を聴くだけではプログラミングは上達しない。自ら積極的に演習・課題に取り組む姿勢が望まれる。情報学習プラザのコンピュータ及びインターネットを授業時間外にもできる限り活用することが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

第1回目の講義の時までに指定する。

●参考書

- 1) カーニハン、リッチー「プログラミング言語C」(共立出版)549.9/K-116
- 2) ハンコック他「C言語入門」(アスキー出版局)549.9/H-119

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

情報処理応用 Practical Computer Programming

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 三浦 元喜・真田 瑞穂

1. 概要

前半は科学技術計算用に広く用いられているプログラミング言語 Fortran によるプログラミング法を講義する。演習を多く取り入れ実践的な使用法に重点を置く。後半は数値解析法の基礎を講義する。工学で取り扱う現象やモデルの中には方程式で記述されるものが少なくない。その方程式を解析的に解くことができる場合は限られており、多くの場合コンピュータを利用して数値解を求める方法を採用する。その中で用いられる基本的でありかつ代表的な手法を数値解析法基礎で講義する。

●授業の目的

Fortran はその利便性と汎用性により数値計算を中心とする科学技術計算向けのプログラミング言語である。プログラミング法の習得だけでなく、応用的な問題についてプログラミングから、結果を出してそれを評価することまでを一貫して行う能力を身につける。また、2 年前期に「情報処理基礎」で学んだプログラミングの技能を、数値解析を通してさらに伸ばす。

●授業の位置付け

2 年前期の「情報処理基礎」の知識を必要とする。本科目の内容は卒業研究等で数値計算を行う場合に必要となることが多い。

2. キーワード

プログラミング、Fortran、数値計算、数値積分、行列計算、常微分方程式の数値解法

3. 到達目標

- ・Fortran の基本文法（変数、配列、条件分岐、繰り返し、副プログラム）に習熟する。
- ・基礎的な数値解析法の各々の手法を理解する。
- ・簡単な数値計算の問題をFortranによる自作プログラムで解くことができる。

4. 授業計画

- 第1回 Fortran の基本文法
- 第2回 条件分岐と組み込み関数の利用
- 第3回 繰り返し処理と制御構造の組み合わせ
- 第4回 配列
- 第5回 副プログラム：サブルーチンと関数
- 第6回 ファイル処理、演習
- 第7回 中間試験
- 第8回 数値の表現と誤差
- 第9回 非線形方程式
- 第10回 数値積分
- 第11回 常微分方程式の数値解
- 第12回 補間と回帰
- 第13回 連立一次方程式
- 第14回 ライブラリの利用
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

レポートと演習（40%）、試験（60%）により評価する。
Fortran と数値解析法基礎はそれぞれ 50 点とし、計 100 点のうち 60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

「情報処理基礎」で学んだプログラミングの知識を前提とする。情報学習プラザのコンピュータ及びインターネットを授業時間外にもできる限り活用することが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

第1 回目の講義の時までに指定する。

●参考書

- 1) 服部裕司「C&Fortranによる数値計算プログラミング入門改訂版」（共立）418.1/H-32/2
- 2) 長嶋秀世著、数値計算法（改訂第3版）、朝倉書店 ISBN：9784254111194

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1 回の講義のときに指定する。

建築計画Ⅰ Architectural PlanningⅠ

学年：2 年次 学期：前期

単位区分：必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 徳田 光弘

1. 概要

●授業の背景

建築の企画や設計を適切に行うためには、人間の行動や意識と空間の大きさとの相互作用を理解することが重要である。

●授業の目的

建築計画の基礎として、建築空間の寸法体系と、設計に必要な人体と人間行動の基礎的寸法を学び、人間と建築空間の対応関係を理解するとともに適切に表現できる。

●授業の位置付け

建築設計製図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで必要となる基礎的な知識を習得し、建築の企画や設計に活かせることを目指す。

2. キーワード

寸法、実測、人体寸法、人間行動、建築空間の大きさ

3. 到達目標

- 1. 人体と人間行動に関する寸法を理解できる。
- 2. 建築空間の基本的な寸法を理解できる。
- 3. 学んだ寸法体系を適切に図面として表現できる。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 建築空間における寸法の役割
- 第3回 人体の寸法（1）
- 第4回 人体の寸法（2）
- 第5回 人間の基本行動と空間の大きさ・寸法（1）
- 第6回 人間の基本行動と空間の大きさ・寸法（2）
- 第7回 人間の基本行動と空間の大きさ・寸法（3）
- 第8回 人間の基本行動と空間の大きさ・寸法（4）
- 第9回 居住空間の平面計画（1）
- 第10回 居住空間の平面計画（2）
- 第11回 居住空間の平面計画（3）
- 第12回 居住空間の平面計画（4）
- 第13回 居住空間と断面計画（1）
- 第14回 居住空間と断面計画（2）
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果と、講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が 60 点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建築分野の基本となる科目の一つである。予習復習を行うとともに、建築設計演習科目と連動させて考えることが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

- 1) 藤森照信編：考現学入門（ちくま文庫）380/K-1
- 2) 西山卯三：住み方の記（筑摩叢書）520.4/N-1
- 3) 遠藤勝勸：見る測る建築（TOTO出版）525.1/E-1

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築計画Ⅱ Architectural Planning Ⅱ

学年：3 年次 学期：後期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 佐久間 治

1. 概要

●授業の背景

建築の企画や設計を適切に行うためには、人間の行動や意識と空間との相互作用や、社会や環境などといった要件と建築の関わりの知識を持っていることが重要である。

●授業の目的

建築の本質的な要件や、建築計画の意義と役割を具体的に理解し、建築設計に必要な知識と技法を習得する。

●授業の位置付け

建築設計製図基礎、建築設計製図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに関する理論的な知識を習得し、建築の企画や設計に活かせるようになることを目指す。

2. キーワード

空間の形態・機能・空間・行動、寸法と規模、計画プロセス、施設デザイン

3. 到達目標

1. 建築計画の意義と本質を広く理解する。
2. 建築を計画するために必要な視点、知識、技法を習得する。
3. 習得した建築計画の視点、知識、技法を活かして、豊かで新しい建築空間を創造・設計できる力を醸成する。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 建築プロセスと建築計画の意義と役割
- 第3回 計画の基礎 (1) 空間の形態
- 第4回 計画の基礎 (2) 機能・空間・行動
- 第5回 計画の基礎 (3) 寸法と規模
- 第6回 計画の基礎 (4) 環境の性能
- 第7回 計画の技法 (1) 計画プロセスの技法
- 第8回 計画の技法 (2) 空間構成の技法
- 第9回 計画から設計へ (1) 居住系施設
- 第10回 計画から設計へ (2) 教育系施設
- 第11回 計画から設計へ (3) 文化系施設
- 第12回 計画から設計へ (4) コミュニティ・福祉系施設
- 第13回 計画から設計へ (5) 業務・商業・交通系施設
- 第14回 計画から設計へ (6) 外部空間・都市デザイン・景観
- 第15回 まとめ

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果と、講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うとともに、建築設計演習科目と連動させて考えることが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

最初の講義の際に紹介する。

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建設環境工学 Architectural Environment Engineering

学年：2 年次 学期：後期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 穴井 謙

1. 概要

●授業の背景

建設環境には、熱・光・音・空気環境などの種々の分野がある。各々の分野の知識は、人が健康で快適な社会生活を営むための建築物を適切に設計するために必要である。

●授業の目的

主として建築物を対象として、建設環境工学の基礎を学ぶ。

●授業の位置付け

建設環境工学の基礎を修得し、建設環境の設計に活かせるようになることを目指す。

2. キーワード

熱環境、光環境、音環境、空気環境

3. 到達目標

1. 建築物を主な対象として、伝熱や換気等についての基礎力を修得し設計に活かせる。
2. 日照や採光等についての基礎力を修得し設計に活かせる。
3. 音環境の基礎を修得し設計に活かせる。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 空気環境と建築
- 第3回 空気中の汚染物質
- 第4回 換気計算
- 第5回 熱環境と建築
- 第6回 建築伝熱の解析
- 第7回 結露防止設計
- 第8回 光環境と建築
- 第9回 照度と輝度の計算
- 第10回 視環境の計画
- 第11回 音環境と建築
- 第12回 室内音響設計
- 第13回 騒音防止設計
- 第14回 建築環境と建築設備
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果（70%）と、講義中に課した演習・レポートの結果（30%）で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) <建築のテキスト>編集委員会 編：初めての建築環境（学芸出版社）525.1/K-15

●参考書

- 1) 浦野良美、中村洋 編著：建築環境工学（森北出版株式会社）525.1/U-2
- 2) 辻原万規彦 監修、今村仁美・田中美都 著：図説 やさしい建築環境（学芸出版社）ISBN：9784761524760

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建設設備 Architectural Facilities

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 穴井 謙

1. 概要

●授業の背景

建築等の種々の設備や、それらを運転するために必要なエネルギー供給設備に関する知識は、建築の機能や快適な空間を実現するために必要である。

●授業の目的

主として建築物を対象として、建設設備の概要と、空気調和設備、給排水設備、電気設備の基礎を学ぶ。

●授業の位置付け

建設設備の基礎を修得し、建設設備の最適設計の考え方を理解できるようになることを目指す。

2. キーワード

空気調和設備、給排水設備、電気設備

3. 到達目標

1. 建築物を主な対象として、空調設備の基礎を修得し設計に活かせる。
2. 給排水設備の基礎を修得し設計に活かせる。
3. 電気設備の基礎を修得し設計に活かせる。

4. 授業計画

第1回 ガイダンス

第2回 建築設備概要（その1）

第3回 建築設備概要（その2）

第4回 建築設備概要（その3）

第5回 空気調和設備（その1）、省エネルギーと空調熱負荷

第6回 空気調和設備（その2）、空調熱源システム

第7回 空気調和設備（その3）、空調プロセスと空調方式

第8回 空気調和設備（その4）、搬送システム

第9回 給排水設備（その1）、給水、給湯システム

第10回 給排水設備（その2）、排水システム

第11回 給排水設備（その3）、消火設備

第12回 電気設備（その1）、受変電・動力設備

第13回 電気設備（その2）、照明設備

第14回 電気設備（その3）、情報通信設備

第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果（70%）と、講義中に課した演習・レポートの結果（30%）で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) <建築のテキスト>編集委員会 編：初めての建築設備（学芸出版社）528/H-2

●参考書

- 1) 中村洋、渡辺俊行 編：建築設備計画（朝倉書店）528/N-1
- 2) 飯野秋成 著：図とキーワードで学ぶ 建築設備（学芸出版社）528/I-1

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築法規 Architectural Laws and Regulations

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 千坂 博

1. 概要

●授業の背景

建築物は、その用途や規模などに関して、種々の法規による規定を受けている。また、建築士などの資格も法規によって規定されている。建築物を設計する際には、各種法規について理解しておく必要がある。

●授業の目的

建築に関わる法規的な規制、基準、政策的な枠組みなどの目的・内容について理解することを目的とする。

●授業の位置付け

建築法規に関する理解を整理して深めるもので、建築設計製図で実習する建築物の設計作業と密接な関係がある。

2. キーワード

建築基準法、建築関連法規、建築行政、技術者倫理

3. 到達目標

1. 建築基準法・施行令の目的・内容・用語を理解し、法規に準拠した設計ができる。
2. 建築関連法（消防法等々）を理解し、設計や実務に反映できる。

4. 授業計画

第1回 建築行政概論

第2回 建築法規の体系

第3～4回 集団規定

第5～8回 単体規定

第9回 建築基準法の総括

第10回 建築士法概論と技術者倫理

第11～14回 建築基準法およびその他の関連法規の条文適用演習

第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果と、講義中の小テストおよび講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

編集 国土交通省住宅局建築指導課 建築技術者試験研究会
基本建築関係法令集〔法令編〕（榊屋が関出版社）520.9/K-7

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

環境デザインの歴史と展開

History and Development of Environmental Design

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 佐久間 治

1. 概要

●授業の背景

建築デザインにおいて、それらの歴史的な成り立ちを、社会背景や生活環境、技術の進歩等と関連付けて理解し、先人が何を考え、何故、そのような空間が創られたのかを、本質的に理解しておくことは、空間や環境を新しく創造する上で極めて大切である。

●授業の目的

建築デザインの歴史を、日本とヨーロッパを中心に、その風土、文化、社会、思想等の視点を交えて学ぶことで、空間・技術・意匠の特質とその時代や場所との関係を理解すると共に、それらが現代の建築や都市のデザインにどのような影響を与えているか、各自が自身の知見を醸成すること。

●授業の位置付け

建築計画Ⅰを履修していることが望ましい。また建築設計製図Ⅲで課題に取り組む際に、本講義で習得した理解が活用される。

2. キーワード

建築デザイン、日本建築史、西洋建築史、近代、現代、風土、時代

3. 到達目標

1. 建築デザインに関する歴史の流れを理解し説明できる。
2. 過去から現在にいたる国内国外の主要な建築デザイン作品について概観できる。
3. 空間の特質と時代や場所との関係について自分自信の知見を持つことで、それらの視点を今後の建築デザインの計画・設計提案や研究テーマに活かせる。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス（授業概観、建築史の意義）
- 第2回 風土と歴史
- 第3回 建築の起源、住居・集落・都市の形成
- 第4回 建築構造・構法・材料の変遷
- 第5回 古代四大文明
- 第6回 西洋建築史1：古代、ギリシア、ローマ
- 第7回 西洋建築史2：ビザンチン、ロマネスク、ゴシック、イスラム建築
- 第8回 西洋建築史3：ルネッサンス、バロック、ロココ、新古典
- 第9回 日本建築史1：古代（縄文、弥生、古墳）、神社建築
- 第10回 日本建築史2：寺院建築
- 第11回 日本建築史3：住宅、城下町・城郭等
- 第12回 近代建築史1：西洋
- 第13回 近代建築史2：日本
- 第14回 ランドスケープ・都市デザイン史
- 第15回 現代の空間デザイン

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果と、講義中の小テストおよび講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

国内外の建築物やランドスケープ、作品を普段から実際に見て回ることが重要である。

7. 教科書・参考書

別途紹介する。

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築一般構造Ⅰ Architectural General StructuresⅠ

学年：2 年次 学期：後期

単位区分：必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 毛井 崇博

1. 概要

●授業の背景

建築物を設計し構築するためには、荷重や外力の大きさを知る必要がある。建築基準法による荷重の算定方法を理解し、安全性・耐久性や造形の要求を満たすために、壁式構造、組積造、木質構造などの具体的な設計法を理解しておくことは重要である。

●授業の目的

建築構造物の柱や梁の断面の大きさを決定するために、建築構造物に作用する荷重の大きさの求め方を学ぶ。また、壁式鉄筋コンクリート構造と組積造や木質構造におけるの特徴と建築構法およびそれらの構造設計法をの概要について学ぶ。

●授業の位置付け

構造力学Ⅰを履修していること。また、建築設計製図で課題に取り組む際に、本講義で習得した理解が活用される。

2. キーワード

耐震設計、風圧力・地震力、許容応力度、壁式構造、木質構造

3. 到達目標

1. 荷重や外力の大きさを習得する。
2. 壁式構造・組積造や木質構造の建築構法と設計法の概要を習得する。
3. 建築物のデザインや構造設計に活かせるようにする。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス、アーチ構造
- 第2回 荷重と外力（荷重）
- 第3回 荷重と外力（風圧力）
- 第4回 荷重と外力（地震力）
- 第5回 耐震設計（1）
- 第6回 耐震設計（2）
- 第7回 耐震設計（3）
- 第8回 耐震設計（4）
- 第9回 壁式構造（1）
- 第10回 壁式構造（2）
- 第11回 組積構造
- 第12回 木質構造（1）
- 第13回 木質構造（2）
- 第14回 木質構造（3）
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間試験と期末試験の結果と、講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 松井千秋編著：建築鉄骨構造（オーム社）524.6/M-3/2

●参考

- 1) 今村仁美・山本宏著：図説やさしい建築一般講堂（学芸出版社）524/I-1
- 2) 建築関係法令集 520.9/K-9
- 3) 日本建築学会：木質構造設計規準・同解説・許容応力度・許容耐力設計法、524.5/N-1
- 4) 日本建築学会：壁式構造関係設計規準集・同解説（壁式鉄筋コンクリート造編）524.7/N-8/1
- 5) 日本建築学会：構造用教材 524/N-6/2

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築一般構造Ⅱ Architectural General StructuresⅡ

学年：3年次 学期：前期

単位区分：選択必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2単位

担当教員名 毛井 崇博

1. 概要

●授業の背景

建築物を構築する主要な方法として、鋼構造、鉄筋コンクリート構造が用いられている。安全性・耐久性や造形の要求を満たすために、どのように設計すべきかを理解しておくことは重要である。

●授業の目的

建築の鋼構造、鉄筋コンクリート構造の特徴と建築構法およびそれらの構造設計法や構造詳細の概要について学ぶ。

●授業の位置付け

構造力学Ⅰおよび建築一般構造Ⅰを履修していること。建築設計製図で課題に取り組む際に、本講義で習得した理解が活用される。

2. キーワード

鋼構造、接合法、鉄筋コンクリート構造、保有水平耐力、付着・定着

3. 到達目標

1. 建築鋼構造、鉄筋コンクリート構造の特徴や構工法の概要および設計法を習得する。
2. それらを建築物のデザインや構造設計に活かせるようにする。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス、鋼の歴史
- 第2回 建築鋼構造概要
- 第3回 ボルト接合法
- 第4回 溶接接合法
- 第5回 軸方向力を受ける鉄骨部材
- 第6回 鉄骨梁材
- 第7回 鉄骨柱材
- 第8回 鉄骨接合部
- 第9回 建築鉄筋コンクリート造概論
- 第10回 鉄筋コンクリート梁
- 第11回 鉄筋コンクリート柱
- 第12回 定着・付着
- 第13回 RC耐震壁
- 第14回 柱梁接合部他
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間試験と期末試験の結果と、講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 佐藤立美他：RC規準による鉄筋コンクリートの構造設計（鹿島出版会）ISBN：9784306033580（改訂版）

●参考書

- 1) 初めての建築構造設計（学芸出版社）524/K-4/4
- 2) 日本建築学会：鋼構造設計規準—許容応力度設計法—524.6/N-10
- 3) 日本建築学会：鋼構造塑性設計指針 524.6/N-13/2
- 4) 日本建築学会：鉄筋コンクリート造計算規準・同解説 524.7/N-7
- 6) 林 静雄編著：初めて学ぶ鉄筋コンクリート構造）市ヶ谷出版社 524.7/H-1/2

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建設施工と積算 Construction and Cost Estimation

学年：3年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2単位

担当教員名 日比野 誠

1. 概要

●授業の背景

建設活動の実際を知るためには、施工と積算の知識はきわめて重要である。これらを学ぶことにより、構造物の材料・施工・仕様・設計等の知識が実践的なものとなる。

●授業の目的

施工管理・施工技術と、施工に関わる建設積算の基礎を学ぶ。

●授業の位置付け

建設積算や施工・品質管理の基礎知識の習得とコスト感覚を形成する。

2. キーワード

積算、工事、仮設、山留め、土工、鉄筋、施工管理、品質管理

3. 到達目標

1. 建物建設行為において不可欠となる積算、施工管理業務に関する基礎的な知識を習得する。
2. 各種工事において必要な施工に関する基礎的な知識を習得する。

4. 授業計画

- 第1回 施工管理技術概論
- 第2回 工事契約
- 第3回 施工計画
- 第4回 工程管理 一般
- 第5回 ネットワークによる工程管理
- 第6回 品質管理 一般
- 第7回 管理図の作成と利用
- 第8回 原価管理 一般
- 第9回 コンクリート・型枠の積算
- 第10回 施工技術と積算概論
- 第11回 土工事・山留め工事
- 第12回 鉄筋工事・型枠工事
- 第13回 コンクリート工事
- 第14回 鉄骨工事
- 第15回 仕上げ・設備工事

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果と、講義中の小テストおよび講義中に課した演習・レポートの結果で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

日本建築学会：建築施工用教材（丸善）525.5/N-3

●参考書

建築の施工と見積研究会：新テキスト 建築の施工と見積（彰国社）525/K-1
日本建築学会：建築工事標準仕様書・同解説、525/N-1

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

国土計画論 National Land Planning

学年：3 年次 学期：後期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 仲間 浩一

1. 概要

●授業の背景

国土という広大な空間を計画的意図の下に組み立て、地域を関連づけてゆくための、長期的な視座にたったわが国の国土計画の流れを、主として戦後の全国総合開発計画の計画思想に着目しながら、現在から時代をさかのぼる方法で概観する。講義を通じて、国土的な社会問題を整理し解決のための施策展開を理解する中で、拠点開発、定住圏、国土軸といったグランドデザインに関わる計画概念を習得し、その下での具体的な事業展開の事例について学ぶ。

●授業の目的

1. 中長期的な社会問題の構造化と解決施策の実施、成果の評価、という戦後の国土計画の概略的な流れを理解する。
2. 戦後の5つの総合開発計画に関して、国土利用、土地利用に関わる法律体系と、それぞれの時期の社会背景と施策を支える計画概念を理解する。
3. 国土計画に従った国土開発の中のいくつかの具体的事例について、経緯と顛末を理解する。

●授業の位置付け

3 年次における計画系の科目の一つである。履修条件はとくにない。

2. キーワード

全国総合開発計画・グランドデザイン・アセスメント・人口動態・格差是正

3. 到達目標

1. 戦後のわが国の基本的な社会背景と経済的動向を理解できている。
2. 戦後の国土計画における時代ごとの計画概念を理解できている。
3. 国土利用の現状について基礎知識を習得している。
4. 土地利用コントロールのための法制度を理解できている。

4. 授業計画

- 第1回：国土計画の概論：戦後の国土計画における大きなテーマについて。
- 第2回：5 全総（21世紀の国土のグランドデザイン）：5 全総の考え方と、それを支える国土の骨格構造「国土軸」について学ぶ。
- 第3回：5 全総（21世紀の国土のグランドデザイン）が解決しようとした問題：4 全総が残した問題について概観し、リゾート法の結果や東京一極集中の問題を論じる。
- 第4回：4 全総：4 全総の考え方と、それを支える国土の骨格構造「多極分散型国土」について学ぶ。
- 第5回：4 全総が解決しようとした問題：3 全総までの計画が残した問題について概観し、国際化、情報化、といった現代につながる1980年代の都市問題を論じる。
- 第6回：3 全総：3 全総の考え方と、それを支える国土の空間構造「定住圏構想」、ならびにその関連での田園都市論について学ぶ。
- 第7回：3 全総が解決しようとした問題：新全総策定後に残された問題について概観し、オイルショック、環境問題、国土利用計画、流域圏といった居住環境形成の方法を論じる。
- 第8回：新全総：新全総の考え方と、経済計画ではない長期的なインフラ投資計画としての特徴的側面について学ぶ。
- 第9回：新全総が解決しようとした問題：全総策定後に残された問題について概観し、日本列島改造論の背景とその現代

に続く影響について学ぶ。

第10回：全総（全国総合開発計画）：全総の考え方と、それを支える経済計画手法について学ぶ。また拠点開発による波及効果の考え方について論じる。

第11回：全総が解決しようとした問題：戦後の日本の国土や都市復興について概観し、戦災復興都市計画や首都圏、三大都市圏の位置づけを論じる。

第12回：ベビーブームと人口動態：戦後のベビーブーマーの国土の中における動態、特に社会的な移動や定住、その子供世代の第二次ベビーブーマーの生活について論じる。

第13回：格差是正：所得格差、環境格差、情報格差、といった、国土計画が解決すべき「格差」の構造や所在について、実態と変遷を論じる。

第14回：明治の国土計画：国土や都市の近代化の始まりである明治政府の基本的な土地施策・産業立地施策について、基本的な考え方とその変遷を論じる。

第15回：まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

60 点以上を合格とする。レポートは国土開発に関する事例調査。試験は、国土利用に関わる時事問題を含む。出席点（10%）、レポート（40%）、試験（50%）ただし、1 / 3 以上の欠席は不合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

国土計画は理解し記憶する内容が豊富である一方、現実の開発事例を学ぶことで様々な問題やその解決のための知恵が洞察できる。北九州市地域は、明治以降の国土近代化、さらに戦後の国土計画の流れの中で具体的に強い影響を受けて地域空間が形成されており、身の回りにある現実の歴史的建造物のありように関心を向け実地を観察する経験を各自で積むこと。また、新聞やテレビニュースなど、環境や建設に関連する日々の最新の時事報道にも注意を払っておく必要がある。

7. 教科書・参考書

●参考書

- 1) 下河辺淳：戦後国土計画への証言（日本経済評論社）333.9/S-8
- 2) 田中角栄：日本列島改造論（日刊工業新聞社）ISBN：978-4-526-03467-1
- 3) 本間義人：土木国家の思想（日本経済評論社）510.9/H-5
- 4) 角野幸博：郊外の20世紀（学芸出版社）ISBN：978-4-7615-2233-9

その他必要に応じて、各講義時に参考資料を配布する。

8. オフィスアワー

1 回目の講義時に通知する。

地域計画と景域デザイン

Regional Planning and Landscape Design

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 伊東 啓太郎

1. 概要

●授業の背景

現在、日本の都市や農村においては、自然環境の減少による住環境の悪化や生態系の分断化などが大きな問題になっている。このような状況において、建築・都市・地域とそれを取りまく自然環境との調和を図り、人間の生活にとって望ましい環境を創出するための計画手法を考えることは重要な課題である。

●授業の目的

地域計画および都市計画の体系、これらの地域スケールに対応した課題およびそれらに対応するための理念と計画について学ぶ。都市や農村において、「住む」「働く」「憩う」空間をよりよく整備・保全する計画技術を学び、地域計画と都市計画に関する技術について理解する。地域計画の方法と環境保全に関する考え方や技術について学ぶことを目的とする。

●授業の位置付け

「公共計画基礎」、「都市計画」、「建築計画Ⅰ」と「建築計画Ⅱ」を基礎とする科目であり、関連科目は「道路交通工学」「都市交通計画」。履修条件はとくにない。

2. キーワード

地域計画、都市計画、建築計画、まちづくり、景域デザイン、環境保全計画、景域生態学、土地利用計画、都市施設

3. 到達目標

1. 地域計画及び景域生態学の基本的考え方を理解し、主要な専門用語を説明できる。
2. 都市・地域計画と環境保全計画の歴史および基礎的な知識を理解し、その役割を説明できる。
3. 都市・地域計画のための計画・設計の手法を理解し、説明できる。
4. 都市および地域が抱える問題を把握した上で、解決策としての地域計画や景域デザインの手法を説明できる。

4. 授業計画

- 第1回 地域計画と景域生態学の関連性
- 第2回 地域計画の歴史と体系
- 第3回 地域計画にかかわる主体とまちづくり
- 第4回 地域計画の体系と法制度および環境保全への効果
- 第5回 都市および農村における土地利用計画
- 第6回 社会・環境システムとしての地域計画
- 第7回 都市施設、道路の計画と設計
- 第8回 公園・緑地の計画と設計
- 第9回 自然再生事業と地域共生のための都市・地域計画
- 第10回 住民参加型の地域計画・まちづくり
- 第11回 地域計画の歴史：英国の田園都市論を中心とした地域計画の手法・歴史
- 第12回 海外における地域計画の事例と手法Ⅰ：フィンランドの地域計画の手法
- 第13回 海外における地域計画の事例と手法Ⅱ：ドイツの地域計画の手法
- 第14回 景観法とこれからの日本における地域計画・まちづくり
- 第15回 全体のまとめと復習

5. 評価の方法・基準

出席点 (20%)、レポート (20%)、試験 (60%)。
ただし、1/3 以上の欠席は不可とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

機会をつくって、国内外の建築物や街なみ、農村風景等を見て回ること。また、普段から、近場の街なみのデザインや公園等の空間にも目を配り、プランナーになったつもりで、まちや地域を観察することが重要である。その際、ディテールを把握するためにスケッチをすることが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

三村浩史：地域共生の都市計画、学芸出版社 518.8/M-4/2
武内和彦：地域の生態学、朝倉書店 468/T-1

●参考書

- 1) 立花 隆：エコロジー的思考のすすめ、中公文庫 468/T-2

8. オフィスアワー

毎週水曜日 10:30 ~ 12:50

都市計画 Urban Planning

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 寺町 賢一

1. 概要

●授業の背景

建築物の企画・設計にあたっては、それを取り巻く空間としての都市の計画手法やまちづくりについての知識も必要である。都市は中心市街地の空洞化・交通施設等の都市施設の不備・環境問題・防犯や防災などさまざまな問題を抱えており、これらに対応するには現在の社会情勢を知るとともに、法制度を基礎に社会のニーズに対応した視点が必要である。

●授業の目的

本授業では、都市を取り巻く社会情勢を把握した上で都市が直面している課題を認識し、まちづくりに携わるに際して必要となる都市計画手法や基本的知識を学ぶ。

●授業の位置付け

都市計画は、まちづくりに携わるに際して必要となる基本的な知識を修得する科目であり、他の計画系科目と関連が深いため、十分理解することが重要である。

2. キーワード

まちづくり、都市問題、都市計画手法

3. 到達目標

1. まちづくりに必要となる基礎知識を習得する。
2. 都市計画と建築物との関係を知り、それを理解する。
3. 都市が抱えている問題を認識し、問題解決に必要な都市計画手法を説明できる。

4. 授業計画

- 第1回 都市の定義
- 第2回 都市の分類
- 第3回 都市の課題
- 第4回 上位計画
- 第5回 都市計画関連法令
- 第6回 都市計画支援制度と財政
- 第7回 1～6の講義の演習または補講
- 第8回 都市計画のプロセス
- 第9回 都市計画区域
- 第10回 土地利用計画
- 第11回 都市施設計画
- 第12回 市街地開発事業
- 第13回 地区計画
- 第14回 8～13の講義の演習または補講
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験 (70%) と小テスト (30%) で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 都市計画は、社会の要求に対応した「まちづくり」が課題となるので、関連する社会経済情勢に関心をもつことが望ましい。
- 2) 講義中に実施する小テストをWEBにて公開しているので、講義終了後に各自復習すること。講義の十分な理解を得るために予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

梶木 武：都市計画（森北出版）519.8/C-9/2

8. オフィスアワー

毎週金曜日 16:20 ~ 17:50

連絡先 電子メール：teramati@civil.kyutech.ac.jp

道路交通工学 Road Traffic Engineering

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 渡辺 義則

1. 概要

●授業の背景

現在の私たちの生活において自動車は非常に大きな役割を果たしている。その自動車が、安全・快適・円滑に通行するためには、適正に道路を建設することが必要である。

●授業の目的

本授業では、道路交通工学に対する基礎的な理論を講義し、道路で発生している交通の特性、施設としての道路の計画・設計・施工・維持修繕に関する基礎知識を修得させる。

●授業の位置付け

本授業では、自動車を安全・快適・円滑に通すための道路の設計・施工などハードな面を中心に言及する。それゆえ、自動車だけでなく公共輸送（JR、電車、バスなど）を含めた総合的な都市交通計画、人や自転車の通行を中心に考える地区交通計画などについてより深く理解するためには「都市交通計画」を受講していただきたい。

2. キーワード

道路建設、自動車、道路交通特性、道路の設計施工、維持修繕

3. 到達目標

1. 自動車が道路を通行する時の特性、施設としての道路の計画・設計・施工・維持修繕に関する基礎知識を学び、それを理解する。
2. その基本的なもののいくつかについては、実際に利用できるようにする。

4. 授業計画

- 第1回 道路交通情勢・自動車輸送のメリット
- 第2回 道路の歴史と分類
- 第3回 道路の調査と計画
- 第4回 交通流の確率論的解析法
- 第5回 道路交通特性（速度、交通量）
- 第6回 道路（単路部）の交通容量
- 第7回 4～6の講義の演習または補講
- 第8回 中間試験
- 第9回 道路の構造
- 第10回 道路の平面線形と縦断線形の設計
- 第11回 道路の交差
- 第12回 9～11の講義の演習または補講
- 第13回 道路の舗装
- 第14回 道路の維持修繕
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間試験（50%）、期末試験（50%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

自主的に学ぶ態度が重要である。授業の理解を深めるために、授業時間外に学習すべき課題を与えるので、これに真摯に取り組んで頂きたい。

7. 教科書・参考書

●教科書

福田 正他：道路工学（朝倉書店）514/F-2

●参考書

- 1) 鈴木道雄他：道路（Ⅱ）計画と幾何設計（新体系土木工学62、技報堂）510.8/S-3/62
- 2) 三谷 浩他：道路（Ⅲ）構造（新体系土木工学63、技報堂）510.8/S-3/63
- 3) 布施洋一他：道路（Ⅴ）維持管理（新体系土木工学65、技報堂）510.8/S-3/65
- 4) (社) 交通工学研究会：道路交通技術必携（（財）建設物価調査会）514/K-12
- 5) 武部賢一：道のはなしⅠ（技報堂出版）514/T-3/1
- 6) 武部賢一：道のはなしⅡ（技報堂出版）514/T-3/2

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

都市交通計画 Transportation Planning

学年：3 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 寺町 賢一

1. 概要

●授業の背景

都市活動を支える重要な要素のひとつに「交通」がある。都市活動を活性化させるには、円滑な「移動」が必要となってくるが、都市交通は渋滞や環境悪化など問題を抱えており、都市の住民に多大な影響を与えている。環境面から言えば、鉄道やバスなどの公共交通機関の積極的利用による環境負荷低減が必要であり、その利用状況を考慮すると自動車交通は重要であり、自動車が安全・快適・円滑に通行するための道路が必要である。これらのことを踏まえた上で総合的な視野から都市交通計画を立案する必要がある。

●授業の目的

本授業では、都市交通計画立案に必要な交通調査や需要予測手法、公共輸送計画、自動車交通を対象とした幹線・地区交通のあり方について基礎知識を習得させる。

●授業の位置付け

都市交通計画を論じるには、都市の土地利用制度、自動車を安全・快適・円滑に通行させるための道路の設計・施行等の視点が必要であり、「都市計画」「道路交通工学」を受講することでより理解を深めることが可能となる。

2. キーワード

交通計画 地区交通計画 交通需要予測

3. 到達目標

1. 都市交通計画の立案に必要な基礎知識を習得する。
2. 交通計画立案に必要な交通需要予測手法を習得する。
3. 人と車が安全に移動できる交通のあり方に関する基礎知識を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 都市と交通
- 第2回 都市交通の調査
- 第3回 交通需要予測（その1）
- 第4回 交通需要予測（その2）
- 第5回 鉄道輸送計画
- 第6回 バス輸送計画
- 第7回 幹線道路と地区の交通の折り合い
- 第8回 道路の機能分類と段階的構成論の進展
- 第9回 平面交差点の設計
（飽和交通流率、飽和度、信号サイクル長）
- 第10回 平面交差点の設計（交通容量、演習）
- 第11回 住宅地の都市交通計画
- 第12回 都心部の地区交通計画
- 第13回 歩行者と自転車の空間、歩車共存道路
- 第14回 将来の都市交通計画の方向
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（60%）と小テスト（30%）と演習（10%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 自主的に学ぶ態度が重要である。授業の理解を深めるために講義中に演習を行うので、演習について復習をしっかりと行うことが望ましい。
- 2) 講義中に実施する小テストをWEBにて公開しているので、講義終了後に各自復習すること。講義の十分な理解を得るために予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

新谷洋二他：都市交通計画（技法堂出版）519.8/N-9

●参考書

- 土木学会編：地区交通計画（国民科学社）681/D-2
住区内街路研究会：人と車の「おりあい」の道づくり（鹿島出版会）519.8/J-3
天野光三他：歩車共存道路の計画・手法（都市文化社）541.1/A-1

8. オフィスアワー

毎週金曜日 16：20～17：50

連絡先 電子メール：teramati@civil.kyutech.ac.jp

水理学Ⅰ HydraulicsⅠ

学年：2 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 鬼束 幸樹

1. 概要

●授業の背景

上水、下水、パイプラインおよびプラント内の配管の流れのほとんどは、管路流である。管路流のエネルギーは剛体運動と異なり、速度エネルギーおよび位置エネルギーだけでなく圧力エネルギーが存在することに最大の特徴がある。また、管路流は開水路流と異なり自由水面を有さないことも理解する必要がある。

●授業の目的

流れに層流と乱流があり両者で全く性質が異なることおよび管路流の流速分布が壁面の状態によって異なることをまず理解させる。続いて、管路流に摩擦損失と形状損失が存在し、両者を考慮した管路計算が行えるようにする。さらに、上水道の配水管に代表される管網の計算が行えるようにする。

●授業の位置付け

1 年次必修科目の水理学基礎及び演習で水理学の基礎知識を充分身に付けている必要がある。これに基づき、圧力の概念およびその取り扱いを管路流を通じて理解させる。続く 2 年次後期選択必修科目の水理学 2 を履修する上で不可欠な知識である。また、3 年次後期選択必修科目の水環境工学、3 年次後期選択（必修）科目の海岸・港湾工学を受講する上でも必要不可欠な知識である。

2. キーワード

層流、乱流、管路、粗度、摩擦損失、形状損失、管網計算

3. 到達目標

1. 管路流および管網の計算手法を習得させる。
2. 上水・下水道の計画・設計に関する基本を習得させる。

4. 授業計画

- 第1回 管路流の設計・計画
- 第2回 ナビアストークスの運動方程式と相似則
- 第3回 層流で等流の解析解
- 第4回 レイノルズの運動方程式
- 第5回 円管内乱流の流速分布
- 第6回 粗面・滑面による流速分布の相違
- 第7回 粗面・滑面による流量の相違
- 第8回 管路流定流の基礎式
- 第9回 壁面摩擦の記述方法
- 第10回 摩擦損失と形状損失
- 第11回 管路流の計算（その1）
- 第12回 管路流の計算（その2）
- 第13回 水車・ポンプを含む管路の計算
- 第14回 管網計算
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（50%）、講義中の小テスト（40%）およびレポートの結果（10%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

レポートは、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で平均点の 1/3 未満のものは不可として取扱う。「水理学基礎及び演習」を習得していることが望ましい。講義内容の十分な理解を得るために、予習復習を行うことが必要である。うまく理解できない場合は、記載分の参考図書を参照してください。図書館の 3 階に学生用図書としておいてあります。

7. 教科書・参考書

●教科書

わかりやすく講義するために、ノート講義とする。ただし、水理学基礎及び演習との関係を踏まえるとともに、教科書との対応をつけながら講義する。

- 1) 小松利光・矢野真一郎 監修：水理学（理工図書）517.1/A-8

●参考書

- 1) 小松利光・矢野真一郎 監修：水理学（理工図書）517.1/A-8
- 2) 椿東一郎：水理学 1（森北出版）517.1/T-3/1

8. オフィスアワー

毎週月曜日 1 限

メールアドレス：onitsuka@civil.kyutech.ac.jp

水理学Ⅱ HydraulicsⅡ

学年：2 年次 学期：後期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 秋山 壽一郎

1. 概要

●授業の背景

河川や水路の流れは、管路流れと区別され開水路流れと呼ばれる。開水路流れには、洪水時のように時間的に変化する「不定流」と平常時のように時間的に変化する「定流」がある。さらに、「定流」は河床の勾配や河幅が空間的に変化する時には「等流」となり、変化するときには「不等流」となる。「等流」と「不等流」は河道や水路の設計・計画の基本となる開水路流れであるので、重要である。

●授業の目的

等流と不等流、およびこれと深く関係した抵抗則や流速公式について講義する。さらに、河川や水路の流れを取り扱う上で必要不可欠な跳水現象、堰や水門等の水理構造物があるところでの流れについても説明する。

●授業の位置付け

1 年次必修科目の水理学基礎及び演習で水理学を学習する上での工学的な基礎知識を充分身に付けた上で、2 年次選択必修科目の水理学 1 で学習した管路流れを充分理解しておく必要がある。微分方程式や力学等の数学と物理学の知識も必要である。

2. キーワード

河川、水路、開水路、定流、等流、不等流

3. 到達目標

- (1) 開水路流の基本的性質を理解する。
- (2) 1 次元漸変流の仮定と基礎式を理解する。
- (3) 跳水、支配断面を理解する。
- (4) 比エネルギー、比力を理解する。
- (5) 広長方形断面水路の水面形を理解し、描けるようにする。

4. 授業計画

- 第1回 河道と水路の設計・計画
- 第2回 開水路流れの支配方程式
- 第3回 等流の支配方程式
- 第4回 等流の流速、圧力およびせん断応力分布
- 第5回 抵抗則と平均流速公式
- 第6回 1 次元不等流解析の基礎式
- 第7回 1 次元不等流解析（その1）
- 第8回 1 次元不等流解析（その2）
- 第9回 フルード数と常流・射流
- 第10回 境界勾配と支配断面
- 第11回 支配断面の水理
- 第12回 跳水現象
- 第13回 水理構造物がある開水路流れの取扱い（その1）
- 第14回 水理構造物がある開水路流れの取扱い（その2）
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（70%）、講義中の口頭質問（20%）およびレポートの結果（10%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 「水理学基礎及び演習」以外にも「水理学Ⅰ」を習得していることが望ましい。水理学は積上げ学習なので、予習復習を通じて、毎回の講義内容の十分な理解が必要である。
- 2) 日頃の学習状況の確認等を目的として、毎回口頭質問を行い評価する。レポートは、特別な理由がない限り、提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で30点（100点満点）未満のものは不可として取扱う。

7. 教科書・参考書

●教科書

わかりやすく講義するために、担当者執筆の教科書第3章との対応をつけながら、その他の事項や具体例を適宜参考書等で補ったノート講義とする。

- 1) 小松利光・矢野真一郎 監修：新編 水理学（理工図書）517.1/A-8

●参考書

- 1) 椿東一郎：水理学 1（森北出版）517.1/T-3/1
- 2) 椿東一郎：水理学演習上、下（森北出版）517-1/T-2
- 2) 日野幹雄：明解水理学（丸善）517.1/H-7

8. オフィスアワー

毎週火曜日 4 限

メールアドレス：juichiro@tobata.isc.kyutech.ac.jp

河川工学 River Engineering

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 秋山 壽一郎

1. 概要

●授業の背景

河川には「治水」、「利水」、「環境」の3つの機能がある。「治水機能」とは洪水時に水を安全に流すことであり、「利水機能」とは上水や農業・工業用水等の水利用に関することであり、「環境機能」とは生態系への配慮や潤いある水辺環境に関するものである。現在の河道計画では、「治水」と「環境」の調和が重要とされている。

●授業の目的

河道の設計・計画を行う上で重要な3機能のうち、治水機能と環境機能に配慮した川づくりの基本について講義する。河道計画の方法とあり方、降雨から河川流量を評価する手法、実河川の水位解析法（不等流）や洪水流（不定流）の解析法、生態系に配慮した川づくりのあり方、水理構造物とその設計に当たってのポイント、安定した河道設計で重要となる土砂輸送と河床変動について説明する。

●授業の位置付け

1 年次必修科目の「水理学基礎・演習」で水理学を学習する上での工学的な基礎知識を充分身に付けた上で、2 年次選択必修科目の「水理学1」と「水理学2」で学習した管路および開水路流れとを充分理解しておく必要がある。特に、河川工学の基礎となる「水理学2」は重要である。利水機能と水質環境の保全から、3 年次選択必修科目の「水環境工学」とも関係している。また、川と海とのつながりから、3 年次選択必修科目の「海岸・港湾工学」を履修する上で重要である。

2. キーワード

河川工学、治水計画、河川環境、水理構造物、土砂管理

3. 到達目標

- (1) 河川の有する機能と基本的性質について理解する。
- (2) 洪水防御計画とダム等の洪水防御施設について理解する。
- (3) 治水を主体とした河道計画と河川環境に配慮した川づくりの進め方について理解する。
- (4) 各河川構造物の構造と機能および河川計画における留意点について理解する。
- (5) 不等流解析、流出解析、洪水追跡法および河床変動解析の基礎について理解する。

4. 授業計画

- 第1回 わが国の河川の特徴および河川機能と河川行政
- 第2回 治水計画の策定法
- 第3回 洪水防御計画
- 第4回 流出解析と洪水追跡
- 第5回 河道計画（その1）
- 第6回 河道計画（その2）
- 第7回 実河川の水位解析法
- 第8回 河川構造物（その1）
- 第9回 河川構造物（その2）
- 第10回 多自然型河川工法（その1）
- 第11回 多自然型河川工法（その2）
- 第12回 流砂現象と移動床水理の基礎
- 第13回 移動床水理の水理計算と河床変動計算
- 第14回 河道計画における留意点
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（70%）、講義中の口頭質問（10%）およびレポート（河川調査）の結果（20%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 「水理学基礎及び演習」以外にも「水理学Ⅰ」及び「水理学Ⅱ」を習得していることが望ましい。予習復習を通じ、毎回の講義内容の十分な理解が必要である。
- 2) 日頃の学習状況の確認等を目的として、毎回口頭質問を行い評価する。また、河川がどのようになっており、どのような工夫がなされているかを自分の目で確かめ学習する目的で、河川調査に関するレポートを課す。レポートは、特別な理由がない限り、提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で30点（100点満点）未満のものは不可として取扱う。
- 3) 「洪水」、「河川環境」、「河川と人のかかわり」、「河川とまちづくり」などを主題とした多くのTV番組が放送されている。また、インターネット上でも多くの情報が得られる。各種メディアを活用し河川について知ることが講義の理解を深める上でたいへん役立つ。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。水理構造物や河川の特性等についてはパワーポイントや配布資料を用い、解析法や計算法については板書により講義する。20 ページ程度の水理構造物に関する資料等を配布する。

●参考書

- 1) 椿東一郎：水理学1、2（森北出版）517.1/T-3
- 2) 高瀬信忠：河川水文学（森北出版）452.9/T-3
- 3) 河村三郎：土砂水理学（森北出版）517.5/K-2/1
- 4) 河川改修計画実施要領、www.pref.shimane.lg.jp/kasen/manual/index.data/youryou-01.pdfよりダウンロード可能

8. オフィスアワー

毎週木曜日 4 限

メールアドレス：juichiro@tobata.isc.kyutech.ac.jp

海岸・港湾工学 Coastal Engineering

学年：3 年次 学期：後期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 重枝 未玲

1. 概要

●授業の背景

わが国は四方を海で囲まれており、海岸・沿岸域では高潮や津波による浸水被害、波浪による海岸侵食、港湾埋没等の漂砂災害など数多くの災害が生じている。このため、浸水被害の防止や海岸侵食の防止などの海岸防災対策は、海岸の利用・開発を行う上で極めて重要となる。特に、近年では温暖化による地球規模での海面上昇が予想されており、これを踏まえた海岸防災対策が強く求められている。

●授業の目的

海岸防災計画や沿岸・港湾施設の設計を行う上で必要な基本知識や技術を講義する。波の基本的性質、海岸・沿岸域で発生する水理現象、漂砂による海浜変形、構造物に働く波力等について説明する。

●授業の位置付け

海岸工学は、波の挙動、海浜変形等の波によって引き起こされる沿岸域の諸現象、海岸構造物に波力等を取り扱う分野である。その基礎となる「水理学基礎及び演習」「水理学Ⅰ」、「水理学Ⅱ」を十分理解しておく必要がある。また、川と海とのつながりから、3 年次選択必修あるいは選択科目の「河川工学」、「水環境工学」を十分理解しておく必要がある。

2. キーワード

海岸防災、港湾施設、波、漂砂、波力

3. 到達目標

- (1) 波の基本的性質を理解する。
- (2) 波の発生・伝播による波の変形の予測手法を理解する。
- (3) 構造物による波の変形と構造物に働く波の力の予測手法を理解する。
- (4) 沿岸の流れによる海浜の変形について理解する。
- (5) 海岸防災や港湾施設の設計等に必要な基本知識や技術を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 海岸工学概論と沿岸の水理現象
- 第2回 海岸の波とその性質（その1）
- 第3回 海岸の波とその性質（その2）
- 第4回 海岸の波とその性質（その3）
- 第5回 海岸の波とその性質（その4）
- 第6回 不規則波と波浪の発生と発達
- 第7回 伝播に伴う波の変形（その1）
- 第8回 伝播に伴う波の変形（その2）
- 第9回 構造物による波の変形
- 第10回 構造物に働く波の力
- 第11回 津波・高潮・潮汐
- 第12回 海浜流と海岸付近の流れ
- 第13回 漂砂と海浜変形
- 第14回 港湾施設
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（100％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義内容に関するレポートを課す。レポートは特別な理由がない限り、提出期限を過ぎたものは受け付けない。教科書に記載されている例題は必ず理解すること。また、参考書の演習問題に取り組むこと。

7. 教科書・参考書

●教科書

合田良実：海岸・港湾（二訂版）（わかりやすい土木講座17）（彰国社）518/S-1

●参考書

- 1) 岩垣雄一：最新 海岸工学（森北出版株式会社）518.4/I-2
- 2) 樫木 亨・出口一郎：新編 海岸工学（共立出版株式会社）518/S-6
- 3) 水村和正：海岸海洋工学（共立出版株式会社）518/M-3
- 4) 酒井哲郎：海岸工学入門（森北出版株式会社）518.4/S-2

8. オフィスアワー

毎週火曜 3 限

メールアドレス：mirei@civil.kyutech.ac.jp

水環境工学 Water Environment Engineering

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 鬼東 幸樹

1. 概要

●授業の背景

水は大気、河川、海洋などを循環しており、水に基づく地球上の物質循環機構を理解することは地球環境保全において必要不可欠である。このような背景を理解した上で、個別の環境保全を行う必要がある。個別の環境保全については、下水処理が基礎である。さらに、河川生態環境保全を考慮した川づくりに関する工法も、これからの川づくりに必要不可欠な知識となる。

●授業の目的

環境問題全般における水質環境の位置づけおよび役割を理解させ、水が環境保全の中心的役割を担っていることを認識させる。その上で、個別の水環境保全技術を習得させ、下水の設計・計画および治水および環境の両者のバランスを考慮した川づくりの基礎知識を理解させる。

●授業の位置付け

1 年次必修科目の水理学基礎及び演習で水理学の基礎知識を充分身に付けた上で、2 年次選択必修科目の水理学 1 と水理学 2 で学習した管路および開水路流れのメカニズムを十分に理解しておく必要がある。また、川と海とのつながりから、3 年次選択必修科目の海岸・港湾工学を履修する上で重要である。

2. キーワード

水循環、水質浄化、下水道、河川環境、生息環境評価法

3. 到達目標

1. 水循環に伴う水質の変化を理解させる。
2. 下水処理および河道内での水質処理の役割を理解させる。
3. 大規模な河川改修工事を行う上で義務づけられている河川環境アセスメントを習得させる。

4. 授業計画

- 第 1 回 科学的水質指標
- 第 2 回 生物学的水質判定
- 第 3 回 環境基準
- 第 4 回 水質浄化法
- 第 5 回 下水処理
- 第 6 回 水質環境モデル 1 (河川モデル)
- 第 7 回 水質環境モデル 2 (湖沼モデル)
- 第 8 回 河川生態系
- 第 9 回 生息環境評価法 1
- 第 10 回 生息環境評価法 2
- 第 11 回 河川環境を保全する個別技術
- 第 12 回 拡散 1
- 第 13 回 拡散 2
- 第 14 回 移流分散
- 第 15 回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験 (70%)、レポートの結果 (30%) で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

レポートは、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で平均点の 1/3 未満のものは不可として取扱う。「水理学基礎及び演習」、「水理学Ⅰ」および「水理学Ⅱ」を習得していることが望ましい。講義内容の十分な理解を得るために、予習復習を行うことが必要である。うまく理解できない場合は、記載分の参考図書を参照してください。図書館の 3 階に学生用図書としておいてあります。

7. 教科書・参考書

特に指定しない。ノート講義、参考資料、パワーポイント等を併用して講義する。

●参考書

- 1) 小松利光・矢野真一郎 監修：水理学 (理工図書) 517.1/A-8

2) 椿東一郎：水理学 1、2 (森北出版) 517.1/T-3

3) 武田育郎：水と水質環境の基礎知識 (オーム社出版局) 519.5/T-60

4) 玉井信行、水野信彦、中村俊六：河川生態環境工学 (東京大学出版会) 519.5/T-25

5) 田中修三：基礎環境学 (共立出版) 519.5/T-59

6) 津野 洋、西田 薫：環境衛生工学 (共立出版) 519.5/T-55/a

7) 盛下 勇：ダム貯水池の水環境 Q&A (山海堂) 519.1/D-1

8) 玉井信行、奥田重俊、中村俊六：河川生態環境評価法 (東京大学出版会) 517/T-4

9) 沼田 真：河川の生態学 (築地書館) 468/M-11

10) 沖野輝夫：河川の生態学 (共立出版) 517/O-3

11) 有田正光：水圏の環境 (東京電機大学出版局) 517.1/A-7

8. オフィスアワー

毎週月曜日 1 限

メールアドレス：onitsuka@civil.kyutech.ac.jp

防災情報工学

Information Engineering for the Prevention Disasters

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位
担当教員名 横矢 直道

1. 概要

●授業の背景

わが国の国土は、地形地質が複雑な上に地震や豪雨の発生が多いという特殊な自然条件の箇所に立地している。したがって、種々の自然災害に見舞われることが多く、これらの災害を防ぐための対策が必要となってくる。防災情報工学は、災害の素因と誘因を情報システムを駆使して精度良く把握し、防災シミュレーションを行う手法について取得する科目である。

●授業の目的

災害とは何かについて明らかにし、災害発生素因と誘因を、リモートセンシング技術やその他の物理探査手法および地質調査手法により把握する手法について紹介し、得られた結果をマイクロゾーニング手法やハザードマップ作成手法を用いて防災シミュレーションを行う技術について学習する。その際、ハザードやリスクの概念およびリスクコミュニケーションの重要性についても言及する。

●授業の位置付け

防災情報工学は、日本の国土がおかれている災害が発生しやすい自然状況について認識し、地震による被害を想定したマイクロゾーニング手法とそれに基づいたシミュレーション事例、豪雨による災害を想定したハザードマップの作成事例、さらにはリモートセンシングや物理探査手法、GIS の防災への応用技術を取り扱う。

2. キーワード

災害対策基本法、物理探査、リモートセンシング、GIS、マイクロゾーニング、リスクアナリシス、ハザードマップ

3. 到達目標

リモートセンシングや物理探査の防災技術への応用を理解するとともに、防災シミュレーション手法である、マイクロゾーニング手法や GIS を用いたハザードマップ作成手法について理解する事を目標とする。

4. 授業計画

- 第1回 災害とは？
 - 第2回 防災に関する法体系
 - 第3回 日本列島の地形地質の特殊性
 - 第4回 脆弱な日本列島
 - 第5回 災害の素因を把握する手法－1－リモートセンシング
 - 第6回 災害の素因を把握する手法－2－物理探査の手法
 - 第7回 災害の素因を把握する手法－3－ボーリング調査等の地質調査手法
 - 第8回 ハザードとリスクについて
 - 第9回 土砂災害に関するハザードマップについて－1－
 - 第10回 土砂災害に関するハザードマップについて－2－
 - 第11回 地震防災マップについて－1－
 - 第12回 地震防災マップについて－2－
 - 第13回 事例紹介
 - 第14回 防災情報工学総括
 - 第15回 まとめ・重要項目の復習
- 教育方法は、講義形式とする。

5. 評価の方法・基準

期末試験（80％）および出席（20％）で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

2 年次前期の地盤工学基礎及び演習、2 年次後期の地盤工学との関連が深いので、これらの科目の内容を十分に理解していることが必要である。学習態度としては、地盤工学、地質学、耐震工学、リモートセンシングの基礎知識を総合して、災害と防災対策のシミュレーションを考えていくことが必要である。また講義内容を十分理解するために、予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

作成したものを配布する。

●参考書

- 1) 人工衛星から得られる地球観測データの使い方 450/O-6
- 2) 地球学入門：酒井治孝（東海大学出版）450/S-5

8. オフィスアワー

質問は、電子メール（横矢：yokoya@fukuyamaconsul.co.jp）で受け付ける。

地盤工学基礎及び演習

Fundamentals of Geotechnical Engineering and Tutorial

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位
担当教員名 廣岡 明彦

1. 概要

●授業の背景

ほとんどの構造物は、土あるいはその集合体としての地盤によって支持されており、またアースダムや堤防等では土そのものを構成材料としている。このような土の物理・力学的な性質を知るとともに、構造物を地盤上あるいは地盤内に安全かつ経済的に建設する方法について学ぶことは、構造設計に携わる技術者はもとより都市や公園も含め広く建設に従事する技術者として必須であろう。これについて基礎的な知識を与えるものが、地盤工学基礎である。

●授業の目的

土の状態を表す基本的物理量を知るとともに、土がその粒度特性やコンシステンシーにより工学的に分類されることを理解する。さらに不飽和土の諸性質を把握し、それに関連する土の締固め特性を理解する。また、地下水の流れやそれに伴う環境問題を理解するために、透水について学ぶ。加えて、有効応力の概念と、土－水連成問題のひとつとしての粘土の圧密現象を学んで理解するとともに、土のせん断強度については、組み合わせ応力と Mohr-Coulomb の破壊規準までを正しく理解する。

●授業の位置付け

1 年次必修科目の建設力学基礎で力の釣り合いや応力等についての基礎知識を充分身に付けている必要がある。これを基礎とする地盤を対象とした構造力学的側面に、土そのものの性質を対象とする材料力学的側面を加えて、「土」を理解することが最終目標である。また、この授業の内容は、続く 2 年次後期選択必修科目の地盤工学を履修する上で不可欠な知識でもある。

2. キーワード

砂、粘土、含水比、間隙、飽和度、粒度、コンシステンシー、締固め、透水、有効応力、間隙水圧、ダイレタンシー、圧密、圧縮、沈下、組み合わせ応力、直応力、せん断応力、主応力、Mohr の応力円表示、Mohr-Coulomb の破壊規準

3. 到達目標

- 1. 土の基本的物理量を理解し、その算定ができる。
- 2. 不飽和土やその締固め特性を理解する。
- 3. 透水現象を理解し、様々な境界条件のもと透水量を算定する手法を身に付ける。
- 4. 有効応力、間隙水圧と全応力の関係を理解し、荷重の増減に伴う各々の地盤内応力を算定できる。
- 5. 圧密現象を理解し、それが引き起こす沈下量やそれに要する時間の算定ができる。
- 6. Mohr-Coulomb の破壊規準を理解し、破壊時の応力の算定ができる。

4. 授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 土の基本的な性質（1）
- 第3回 土の基本的な性質（2）
- 第4回 土の工学的分類、不飽和土の諸性質（1）
- 第5回 不飽和土の諸性質（2）
- 第6回 土の締固め
- 第7回 透水（1）
- 第8回 透水（2）
- 第9回 有効応力、ダイレタンシーと間隙水圧（1）
- 第10回 有効応力、ダイレタンシーと間隙水圧（2）
- 第11回 粘土の圧密（1）
- 第12回 粘土の圧密（2）
- 第13回 粘土の圧密（3）、土のせん断強度（1）
- 第14回 土のせん断強度（2）
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果を70%、講義中の小テストおよび講義中に課した演習・レポートの結果を30%で評価する。合計が60点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

学則にあるように講義が予習・復習を前提に構成されていることを忘れないこと。演習中にやり残した問題や間違った問題を授業時間外に再度チャレンジするとともに、参考書の演習問題にも挑戦して欲しい。レポートについては、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けられないので注意すること。また、期末試験での達成度が著しく低い場合は不可として取扱う。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 石原研而：「土質力学」(丸善) 511.3/I-18

●参考書

- 1) 今井五郎：「わかりやすい土の力学」(鹿島出版会) 511.3/I-16
- 2) 山口柏樹：「土質力学」(技報堂出版) 511.3/Y-11
- 3) 三木五三郎 他：「演習土質工学」(オーム社) 511.3/M-18
- 4) 赤井浩一：「土質力学」(朝倉書店) 511.3/A-15 510.8/A-1/5
- 5) P.L.キャパー他：「土質工学の基礎演習」(技報堂出版) 511.3/C-11

8. オフィスアワー

原則、毎週木曜日の5限目とする。

連絡先：ahirooka@civil.kyutech.ac.jp

地盤工学 Geotechnical Engineering

学年：2年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2単位
担当教員名 永瀬 英生

1. 概要

●授業の背景

構造物は一般に地盤に支えられて安定しており、もし地盤が軟弱であれば、沈下・転倒することがある。地盤工学は、地盤工学基礎及び演習で修得した、土の基本的性質、土の締固め、透水、有効応力の原理、粘土の圧密、土のせん断強度の内容を基礎として、このような地盤で起こる様々な現象を力学的に捉え、それらの問題を解析する上で必要な知識を修得するための科目である。

●授業の目的

安定した構造物の建設を行うために必要な土の力学に関する知識について理解することを目的とする。具体的には、地盤内の応力特性等を学ぶとともに、地盤工学基礎及び演習と本授業で学ぶ土のせん断破壊特性に基づき、土圧・支持力の解析手法について学習する。

●授業の位置付け

地盤工学は、透水、圧密、せん断を基礎原理として、土圧、支持力といった地盤の変形・破壊現象を力学的に捉えるための理論と解析手法を取り扱う。その内容は、2年次前期の地盤工学基礎及び演習と関連が深い。また本科目は、3年次前期の地盤耐震工学、3年次後期の構造物基礎と地下空間及び防災情報工学の基礎となるので、それらの科目の履修のために重要である。(関連する学習教育目標：C、D、J)

2. キーワード

土のせん断強度、地盤内の応力と変位、土圧、地盤の支持力

3. 到達目標

1. 土要素に作用する応力の表示方法、土の破壊規準、異なる排水条件下でのせん断強度の算定方法について理解する。
2. いくつかの荷重条件下における地盤内の応力と変位の算定方法について理解する。
3. 壁面に作用する土圧、地盤の支持力を評価する手法について理解する。

4. 授業計画

- 第1回 土のせん断強度(1)－組合せ応力とMohrの応力円
- 第2回 土のせん断強度(2)－Mohr-Coulombの破壊規準
- 第3回 土のせん断強度(3)－粘性土のせん断強度
- 第4回 土のせん断強度(4)－粘土の非排水せん断強度
- 第5回 土のせん断強度(5)－粘土の排水せん断強度
- 第6回 地盤内の応力と変位(1)－半無限弾性体内の応力
- 第7回 地盤内の応力と変位(2)－圧力球根
- 第8回 地盤内の応力と変位(3)－地盤の表面沈下
- 第9回 土圧(1)－ランキン土圧
- 第10回 土圧(2)－クーロン土圧
- 第11回 土圧(3)－設計用の土圧公式
- 第12回 地盤の支持力(1)－支持力理論
- 第13回 地盤の支持力(2)－地盤の支持力
- 第14回 地盤の支持力(3)－直接基礎の支持力計算
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

教育方法は、講義形式で、適宜、レポート課題の提出がある。また、講義の最後に演習を行い、これにより理解を深める。

5. 評価の方法・基準

期末試験(70%)および演習やレポートの結果(30%)で評価し、60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

2年次前期の地盤工学基礎及び演習との関連が深いので、この科目の内容を十分に理解していることが必要である。また、講義内容を十分に理解するためには、予習復習を行うことが必要である。よく理解できない場合には、図書館3階閲覧室にある参考書も利用すること。学習態度としては、各単元の内容を別々に覚え、理解するだけでなく、関連させて理解し、それを具体的な諸現象

に結びつけて考えることが必要である。演習では、土のせん断に関する知識を基礎として十分に把握し、その原理を他の単元で応用できるように学習することが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 石原研而：土質力学（丸善）511.3/I - 18

●参考書

- 1) 山口柏樹：土質力学（全改訂）（技報堂出版）511.3/Y-4
- 2) 赤井浩一：土質力学（訂正版）（朝倉書店）511.3/A-15
- 3) 三木五三郎 ほか：演習土質工学（オーム社）511.3/M-18
- 4) 安田 進 ほか：わかる土質力学220問（理工図書）511.3/Y-16

8. オフィスアワー

質問は電子メール（永瀬：nagase@civil.kyutech.ac.jp）でも受け付ける。来室は原則木曜 16：00 以降とする。

地盤耐震工学 Earthquake Geotechnical Engineering

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 永瀬 英生

1. 概要

●授業の背景

過去の地震による構造物の被害は、軟弱な地盤で発生することが多い。そのような構造物被害を最小限に抑えるためには、地震時の揺れの大きさや液状化時などに生じる地盤の強度低下等を考慮した耐震設計の手法を構築していくことが重要である。地盤耐震工学は、地盤工学基礎及び演習および地盤工学で修得した、土質力学や地盤工学の内容を基礎として、地震時に地盤で起こる現象を力学的に捉え、それらの問題を解析し、地盤を含めた構造物の耐震設計の考え方を修得するための科目である。

●授業の目的

地震動の諸性質に関する知識を学び、地震動の増幅や地盤の液状化などの具体的な現象を考慮した構造物の耐震設計について理解することを目的とする。

●授業の位置付け

地盤耐震工学は、地震の発生から地表への伝播に至るまでの地震動の諸性質を概観するとともに、地震動の増幅、地盤の液状化といった地震時に地盤で起こる具体的な現象とそれらを考慮した構造物の耐震設計手法を取り扱う。その内容は、2 年次前期の地盤工学基礎及び演習、2 年次後期の地盤工学との関連が深く、2 年次後期の建設振動学とも関連する。また本科目は、3 年次後期の構造物基礎と地下空間および防災情報工学の基礎となるので、それらの科目の履修のために重要である。（関連する学習教育目標：C、D）

2. キーワード

地震波の伝播、地盤の動的性質、地震動の増幅現象、液状化現象、斜面の安定、耐震設計

3. 到達目標

1. 地震の発生から地表への伝播に至るまでの地震動の諸性質と増幅現象について理解する。
2. 地震時に砂地盤で起こる液状化現象のメカニズムとその予測および対策法について理解する。
3. 地盤を含めた構造物の耐震設計の考え方について理解する。
4. 地震時における斜面の安定性を評価する手法について理解する。

4. 授業計画

- 第1回 地震の影響が及ぶ過程と地震の発生
- 第2回 地震波の伝播（1）－実体波の性質および屈折・反射
- 第3回 地震波の伝播（2）－地震波の種類、発生および減衰
- 第4回 地震の各種指標
- 第5回 地盤の動的性質
- 第6回 地盤の応答
- 第7回 地表の地震動
- 第8回 砂質土地盤の液状化（1）－液状化の被害事例
- 第9回 砂質土地盤の液状化（2）－液状化のメカニズム
- 第10回 砂質土地盤の液状化（3）－液状化の予測と対策
- 第11回 構造物の耐震設計（1）－耐震設計の基本的な考え方
- 第12回 構造物の耐震設計（2）－震度法および応答変位法
- 第13回 構造物の耐震設計（3）－斜面の安定解析法
- 第14回 構造物の耐震設計（4）－地震時における斜面の安定解析
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

教育方法は、講義形式で、適宜、レポート課題の提出がある。

5. 評価の方法・基準

期末試験（80%）およびレポートの結果（20%）で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

2 年次前期の地盤工学基礎及び演習、2 年次後期の地盤工学との関連が深いので、これらの科目の内容を十分に理解していることが必要である。また、2 年次後期の建設振動学とは、動的問題を取り扱う科目として関連があるので、この科目についてよく理解していることも必要である。また、講義内容を十分に理解するためには、予習復習を行うことが必要である。よく理解できない場合には、図書館 3 階閲覧室または永瀬教員室に参考書があるので、それらも利用すること。学習態度としては、地震の諸現象を理解した上で、地盤内で起こる地震動の増幅現象、地盤の液化化現象など、具体的な地震時の動的問題に対処するための設計手法の考え方を修得することが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 土田 肇 ほか：建設技術者のための耐震工学（山海堂）524.9/T-3

●参考書

- 1) 石原研而：土質動力学の基礎（鹿島出版会）511.3/I-15
- 2) 安田 進：液化化の調査から対策工まで（鹿島出版会）511.3/Y-12

8. オフィスアワー

質問は電子メール（永瀬：nagase@civil.kyutech.ac.jp）でも受け付ける。来室は原則木曜 16：00 以降とする。

構造物基礎と地下空間

Foundation Engineering and Underground Space

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 廣岡 明彦

1. 概要

●授業の背景

見落としがちであるが、一般家屋から橋梁のような大規模構造物に至る全ての構造物において、基礎は非常に重要である。また、電気・ガス・水道等の基幹エネルギー、物資並びに情報の供給・流通・伝達システムを支える都市インフラにおいては、地下空間は非常に重要な位置を占める。将来設計に直接従事する如何を問わず、建設工学技術者にとって、これらの施設（主に基礎・下部工）の設計・施工方法の現在での基本的な考え方について学ぶとともに、災害に強い都市、および都市機能について考えること、あるいは考え得る能力を身に付けることは必須であろう。

●授業の目的

一般的な構造物の基礎、地下構造物、土構造物について、施工方法・設計法を地盤工学基礎及び演習での知識をベースに、より実践的に学ぶ。また、実際に起きた大規模災害を例に、その際のインフラ施設の被災事例から設計のあり方について考えるとともに、復旧例について取り上げ学ぶ。

●授業の位置付け

2 年次前期選択必修科目の地盤工学基礎及び演習、後期選択必修科目の地盤工学、3 年次前期の地盤耐震工学を受講していることが望まれる。これをベースとして構造物の基礎、地下構造物、土構造物の設計・施工方法を具体的・実践的に学ぶ。更にインフラ施設の被災例と復旧例について学ぶ。

2. キーワード

基礎構造、土質調査、設計法、地下構造物、掘削、土留め、盛土、切土、安定解析

3. 到達目標

1. 地盤工学基礎及び演習、地盤工学、地盤耐震工学の内容を基本とし、構造物の基礎や地下構造物、土構造物の施工方法を理解する。
2. 構造物の基礎や地下構造物、土構造物の設計法をその背景にある考え方を含めて学び、実際の設計計算を理解する。
3. 構造物の基礎や地下構造物、土構造物のいくつかについては簡便に設計計算を実施できる。

4. 授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 基礎構造一般
- 第3回 直接基礎
- 第4回 ケーソン基礎
- 第5回 杭基礎
- 第6回 土質調査
- 第7回 建設プロジェクトの実例紹介（1）
- 第8回 建設プロジェクトの実例紹介（2）
- 第9回 災害とライフライン
- 第10回 地下構造物
- 第11回 掘削土留工
- 第12回 盛土・切り取り、軽量盛土
- 第13回 斜面の安定解析と液化化対策
- 第14回 地盤改良
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験の結果を 70%、講義中の小テストおよび講義中に課したレポートの結果を 30%で評価する。合計が 60 点以上で合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

学則にあるように講義が予習・復習を前提に構成されていることを忘れないこと。小テストで間違った問題を授業時間外に再度チャレンジするとともに、インターネット等を通じて授業時間に

学習した工法等についても更に調べることをお勧めしたい。レポートについては、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けないので注意すること。また、期末試験での達成度が著しく低い場合は不可として取扱う。

7. 教科書・参考書

●教科書

1) 海野隆哉・垂水尚志：「地盤工学」（コロナ社）511.3/K-22

●参考書

1) 地盤工学会編：地盤工学ハンドブック 511.3/J-16

2) 地盤工学会編：新編 土と基礎の設計計算演習 513.1/J-1/2

8. オフィスアワー

原則、毎週木曜日の5限目とする。

連絡先：ahirooka@civil.kyutech.ac.jp

構造力学Ⅰ Structural AnalysisⅠ

学年：2年次 学期：前期 単位区分：選択必修 単位数：2単位
担当教員名 山口 栄輝

1. 概要

●授業の背景

建設社会工学では、構造物を安全に設計することが要求される。そのためには、外から力（外力）が作用したときに、構造物内部に発生する力（内力）や構造物の変形を求めることが必要とされる。

●授業の目的

基本的な構造物の内力、変位の計算法を修得する。

●授業の位置付け

「建設力学基礎及び演習」で修得した知識をもとに「構造力学Ⅰ」の授業は展開する。また、「構造力学Ⅰ」で学んだ内容は、「構造力学Ⅱ」、「建設振動学」、「建築設計製図Ⅰ～Ⅲ」、「コンクリート構造工学Ⅰ、Ⅱ」、「建設構造設計製図」などを履修する上で必要となる。

2. キーワード

梁、トラス、たわみ、応力、静定・不静定

3. 到達目標

1. 梁の断面内に作用する応力を求められる。
2. 静定の梁、トラスのたわみを求められる。
3. 不静定の意味を理解し、不静定梁、不静定トラスの断面力、たわみを求められる。
4. 影響線を求められる。
5. 影響線を利用できる。

4. 授業計画

- 第1回 梁内部の応力（直応力分布）
- 第2回 梁内部の応力
（断面一次モーメント、断面二次モーメント）
- 第3回 梁内部の応力（せん断応力分布）
- 第4回 梁のたわみ（微分方程式を用いる方法）
- 第5回 梁のたわみ（単位荷重法）
- 第6回 梁のたわみ（単位荷重法）
- 第7回 中間試験
- 第8回 不静定梁
- 第9回 不静定梁
- 第10回 不静定梁
- 第11回 影響線
- 第12回 影響線の利用
- 第13回 トラスの変形
- 第14回 不静定トラス
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

小試験（10%）、中間試験（35%）、期末試験（55%）で評価する。60点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- * 「構造力学Ⅰ」の授業を理解するには、「建設力学基礎及び演習」を十分に理解している必要がある。
- * 原則として毎授業開始時に、10分程度の小試験を実施する。
- * 毎回十分な復習をして授業に臨むこと。特に、授業で解いた例題は、次の授業までに、すべて自力で確実に解けるようにしておくこと。

7. 教科書・参考書

●参考書

山本 宏・久保喜延：わかりやすい構造力学Ⅰ、Ⅱ（鹿島出版）501.3/Y-27（参考書ではあるが、授業と密接に関係している部分も多い。）

8. オフィスアワー

月曜日 12:00～12:50、14:30～16:00（変更がある場合は、第1回の授業では連絡する）

なお、随時メールでも質問を受け付ける。アドレスは yamaguch@civil.kyutech.ac.jp

構造力学Ⅱ Structural Analysis II

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 山口 栄輝

1. 概要

●授業の背景

建設社会工学では、構造物を安全に設計することが要求される。そのため、外から力（外力）が作用したときに、構造物内部に発生する力（内力）や構造物の変形を求めることが必要とされる。

●授業の目的

構造力学Ⅰよりも少し複雑な構造物や現象を理解し、解析できるようにする。また、梁理論の構築過程を学ぶことで物理数学の手法を学ぶ。

●授業の位置付け

「建設力学基礎及び演習」、「構造力学Ⅰ」で修得した知識をもとに授業は展開する。また、「構造力学Ⅱ」で学んだ内容は、「建設構造設計製図」などを履修する上で必要となる。

2. キーワード

たわみ角法、梁理論、マトリックス構造解析、座屈、塑性

3. 到達目標

1. ラーメンに作用する断面力、変形状を求められる。
2. 梁の変形を境界値問題として認識し、解ける。
3. マトリックス構造解析法を修得する。
4. 座屈現象を理解し、それが生じる荷重を求められる。
5. 塑性現象を理解し、塑性限界荷重を求められる。

4. 授業計画

- 第1回 たわみ角法（節点変位が生じない場合）
- 第2回 たわみ角法（節点変位が生じる場合）
- 第3回 境界値問題としての棒部材の解析（基礎方程式の誘導）
- 第4回 境界値問題としての棒部材の解析（基礎方程式の誘導）
- 第5回 境界値問題としての棒部材の解析（例題）
- 第6回 中間試験
- 第7回 マトリックス構造解析（剛性方程式の誘導）
- 第8回 マトリックス構造解析（全体座標への変換）
- 第9回 棒部材の座屈解析（基本）
- 第10回 棒部材の座屈解析（一般的な支配方程式）
- 第11回 棒部材の座屈解析（有効座屈長、初期たわみのある柱）
- 第12回 棒部材の塑性解析（弾塑性体、塑性ヒンジ）
- 第13回 棒部材の塑性解析（モーメントの再分配）
- 第14回 棒部材の塑性解析（単純塑性解析）
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間試験（40%）、期末試験（60%）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- * 「構造力学Ⅱ」の授業を理解するには、「建設力学基礎及び演習」、「構造力学Ⅰ」を十分に理解している必要がある。
- * 毎回十分な復習をして授業に臨むこと。特に、授業で解いた例題は、次の授業までに、すべて自力で確実に解けるようにしておくこと。

7. 教科書・参考書

●参考書

西野文雄・長谷川彰夫：構造物の弾性解析（技法堂出版）510.8/S-3

8. オフィスアワー

月曜日 12:00～14:30（変更がある場合は、第1回の授業で連絡する）

なお、随時メールでも質問を受け付ける。アドレスは yamaguch@civil.kyutech.ac.jp

建設振動学 Dynamics in Civil Engineering

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 松田 一俊

1. 概要

●授業の背景

風の力や地震による地盤の揺れや、自動車や列車の走行により種々の建設構造物や建築物が振動する。これらの構造物の設計をするにあたって、これらに生じる振動を理解しておく必要がある。

●授業の目的

振動学の基礎理論に習熟し、各種構造物に関する運動方程式を誘導することができると同時に、構造物の振動現象を理解できるようにする。

●授業の位置付け

建設力学基礎、構造力学Ⅰの知識に基づいて構造物の静的な力学特性を把握し、振動学の基礎を学び、設計に生かせるようになる。

2. キーワード

1 自由度系、バネマス系、減衰自由振動、強制振動、2 自由度系、モード解析

3. 到達目標

1. 振動を運動方程式で表すことの意味を理解する。
2. 1 自由度系の自由振動および強制振動の応答等の特性を求められる。
3. 2 自由度系の振動特性を求められる。
4. モード解析法の基礎を理解する。

4. 授業計画

- 第1回 ガイダンス、構造物の振動概論
- 第2回 減衰のない1 自由度系の自由振動（1）
- 第3回 減衰のない1 自由度系の自由振動（2）
- 第4回 減衰のない1 自由度系の自由振動（3）
- 第5回 減衰のない1 自由度系の自由振動（4）
- 第6回 減衰のある自由振動（1）
- 第7回 減衰のある自由振動（2）
- 第8回 中間試験
- 第9回 減衰のある1 自由度系の強制振動（1）
- 第10回 減衰のある1 自由度系の強制振動（2）
- 第11回 減衰のない2 自由度系の自由振動
- 第12回 2自由度系の自由振動・強制振動
- 第13回 モード解析法の基礎（1）
- 第14回 同 上 （2）
- 第15回 重要事項の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（60%）および中間試験・小テスト（40%）の結果で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰを受講していることが望ましい。講義の内容を十分理解するためには、例題を自分で解き直す、式の導出を自分で試みるなどの復習が必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

小坪清真：入門建設振動学（森北出版）501.2/K-90

●参考書

- 1) 宮田利雄：わかりやすい振動の知識（鹿島出版会）511/M-1
- 2) 西岡 隆：構造振動解析（培風館）501.2/N-54
- 3) 平井一男・水田洋司：耐震工学入門（森北出版）524.9/H-28.

8. オフィスアワー

オフィスアワーおよび質問のための教員のメールアドレスは、第1回目の授業で確認する。

建設材料施工学 Construction materials

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：選択必修 単位数：2 単位
担当教員名 日比野 誠

1. 概要

●授業の背景

多様な目的を持つ社会基盤施設や建築物を構築するには、様々な材料を適材適所に使用し合理的な施工を行わなければならない。講義では、代表的な建設材料であるコンクリートを対象にしてその性質と要求性能を達成する手法について学ぶ。

●授業の目的

コンクリートの構成材料の性質、フレッシュコンクリートおよび硬化コンクリートの性質を理解し、建設材料としてコンクリートに要求される性能を達成するための調合・配合設計方法を修得する。

●授業の位置付け

講義で学習したコンクリートの性質を実験で確認するために、3 年次には建設工学実験Ⅰ・Ⅱが開講される。また、コンクリート構造工学Ⅰ・Ⅱ、および建築設計製図でもコンクリート材料の知識が必要とされる。本授業は3 年次以降に開講される専門科目の基礎となる授業の一つである。

2. キーワード

コンクリート、フレッシュコンクリート、硬化コンクリート、配（調）合設計方法、性能照査

3. 到達目標

1. コンクリートの構成材料およびフレッシュコンクリート、硬化コンクリートの性質を理解する。
2. 性能照査に基づいたコンクリートの配（調）合設計方法を修得する。

4. 授業計画

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 第1回 | コンクリートの構成材料とその役割（1）セメント、骨材 |
| 第2回 | コンクリートの構成材料とその役割（2）混和材料 その他 |
| 第3回 | フレッシュコンクリートの性質（1）ワーカビリティの評価方法 |
| 第4回 | フレッシュコンクリートの性質（2）ワーカビリティに影響を及ぼす要因 |
| 第5回 | 硬化コンクリートの性質（1）強度 |
| 第6回 | 硬化コンクリートの性質（2）強度に影響を及ぼす要因 |
| 第7回 | 硬化コンクリートの性質（3）ヤング係数、クリープ その他 |
| 第8回 | コンクリートの耐久性（1）温度応力、乾燥収縮 |
| 第9回 | コンクリートの耐久性（2）塩害、中性化 |
| 第10回 | コンクリートの耐久性（3）アルカリ骨材反応、凍害 |
| 第11回 | コンクリートの配合設計（1）要求性能とその達成方法 |
| 第12回 | コンクリートの配合設計（2）性能照査 |
| 第13回 | コンクリートの配合設計（3）配合設計の演習 |
| 第14回 | コンクリートの調合設計（1）調合強度 |
| 第15回 | コンクリートの調合設計（2）調合設計の演習 |

5. 評価の方法・基準

期末試験 50%、小テストおよび演習の結果を 50%とし、60 点以上を合格とする。

期末試験の再試験は実施しない。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

毎週行う小テストは前回の授業内容が出題されるので、よく復習しておくことが必要。

7. 教科書・参考書

●教科書

特に指定しない。

●参考書

- 1) 三浦 尚：土木材料学（改訂版）、コロナ社 511.4/M-2
- 2) 西村 昭ほか：最新 土木材料 第2版、森北出版 511.4/N-6
- 3) 小林一輔：最新 コンクリート工学 第4版、森北出版 511.7/K-21
- 4) 土木学会：土木材料実験指導書〔2007年改訂版〕511.4/D-1/07
- 5) 嶋津孝之ほか：建築材料第3版、森北出版 524.2/S-1/3

8. オフィスアワー

初回授業で連絡する。

コンクリート構造工学Ⅰ

Concrete Structural Engineering I

学年：2 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位

担当教員名 幸左 賢二

1. 概要

●授業の背景

代表的建設構造物にはビルディング、ダム、橋梁、トンネル、港湾施設である護岸などがある。これらの構造物にもっともよく用いられる材料はコンクリートであり、特に構造物としては鉄筋コンクリートが用いられており、これらの基本的特性を学ぶことにより、設計の基本的考え方の理解に心がける。

●授業の目的

鉄筋コンクリートの力学的性質を理解することを目的とする。本授業においては、構造設計のもっとも重要な項目である、断面の曲げ耐力、曲げと軸方向力に対する断面の耐力を中心に講義する。

●授業の位置付け

建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰ、建設材料施工学Ⅰ、建設材料施工学Ⅱを受講していることが望まれる。これを基礎にして、実構造物の設計手法の基本を学ぶ。授業時間のうち演習およびトピックス紹介に5 時間程度を割り、実務的な理解を目標とする。毎時間終了時に15 分の小テストを実施し、理解度の確認を行う。

2. キーワード

鉄筋、コンクリート、構造設計、曲げ、軸力、力学的性質

3. 到達目標

1. 構造力学Ⅰ、建設材料施工学Ⅰ、建設材料施工学Ⅱの内容を基本とし、鉄筋コンクリートの基礎的性質を理解する。
2. 鉄筋コンクリート構造物の設計法をその背景にある考え方を含めて学ぶ。

4. 授業計画

- | | |
|------|-----------------------|
| 第1回 | 序論 |
| 第2回 | 鉄筋コンクリートの特徴 |
| 第3回 | コンクリートの力学的性質 |
| 第4回 | 構造設計 |
| 第5回 | 断面の曲げ耐力（その1） |
| 第6回 | 断面の曲げ耐力（その2） |
| 第7回 | 断面の曲げ耐力（その3） |
| 第8回 | 断面の曲げ耐力（その4） |
| 第9回 | 断面の曲げ耐力（その5） |
| 第10回 | 曲げと軸方向力に対する断面の耐力（その1） |
| 第11回 | 曲げと軸方向力に対する断面の耐力（その2） |
| 第12回 | 曲げと軸方向力に対する断面の耐力（その3） |
| 第13回 | 曲げと軸方向力に対する断面の耐力（その4） |
| 第14回 | 曲げと軸方向力に対する断面の耐力（その5） |
| 第15回 | まとめ・重要項目の復習 |

5. 評価の方法・基準

中間・期末試験 50%

講義中の小テスト 30%

レポート・宿題 20%

合計が60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

学則にあるように講義が予習・復習を前提に構成されていることを忘れないこと。レポートについては、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けないので注意すること。授業時間内に日常試験および復習試験を実施するので、十分な予習・復習を行なうこと。

7. 教科書・参考書

1) 教科書

鉄筋コンクリート工学：岡村 甫 市ヶ谷出版 511.7/O-12

2) 参考書

土木構造力学：成岡昌夫 市ヶ谷出版 501.3/N-54

8. オフィスアワー

原則、毎週月曜日の1 限目とする。

コンクリート構造工学Ⅱ

Concrete Structural Engineering Ⅱ

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 幸左 賢二

1. 概要

●授業の背景

代表的建設構造物にはビルディング、ダム、橋梁、トンネル、港湾施設である護岸などがある。これらの構造物にもっともよく用いられる材料はコンクリートであり、特に構造物としては鉄筋コンクリートが用いられており、これらの基本的特性を学ぶことにより、設計の基本的考え方の理解に心がける。

●授業の目的

鉄筋コンクリートの力学的性質を理解することを目的とする。本授業においては、構造設計のもっとも重要な項目である、せん断耐力、プレストレストコンクリートを中心に講義する。

●授業の位置付け

建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰ、建設材料施工Ⅰ、建設材料施工Ⅱ、コンクリート構造工学Ⅰを受講していることが望まれる。これを基本にして、実構造物の設計手法の基礎を学ぶ。授業時間のうち演習およびトピックス紹介に 5 時間程度を割り、実務的な理解を目標とする。毎時間終了時に 15 分の小テストを実施し、理解度の確認を行う。

2. キーワード

鉄筋、コンクリート、構造設計、せん断、プレストレストコンクリート

3. 到達目標

1. 構造力学Ⅰ、建設材料施工Ⅰ、建設材料施工Ⅱの内容を基本とし、鉄筋コンクリートの基礎的性質を理解する。
2. 鉄筋コンクリート構造物の設計法をその背景にある考え方を含めて学ぶ。

4. 授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 鉄筋コンクリートの基礎
- 第3回 棒部材のせん断耐力（その1）
- 第4回 棒部材のせん断耐力（その2）
- 第5回 棒部材のせん断耐力（その3）
- 第6回 棒部材のせん断耐力（その4）
- 第7回 部材のせん断耐力（その1）
- 第8回 部材のせん断耐力（その2）
- 第9回 部材のせん断耐力（その3）
- 第10回 プレストレストコンクリート（その1）
- 第11回 プレストレストコンクリート（その2）
- 第12回 プレストレストコンクリート（その3）
- 第13回 プレストレストコンクリート（その4）
- 第14回 曲げ応力度
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間・期末試験 50%
講義中の小テスト 30%
レポート・宿題 20%
合計が 60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

学則にあるように講義が予習・復習を前提に構成されていることを忘れないこと。レポートについては、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けられないので注意すること。授業時間内に日常試験および復習試験を実施するので、十分な予習・復習を行なうこと。

7. 教科書・参考書

- 1) 教科書
鉄筋コンクリート工学：岡村 甫 市ヶ谷出版 511.7/O-12
- 2) 参考書
土木構造力学：成岡昌夫 市ヶ谷出版 501.3/N-54

8. オフィスアワー

原則、毎週月曜日の 1 限目とする。

維持管理システム

Basic Design and Management of Concrete Structure

学年：3 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 幸左 賢二

1. 概要

●授業の背景

今後、建築物や社会資本の維持管理・更新に関連する投資需要が増大することから、維持管理システムの特に、構造物の補修・補強システムを構築することが重要である。

●授業の目的

構造物の基本的な設計・管理の考え方を概説する。ついで、具体例として橋梁の耐震設計・補強設計および耐久性設計を中心に説明し、構造物の設計・管理の流れを理解する。

●授業の位置付け

建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰ、建設材料施工Ⅰ、建設材料施工Ⅱ、を受講していることが望まれる。これを基礎にして、実構造物の設計手法の基本を学ぶ。授業時間のうち演習およびトピックス紹介に 5 時間程度を割り、実務的な理解を目標としている。毎時間終了時に 15 分の小テストを実施し、理解度の確認を行う。

2. キーワード

コンクリート、構造設計、補修、補強、耐震

3. 到達目標

1. 構造力学Ⅰ、建設材料施工Ⅰ、建設材料施工Ⅱの内容を基本とし、鉄筋コンクリートの基礎的性質を理解する。
2. 鉄筋コンクリート構造物の設計・補強・管理法をその背景にある考え方を含めて学ぶ。

4. 授業計画

- 第1回 序論
- 第2回 鉄筋コンクリートの基礎
- 第3回 構造物の設計概説
- 第4回 構造物の補修・補強概説（その1）
- 第5回 構造物の補修・補強概説（その2）
- 第6回 耐震設計のフィロソフィ
- 第7回 耐震補強のフィロソフィ（その1）
- 第8回 耐震補強のフィロソフィ（その2）
- 第9回 設計（その1）
- 第10回 設計（その2）
- 第11回 設計（その3）
- 第12回 設計（その4）
- 第13回 設計（その5）
- 第14回 設計（その6）
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

中間・期末試験 50%
講義中の小テスト 30%
レポート・宿題 20%
合計が 60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

学則にあるように講義が予習・復習を前提に構成されていることを忘れないこと。レポートについては、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けられないので注意すること。授業時間内に日常試験および復習試験を実施するので、十分な予習・復習を行なうこと。

7. 教科書・参考書

- 1) 教科書
橋梁の耐震設計と耐震補強：川島一彦 監訳 技報堂出版 515.1/P-1

8. オフィスアワー

原則、毎週月曜日の 1 限目とする。

統計力学 Statistical Mechanics

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位
担当教員名 渡辺 真仁

1. 概要

●授業の背景

物質はその基礎単位として原子、分子から構成される。したがってその物質の巨視的性質を、これらの個々の粒子の従う微視的法則から理解することが必要になる。その方法と考え方を身につけることは物質の性質を理解するうえで重要である。

●授業の目的

統計力学は、巨視的な熱力学性質を原子、分子の性質に基づいて解明する物理学である。このミクロとマクロの橋渡しの役割を果たす体系を理解することを目的とする。

●授業の位置付け

統計力学はその構成上、古典力学、量子力学および熱力学との関係が密接である。また工学系の専門科目を習得する上での基礎となる。

2. キーワード

マクスウェル分布、位相空間、分配関数、エントロピー、量子統計

3. 到達目標

- ・熱力学の法則や統計力学の考え方を理解する。
- ・統計力学の方法を習得する。
- ・統計力学の方法を用いて具体的な系について物理量を求める。

4. 授業計画

- 第1回 温度と比熱
- 第2回 気体の性質
- 第3回 熱力学の第一法則
- 第4回 熱サイクル
- 第5回 熱力学の第二法則
- 第6回 エントロピー
- 第7回 自由エネルギー
- 第8回 中間試験
- 第9回 マクスウェルの速度分布則
- 第10回 場合の数と分布
- 第11回 統計集団
- 第12回 各集団と熱力学の関係
- 第13回 量子統計
- 第14回 大正準集団としての統計
- 第15回 まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）および演習やレポートの結果（30%）で評価する。
60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日の復習が必要である。この授業の理解のためには、物理学Ⅱ A および基礎量子力学の授業を履修していることが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

為近和彦：熱・統計力学（森北出版）426.5/T-8

●参考書

- 1) 久保亮五：統計力学（共立出版）429.1/K-4
- 2) 長岡洋介：岩波基礎物理シリーズ7 統計力学（岩波書店）420.8/I-2/7
- 3) 岡部豊：裳華房テキストシリーズー物理学 統計力学（裳華房）429.1/O-15

8. オフィスアワー

オフィスアワーや教員への問合せ方法については、第1回の講義のときに指定する。

量子力学 Quantum Mechanics

学年：3 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：2 単位
担当教員名 岡本 良治

1. 概要

●授業の背景

量子力学は相対論とともに現代物理学の支柱であり、その概念と手法は現代の電子工学、応用化学、材料科学、量子情報科学など諸分野における必要性は着実に高まってきている。また、日常的な思考の枠組みを裏付ける古典物理学的な描像を打ち破った量子力学の学習は柔軟で強靱な精神の育成にも資することができる。

●授業の目的

本講義ではさまざまな局面で量子力学をいかに応用するかを中心として、量子力学の基礎を修得させる。また、自然系、人工系に対する応用の事例を紹介して、量子力学の深い内容と柔軟さについての学習意欲の増進を図る。

●授業の位置づけ

量子力学の理解には、運動量、ポテンシャル、角運動量、ニュートンの運動方程式など、物理学Ⅰ、物理学Ⅱ A、Ⅱ B の知識が必要である。計算には2階の微分方程式の解法と行列計算など線形代数学、応用解析学の知識が必要である。ベクトル空間など幾何学の知識があれば、よりいっそう理解は深まる。半導体工学、応用物理学、物理化学、化学結合論、材料物性、原子力概論などの理解の基礎となるので、それらの履修のためには重要である。

2. キーワード

波動性と粒子性、量子化、波動関数、トンネル効果、スピン、パウリ原理

3. 到達目標

- (1) 物理量の演算子表現とその固有値、固有関数を計算できること。
- (2) シュレディンガー方程式を微分方程式と行列形式で解き、量子化されるエネルギー、物理量の期待値、遷移行列要素を計算すること
- (3) 角運動量・スピンなど量子力学の基礎的な概念を理解し、計算できること。
- (4) 電子物性工学、物質工学、量子化学、量子情報科学など量子力学の応用の事例を知ること。

4. 授業計画

- 第1回：量子現象、数学的準備
- 第2回：量子力学の基本的法則とその意味
- 第3回：1次元系量子井戸
- 第4回：1次元系における調和振動子
- 第5回：1次元におけるトンネル効果
- 第6回：2次元系における角運動量、量子井戸、調和振動子
- 第7回：3次元系における角運動量と球対称ポテンシャル
- 第8回：中間試験
- 第9回：3次元系における量子井戸、調和振動子
- 第10回：水素原子の量子力学
- 第11回：近似法1（摂動理論）
- 第12回：近似法2（変分法）
- 第13回：広義の角運動量とスピン
- 第14回：同種粒子系と原子の電子構造
- 第15回：まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）、演習レポート（30%）という割合で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

講義の前日以前の予習、講義のあった日以後の復習が必要である。本講義が十分理解できるためには、物理学Ⅰ、物理学Ⅱ A、物理学Ⅱ B、基礎量子力学の科目を修得していることが望ましい。

7. 教科書・参考書

●教科書

原田勲・杉山忠男：量子力学Ⅰ（講談社）420.8/K-9/6

●参考書

- 1) 原田勲・杉山忠男：量子力学Ⅱ（講談社）420.8/K-9/7
- 2) 上田正仁：現代量子物理学（培風館）429.1/U-8、429.8/U-8
- 3) 堀裕和：電子・通信・情報のための量子力学（コロナ社）421.3/H-1
- 4) 北野正雄：量子力学の基礎（共立出版）421.3/K-3
- 5) D.R. ベス：現代量子力学入門（丸善プラネット）421.3/B-2
- 6) M.A.Nielsen,I.L.Chuang：量子コンピュータと量子通信（オーム社）。特に、2. 量子コンピュータとアルゴリズム 549.9/N-357/2

8. オフィスアワー

1 回目の講義時に通知する。

原子力概論

Introduction to Nuclear Science and Technology

学年：4 年次 学期：後期 単位区分：選択 単位数：2 単位

担当教員名 岡本 良治

1. 概要

●授業の背景

広義の原子力（原子核エネルギー）は原子力発電、原子力電池、医療用、非破壊検査、核兵器など多くの工学システム、分野で利用〔または活用〕されている。過去、現在の宇宙は原子核反応システムであり、太陽エネルギーの源は核融合反応である。近年、原子力発電システムは、エネルギー資源の選択、地球環境問題、放射性廃棄物問題、核兵器の水平拡散、事故の危険性などと関連して脚光を浴びつつある。

●授業の目的

原子力（原子核エネルギー）をめぐる基本的事実と諸問題を、理工系学部学生として科学的に判断できるように、原子核と放射線の利用と防護についての基礎的知識と論点を修得させる。また、原子力関係の時事ニュースなどを紹介して学習意欲の増進を計る。

●授業の位置づけ

原子力概論の理解には、エネルギー、ニュートンの運動方程式などの力学とクーロン力など電磁気学の基礎知識が必要である。エネルギー変換工学の理解の一助となるので、その履修のためには有益である。また原子炉の定常運転は制御システムの実例でもあり、原子炉建屋、炉心は特殊な構造物の実例でもあるので関連する科目の履修には有益であろう。化石燃料と核燃料の使用のあり方、適切な環境の維持保全とエネルギー問題は結びついているので、関連する科目履修には有益であろう。

2. キーワード

陽子、中性子、質量欠損、結合エネルギー、崩壊法則、反応断面積、核分裂、核融合、元素合成

3. 到達目標

- (1) 放射線と原子核の基礎的性質について学ぶ。
- (2) 放射線の利用と防護についての基礎的な知識を修得する。
- (3) 原子力発電など原子核エネルギーの応用例について、その原理と仕組みを学び、それと地球環境問題、核兵器拡散などのかかわりを考える。
- (4) 太陽エネルギーの源として核融合などの仕組みと基礎的性質を学ぶ。

4. 授業計画

- 第1回：自然と現代社会における原子核現象（岡本）
- 第2回：原子分子の世界（岡本）
- 第3回：原子核の基本的性質（岡本）
- 第4回：原子核の放射性崩壊（岡本）
- 第5回：原子核反応（岡本）
- 第6回：放射線と物質の相互作用（岡本）
- 第7回：放射線の利用と防護（岡本）
- 第8回：中間試験
- 第9回：核分裂連鎖反応と原子炉の構造（岡本）
- 第10回：原子炉の動特性（岡本）
- 第11回：原子力発電をめぐる諸問題（岡本）
- 第12回：核融合入門、ビッグバン宇宙と恒星における元素合成（岡本）
- 第13回：核融合推進ロケット（赤星）
- 第14回：核兵器の原理・構造・効果・影響（岡本）
- 第15回：まとめ（総論）

5. 評価の方法・基準

中間試験（30%）、期末試験（40%）、演習レポート（30%）という割合で評価する。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

本講義が十分理解できるためには、物理学Ⅰ（力学）、物理学ⅡA（波動、熱）、物理学ⅡB（基礎電磁気）の科目を修得して

いることが望ましい。本講義に必要な特殊相対論については講義の中で教育する。量子力学の知識があれば、理解はより深まる。

7. 教科書・参考書

●教科書

岡本良治：講義HPと講義資料プリント

●参考書

- 1) 海老原 充：「現代放射化学」(化学同人) 図書番号 (431.5/E-2)
- 2) 多田順一郎：「わかりやすい放射線物理学」(オーム社) 図書番号 (429.4/T-2)
- 3) 岡 多賀彦：「原子力演習―核エネルギーの解放とその利用」(ERC出版) 図書番号 (539/O-6)
- 4) 大山 彰：「現代原子力工学」(オーム社) 図書番号 (539/O-4)
- 5) 電気学会編：「基礎原子力工学」(オーム社) 図書番号 (539/D-4)
- 6) 成田正邦、小沢保知：「原子工学の基礎」(現代工学社) 図書番号 (539/N-10)
- 7) 日本物理学会編：「原子力発電の諸問題」(東海大学出版会) 図書番号 (539.7/N-4)
- 8) 谷畑勇夫：「宇宙核物理学入門：元素に刻まれたビッグバンの証拠」(講談社) 図書番号 (408/B-2/1378)

8. オフィスアワー

建設数学 Civil Engineering Mathematics

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：選択必修 (地域環境デザイン・都市再生デザインコース)
選択 (建築学コース)

単位数：2 単位

担当教員名 秋山 壽一郎

1. 概要

●授業の背景

建設工学では、実験結果に基づき経験式を作成したり、数値シミュレーションにより現象を理解したり、設計に役立てたりすることが多い。また、建設工学では、市販の汎用ソフトを使用したコンピュータ解析のみならず、解析対象次第ではプログラム開発も求められることも少なくない。

建設技術者がコンピュータを用いた実験結果に基づく経験式の作成法や、常微分や偏微分方程式で記述される自然現象や構造物の数値解析を行う上での計算手法やプログラミング技術を習得しておくことは重要である。

●授業の目的

コンピュータを用いた実験結果に基づく経験式の作成法や、常微分方程式や偏微分方程式の基礎的な数値解析手法について講義する。

●授業の位置付け

平素からコンピュータに慣れ親しんでおくことが重要である。コンピュータに親しむとの観点から、1 年次選択の情報リテラシーの履修が望ましい。プログラミングの観点から、2 年次必修科目の情報基礎を充分理解しておく必要がある。また、数値計算法ではある程度の数学的な知識を必要とするため、1 年次必修科目の解析学 1 や線形代数学を充分理解しておくとともに、選択必修科目である 1 年次の解析学 2 や 2 年次の解析学 3 を履修しておくことが望ましい。

2. キーワード

数値計算、補完法、微分方程式、初期値問題、境界値問題

3. 到達目標

- (1) 工学における数値解析法の考え方について理解する。
- (2) 代数方程式の実根の求め方と補完法について理解する。
- (3) 常微分方程式の初期値問題と境界値問題の数値解法および陽解法と陰解法について理解し、各解析法を使えるようにする。
- (4) 偏微分方程式の各特性に応じた数値解法および陽解法と陰解法について理解し、各解析法を使えるようにする。

4. 授業計画

- 第1回 数値計算の考え方
- 第2回 数値計算における収束と発散
- 第3回 ニュートン・ラプソン法による実根の求め方
- 第4回 ラグランジュの補間多項式
- 第5回 ニュートンの補間多項式
- 第6回 常微分方程式の初期値問題の解法 (簡単な陽解法)
- 第7回 常微分方程式の初期値問題の解法 (ルンゲ・クッタ法)
- 第8回 常微分方程式の初期値問題の解法 (陰解法)
- 第9回 差分法
- 第10回 差分法による常微分方程式の境界値問題 (陽解法)
- 第11回 差分法による常微分方程式の境界値問題 (陰解法)
- 第12回 差分法による偏微分方程式の解法 (方物型)
- 第13回 差分法による偏微分方程式の解法 (楕円型)
- 第14回 差分法による偏微分方程式の解法 (双曲型)
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験 (70%)、講義中の口頭質問 (20%) およびレポート (河川調査) の結果 (10%) で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 「解析学Ⅰ」、「線形数学Ⅰ」、「情報PBL」、「情報処理基礎」、「情報処理応用」以外にも「解析学Ⅱ」、「解析学Ⅲ」を習得し

ていることが望ましい。講義内容の十分な理解を得るために、予習復習が必要である。

- 2) 日頃の学習状況の確認等を目的として、毎回口頭質問を行い評価する。レポートは、特別な理由がない限り、提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で30点(100点満点)未満のものは不可として取扱う。

7. 教科書・参考書

特に指定しない。ノート講義で行う。

●教科書

なし

●参考書

- 1) マコーミック・サルバドリ：数値計算プログラム（サイエンス社）549.9/J-11
- 2) 長嶋秀世：数値計算法（槓書店）418.1/N-11
- 3) 小門純一・八田夏夫：数値計算法の基礎と応用（森北出版）418.1/K-29

8. オフィスアワー

毎週木曜 4 限

メールアドレス：juichiro@tobata.isc.kyutech.ac.jp

総合ランドスケープ演習

Integral Project Design and Workshop

学年：3 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：1 単位

担当教員名 伊東 啓太郎

1. 概要

●授業の背景

土木工学・建築分野における設計実務においては、地域の環境や暮らしぶりに組み込まれる美しい造形を長年にわたって維持することが重要な課題となっている。そのため、様々な専門分野を背景とした価値観を統合して一つの空間の形にまとめる能力が技術者には求められる。ここでは実際に現場となる都市空間を想定した設計作業を演習として行い、それを通じて学生個人個人が総合的な設計視野（インテグラルデザインポリシー）を習得し、それを支える工学的な個別技術の重要性や必要性を理解することが期待される。また、設計をまとめる力と同様に、それを多くの人に分かりやすく説明するための技法を学ぶ。

●授業の目的

1. 実際の設計行為を通じて、土木・建築施設の設計を支える技術の多様性とそれらの技術の必要性を理解する。
2. 景観づくりや環境形成にかかわる基本的概念を理解する。
3. 少人数のグループ作業における役割分担と協働作業をこなし、定められた形式での設計作品の発表を行う。

●授業の位置付け

2 年次における演習科目の一つである。2 年生以降の専門科目の必要性を理解するためにも履修を推奨する。

2. キーワード

総合的設計視野・ランドデザイン・建築計画・環境および景観デザイン

3. 到達目標

1. 土木・建築における複数の技術習得の必要性を理解する。
2. 環境計画と景観デザインに関する機能的空間の構想、提案能力を身に付ける。
3. 具体的な空間デザインの内容に関する説明能力を身に付ける。

4. 授業計画

第1回：設計演習の主旨と内容、必要物品などについて

第2回：設計現場の概略説明と課題提示

第3回：大縮尺図面によるワークショップと設計課題条件のグループ別エスキース

第4回：個別技術面からみた講評と課題設定の再検討

第5回：グループワーク

第6回：設計構想の中間発表

第7回：中縮尺図面によるワークショップとグループ別エスキース

第8回：個別技術面からみた講評と現場条件の解説

第9回：グループワーク

第10回：基本設計の中間発表

第11回：類似整備例の調査と評価

第12回：グループワーク（模型作成）

第13回：グループワーク（模型作成）

第14回：設計最終発表

第15回：まとめと講評

5. 評価の方法・基準

3 回の発表課題の平均が 60 点以上の評価内容をもつグループ設計提案を合格とするが、1 / 4 以上の欠席者は不合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

支給される作業資材・物品以外に、色鉛筆、スケッチ製図用品、ほか、各自の作業内容に応じた必要とする用品を用意することになる。これについては、作業の進捗の中で適宜案内する。

また優れた空間設計を行うには、優れた事例を多く観察し体験して理解することが不可欠である。このため、地元の北九州市域を中心に、九州内の歴史的な空間設計事例や建築作品に直接足を運び、写真で記録しておくなど、自らが設計の際に参考にすべきデータを日常的に蓄積する必要がある。

7. 教科書・参考書

●参考書

必要に応じて、各時間に参考資料を配布する。

8. オフィスアワー

質問は電子メール(keitaro@tobata.isc.kyutech.ac.jp)で受付。

測量学Ⅰ Surveying I

学年：1 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：2 単位
担当教員名 寺町 賢一

1. 概要

●授業の背景

建築物や土木構造物の施工は建設する位置の確認から始まる。測量学は、道路やトンネル、河川、海岸、公園などの地形を正確に表示する手法であり、土木・建築工事を行うに際して必要不可欠な技術の一つである。

●授業の目的

本授業では、測量技術の基本である距離測量や角測量など測量の基本原則を学ぶと同時に、測量を行うに際して必要となる器具に関する知識や、誤差の取り扱い方法についての理論を学ぶ。

●授業の位置付け

測量学Ⅰは、必修科目である「測量学Ⅱ」と「測量学実習」を履修するに際して必要となる基礎知識を修得する科目であるので、十分理解することが必要である。

2. キーワード

距離測量、角測量、水準測量、トラバース測量、誤差

3. 到達目標

1. 平面測量や水準測量に必要となる基礎知識を知り、それを理解する。
2. 測量器具の種類や操作方法に関する知識を習得する。
3. 観測に伴う誤差を処理できることを目標とする。

4. 授業計画

- 第1回 測量の基本的事項
- 第2回 測量における精度と作業の進め方
- 第3回 距離測量
- 第4回 スタジア測量
- 第5回 トランシットの構造と操作方法
- 第6回 トランシットによる水平角観測
- 第7回 1～6の講義の演習または補講
- 第8回 トラバース測量の方法
- 第9回 トラバース測量の整理方法
- 第10回 水準測量
- 第11回 水準測量の結果と処理
- 第12回 誤差伝播の法則
- 第13回 最小二乗法による誤差の処理方法
- 第14回 8～13の講義の演習または補講
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（60％）と小テスト（30％）とレポート（10％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- 1) 測量学Ⅰは必修科目であり、卒業後、国土地理院への申請で測量士補の資格が与えられ、実務経験によって測量士の資格が取得できるので、十分に学習することが望ましい。また小テストに必要となるため、講義には関数電卓を持参のこと。
- 2) 講義中に実施する小テストをWEBにて公開しているので、講義終了後に各自復習すること。講義の十分な理解を得るために予習復習を行うことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

福本武明他：エース測量学（朝倉書店）512/F-4

8. オフィスアワー

毎週金曜日 16：20～17：50

連絡先 電子メール：teramati@civil.kyutech.ac.jp

測量学Ⅱ Surveying II

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：2 単位
担当教員名 廣岡 明彦・鬼束 幸樹

1. 概要

●授業の背景

建築物や土木構造物を建設するに当たり、測量を行うことは必要不可欠である。本講義では、古典的な測量手法から最新の測量手法までを解説する。

●授業の目的

将来現場に出たときに、自らの手で測量が行えるように様々な測量知識を身につけさせる。

●授業の位置付け

1 年次後期必修科目の測量学Ⅰの基礎知識を充分身に付けた上で、受講する必要がある。この知識と共に、2 年前期必修科目の測量学実習を行い技術を身につけさせる。

2. キーワード

平板測量、面積測量、距離測量、三角測量、GPS、GIS

3. 到達目標

1. 様々な手法がある測量の知識を充分習得する。
2. 測量学実習で取り扱う測量機材の原理を習得する。
3. GISやGPS、リモートセンシングといった最新の測量技術についても基礎的な知識を身につける。

4. 授業計画

- 第1回 平板測量の方法
- 第2回 平板測量の利用
- 第3回 面積測量
- 第4回 プラニメータによる面積測量
- 第5回 三角測量の方法
- 第6回 三角測量の結果と処理方法
- 第7回 三辺測量
- 第8回 電波および光波による距離測量
- 第9回 GPSによる距離測量
- 第10回 写真測量の原理と方法
- 第11回 撮影計画
- 第12回 写真測量の図化作業
- 第13回 写真測量による地形図作成
- 第14回 地理情報システム
- 第15回 まとめ・重要項目の復習

5. 評価の方法・基準

期末試験（70％）、小テスト・レポートの結果（30％）で評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

レポートは、特別な理由がない限り提出期限を越えたものは受け付けない。また、期末試験で平均点の1/4未満のものは不可として取扱う。授業中にやり残した課題や間違った小テスト問題を授業時間外に再度チャレンジするとともに、測量士補の過去問にも挑戦して欲しい。

7. 教科書・参考書

●教科書

福本武明他：エース測量学（朝倉書店）512/F-4

●参考書

中村英夫、清水英範：測量学（技報堂出版）512/N-10

8. オフィスアワー

毎週月曜3限（ただし、変更する場合は掲示する）

連絡先：ahirooka@civil.kyutech.ac.jp

onitsuka@civil.kyutech.ac.jp

測量学実習 Surveying Practice

学年：2 年次 学期：前期 単位区分：必修 単位数：1 単位
 担当教員名 永瀬 英生・鬼束 幸樹

1. 概要

●授業の背景

安定した構造物を建設するためには、設計および施工の準備段階のみならず、施工中においても、施工管理のために測量機器を用いて精密な測量を実施することが必要である。測量学実習は、測量学Ⅰ・Ⅱで学習した平面測量技術を体得させるための科目である。

●授業の目的

測量学Ⅰ・Ⅱでの平面測量に関する理論と手法を実際に体得させるため、野外において測量器具の取扱い法、調整法および測定法の実習を行う。さらに、測定結果の調整計算、精度の検討、図面作成などの報告書の提出を課す。班別の作業を行うことにより実際に共同作業を体得させる。

●授業の位置付け

測量学実習は、平面測量を野外で体得させるため、実物の測量器具を用いた測定方法および測定結果の整理方法を取り扱う。その内容は、1 年次後期必修科目の測量学Ⅰ、2 年次前期必修科目の測量学Ⅱと関連が深い。（関連する学習教育目標：E、F）

2. キーワード

距離測量、トランシット測量、トラバース測量、水準測量、平板測量

3. 到達目標

1. 各平面測量の測定方法を体得する。
2. 各平面測量で得られた測定結果の整理方法を理解し、体得する。

4. 授業計画

- 第1回 測量学実習の進め方についての説明
- 第2回 巻尺による距離測量と補正計算
- 第3回 視距およびスタジア測量
- 第4回 トランシットの調整
- 第5回 トランシットによる水平角測定
- 第6回 トラバース測量の選点、造標
- 第7回 トラバース測量での距離測定
- 第8回 トラバース測量での水平角測定
- 第9回 トラバース測量での測定角調整
- 第10回 レベル調整
- 第11回 水準測量の作業
- 第12回 水準測量による観測値の補正
- 第13回 平板測量の方法
- 第14回 平板測量の作業
- 第15回 演習

教育方法は、実習形式で、図面、計算書および報告書の提出がある。

5. 評価の方法・基準

各測量の終了時に提出される図面、計算書および報告書の結果で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

1 年次後期必修科目の測量学Ⅰとの関連が深いので、この科目の内容を十分に理解していることが必要である。また、2 年次前期必修科目の測量学Ⅱとも密接に関連するので、この科目を並行して受講し、十分理解することが必要である。実習内容を十分に理解するためには、予習復習を行うことが必要である。よく理解できない場合には、参考書も利用すること。学習態度としては、測量学Ⅰ・Ⅱで学習した平面測量技術を実際に活用できるように、積極的に平面測量の実習に取り組むことが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

- 1) 土木学会編：測量実習指導書（土木学会）512/D-5

●参考書

- 1) 中村英夫・清水英範：測量学（技報堂出版）512/N-10

8. オフィスアワー

質問は電子メール（永瀬：nagase@civil.kyutech.ac.jp、鬼束：onitsuka@civil.kyutech.ac.jp）でも受け付ける。来室は原則木曜 16：00 以降とする。

建設工学実験Ⅰ Civil Engineering ExperimentⅠ

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：必修（都市環境デザインコース）選択（建築学コース）
 単位数：1 単位

担当教員名 秋山 壽一郎・永瀬 英生・廣岡 明彦・
 伊東 啓太郎・寺町 賢一・鬼束 幸樹・
 重枝 未玲・日比野 誠

1. 概要

●授業の背景

授業の内容を具体的な例で実感する機会を増やすことにより、授業内容に対する理解を深めることが必要である。

●授業の目的

授業内容を具体的な例を用いて体得させ、授業の内容に対する理解度を深めると同時に、授業の補充も行う。

●授業の位置付け

これまでの種々の授業と関連した内容となっており、2 年後期までの選択必修科目の内容と密接に関連している。

2. キーワード

水理実験、市町村分析、環境測定、セメント、細・粗骨材、コンクリート、鋼材、土のコンシステンシー、土のせん断、締固め

3. 到達目標

1. コンクリートに使用する材料の性質を理解する。
2. 硬化コンクリートの力学的性質を理解する。
3. 要求性能を満足するコンクリートの配合設計方法を習得する。
4. 土の物理的特性およびコンシステンシーに関する知識から土の分類について理解する。
5. 直接せん断試験や締固め試験から土の強度や最適含水比など材料の力学特性について理解する。

4. 授業計画

学期のはじめにガイダンスを行い、実験の進め方およびレポート作成に関する注意事項を説明する。

・コンクリート工学

- テーマ1 コンクリートの配合設計
- テーマ2 コンクリート材料の物性試験
- テーマ3 フレッシュコンクリートの性質
- テーマ4 コンクリートの強度試験

・地盤工学

- テーマ1 土質実験に関するガイダンス
- テーマ1 土の粒度試験および液性・塑性限界試験
- テーマ2 土の直接せん断試験
- テーマ3 土の締固め試験

・水工学

- テーマ1 管路の形状損失と摩擦損失
- テーマ2 水門からの流出と水門下流での跳水現象
- テーマ3 開水路流の数値解析：等流・不等流
- テーマ4 開水路の流速分布

・環境工学

- テーマ 学内における植生調査とオープンスペース改善案の提案

・交通工学

- テーマ 自治体の分析

5. 評価の方法・基準

14 テーマの実験レポートを各 10 点で採点し、84 点（60%）以上を合格とする。なお、提出期限を越えたレポートは評価対象にならない。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

各実験の内容を理解するためには、関連する科目を十分に習得しておく必要がある。あわせて、実験の前に、参考書をよく読んで関連知識について予習しておくことも大切である。実験中は危険を伴う作業・操作もあるため、事前に安全教育を必ず受講し、実験中は担当教員および TA の指示に従うこと。実験を欠席した場合、レポートが未提出の場合は不合格となるので十分注意すること。

7. 教科書・参考書

分野ごと別途指定する。

8. オフィスアワー

分野ごと別途指示する。

建設工学実験Ⅱ Civil Engineering Experiment Ⅱ

学年：3 年次 学期：後期 単位区分：必修 単位数：1 単位
 担当教員名 幸左 賢二・山口 栄輝・永瀬 英生・
 廣岡 明彦・日比野 誠

1. 概要

●授業の背景

授業の内容を具体的な例で実感する機会を増やすことにより、授業内容に対する理解を深めることが必要である。

●授業の目的

構造力学、建設材料学、鉄筋コンクリート工学および地盤工学で習得した力学理論を実験で検証し、理論と実際との関連や相違点について理解を深める。

●授業の位置付け

本実験と密接に関連する科目は構造力学、建設材料施工学、コンクリート構造工学Ⅰ・Ⅱ、地盤工学基礎及び演習、地盤工学である。

2. キーワード

構造力学、鉄筋コンクリート造はり、曲げ破壊、圧密、透水、せん断

3. 到達目標

1. RC造はりの設計方法を習得する。
2. 曲げモーメントの作用するRC造はりの力学的挙動を理解する。
3. RC造はりの非線形解析手法を理解する。
4. 土の圧密試験と支持力試験から土の力学的挙動と破壊基準について理解する。
5. 透水試験から土中の水の移動についてその原理を理解する。

4. 授業計画

学期のはじめにガイダンスを行い、実験の進め方およびレポート作成に関する注意事項を説明する。

・構造工学

- テーマ1 ラーメン架構の載荷実験と光弾性実験による応力測定
 テーマ2 円柱部材のストローハル数の測定および空力弾性応答

・建設材料

- テーマ1 セメントの物理試験
 テーマ2 鉄筋の力学特性
 テーマ3 コンクリートの非破壊強度試験

・鉄筋コンクリート工学

- テーマ1 鉄筋コンクリート造はりの設計
 テーマ2 鉄筋コンクリート造はりの作製
 テーマ3 鉄筋コンクリートはりの力学特性（実験）
 テーマ4 鉄筋コンクリートはりの力学特性（演習）
 テーマ5 非線形 FEM 解析による載荷実験の評価

・地盤工学

- テーマ1 土質実験に関するガイダンス
 テーマ2 圧密試験
 テーマ3 土の透水試験
 テーマ4 地盤の支持力試験

5. 評価の方法・基準

13 テーマの実験レポートを各 10 点で採点し、78 点（60%）以上を合格とする。なお、提出期限を越えたレポートは評価対象にならない。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

各実験の内容を理解するためには、関連する科目を十分に習得しておく必要がある。あわせて、実験の前に、参考書をよく読んで関連知識について予習しておくことも大切である。実験中は危険を伴う作業・操作もあるため、事前に安全教育を必ず受講し、実験中は担当教員および TA の指示に従うこと。実験を欠席した場合、レポートが未提出の場合は不合格となるので十分注意すること。

7. 教科書・参考書

分野ごと別途指定する。

8. オフィスアワー

分野ごと別途指示する。

建築設計製図Ⅰ Architectural Design and Drafting Ⅰ

学年：2 年次 学期：前期
 単位区分：必修（建築学コース）
 選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）
 単位数：2 単位
 担当教員名 佐久間 治・徳田 光弘

1. 概要

●授業の背景

本科目は、建築計画Ⅰや建築設計製図基礎で習得した知識や技術を、建築設計の基本的な要素が数多く含まれる住宅を対象に、活用していくものである。また、3 年次に展開していく建築設計製図Ⅱ、Ⅲで必要となる基礎知識を習得するものである。

●授業の目的

著名な住宅作品と計画敷地周辺の調査と分析を通して、住宅を設計する際に必要となる基本的な知識や知恵を習得する。また、住宅設計を通じて、周辺環境との対応、空間イメージ、生活要求などを考慮に入れながら、具体的に建築空間にまとめあげていく基本的な設計能力を養う。

●授業の位置付け

本科目は、建築設計演習の第一段階として位置付けられる。

2. キーワード

建築設計、建築計画、デザイン、調査・分析、住宅設計、空間、プレゼンテーション

3. 到達目標

1. 設計に必要な基本的な情報を適切な調査・分析等によって取得できる。
2. 正確な図面等の表現方法によって豊かな居住空間を提案できる。
3. 口頭発表を含む初歩的なプレゼンテーションが各作業段階においてできる。

4. 授業計画

以下では、様々なスケールの模型とスケッチ・図面を用いた口頭発表によるエスキスによって演習が進められ、最終的な成果はプレゼンテーションシートと模型によって表現する。

1) 住宅作品分析（4 回）

歴史的に重要な住宅作品及び建築家の資料収集・分析・模型製作を通して、作品の思想や建築空間の魅力、内部空間の構成について学ぶ。

2) 計画敷地周辺分析（4 回）

住宅設計の計画対象敷地の多角的な調査、模型製作を通じて、設計に必要な周辺環境の捉え方を学ぶ。

3) 住宅設計（7 回）

これまでの課題で習得したことを踏まえて、スタディ模型やスケッチ・図面の作成と担当教員とのエスキスを通じて、表現方法に留意しながら豊かな居住空間を創出することを学ぶ。

5. 評価の方法・基準

各課題で提出される成果と各作業段階におけるプレゼンテーションによって成績を評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建築学は総合の学問といわれている。建築設計製図基礎、建築計画Ⅰはもとより、構造力学や建設材料施工学などの各種専門科目をはじめ、人間科学科目の知識を広く習得していることが望ましい。

本科目は、授業時間外にも課題に取り組み、成果物の仕上げやプレゼンの準備を行うことが不可欠である。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

- 1) 日本建築学会：建築設計資料集成、丸善 525.1/N-4

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築設計製図Ⅱ Architectural Design and Drafting Ⅱ

学年：2 年次 学期：後期

単位区分：必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 佐久間 治・徳田 光弘

1. 概要

●授業の背景

本科目は、建築計画Ⅰや建築設計製図基礎、建築設計製図Ⅰで段階的に習得した知識や技術を、小中規模建築を対象とした設計に展開していくものである。建築設計製図Ⅰで対象とした住宅では利用者が住み手に限定されるのに対し、小中規模建築では利用者が不特定に広がるため、建築に対する社会や地域の要求を考慮に入れながら、建築計画の基礎的な知識を応用していく能力が求められる。

●授業の目的

やや公共性の高い小中規模建築の設計を通じて、建築に関する社会や地域の要求を考慮に入れながら、建築計画の基礎的な知識を応用して、具体的かつ魅力的な建築空間にまとめあげる設計能力を養う。

●授業の位置付け

本科目は、これまで習得してきた建築設計演習の展開として位置付けられる。

2. キーワード

計画・設計・デザイン、プログラム、アクティビティー、機能、空間、周辺環境、プレゼンテーション

3. 到達目標

1. 建築計画の基礎的な知識を建築設計に応用できる。
2. 小中規模建築に求められる諸条件に配慮し、正確な図面等の表現方法によって、具体的かつ魅力的な建築空間を提案できる。
3. 口頭発表を含む基本的なプレゼンテーションが各作業段階、最終的な設計提案においてできる。

4. 授業計画

以下では、様々なスケールの模型とスケッチ・図面を用いた口頭発表によるエスキスによって演習が進められ、最終的な成果はプレゼンテーションシートと模型によって表現する。前半後半の2課題とし、小規模から中小規模の公共的施設を扱う。施設機能としては、居住（集合）、展示、集会、教育・図書・文化施設等を対象とする。

- 1) 公共的建築の計画視点（1回）
- 2) 小規模公共的施設（7回）
- 3) 中規模公共的施設（7回）

公共性の高い小中規模の設計を通じて、不特定多数のユーザーに対して新しいアクティビティーを生み出すような建築プログラムの提示、外部周辺地域環境との呼応や調和等を考慮に入れながら、建築計画の基礎的な知識を活用し、魅力的な建築空間を創出することを学ぶ。

5. 評価の方法・基準

各課題で提出される成果と各作業段階におけるプレゼンテーションによって成績を評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建築学は総合の学問といわれている。建築設計製図基礎、建築設計製図Ⅰ、建築計画Ⅰはもとより、建設環境工学、建築一般構造、コンクリート構造工学などの各種専門科目をはじめ、人間科学科目の知識を広く習得していることが望ましい。

本科目は、授業時間外にも課題に取り組み、成果物の仕上げやプレゼンの準備を行うことが不可欠である。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

- 1) 日本建築学会：建築設計資料集成、丸善 525.1/N-4

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建築設計製図Ⅲ Architectural Design and Drafting Ⅲ

学年：3 年次 学期：前期

単位区分：必修（建築学コース）

選択（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

単位数：2 単位

担当教員名 徳田 光弘・佐久間 治

1. 概要

●授業の背景

本科目は、建築計画Ⅰや建築設計製図基礎、建築設計製図Ⅰ・Ⅱで段階的に習得した知識や技術を統合して、大規模公共施設やまちづくりを対象に、展開していくものである。また、各課題における提案では、1 年次から3 年次前期までに習得してきた基礎科目および専門科目を総合的に活用していく能力が求められる。

●授業の目的

大規模公共施設の設計を通じて、多様な機能や要求を統合させながら、建築計画のみならず構造や設備の基礎的な知識を応用して、具体的かつ魅力的な建築空間にまとめあげる設計能力を養う。また、集合住宅を含む地区設計を通じて、地域や社会に潜む様々な問題に対して、これまで習得してきた知識や技術を総合的に活用し、建築的な提案としてまとめあげる設計能力を養う。

●授業の位置付け

本科目は、これまで習得してきた建築設計演習の集大成として位置付けられる。また、総合的な能力によって問題解決に至るという意味では、4 年次の卒業研究の準備段階としても位置付けられる。

2. キーワード

建築設計、大規模建築、デザイン、機能、まちづくり、空間、プレゼンテーション

3. 到達目標

1. 建築を取り巻く地域や社会の様々な問題について、必要な資料を収集・分析して論理的に提案できる。
2. 多様な機能や社会的要求に対して、これまでに学んだ知識と技術を総合的に活用することによって、具体的な建築空間を提案できる。
3. 口頭発表を含む高度なプレゼンテーションが各作業段階、最終的な設計提案においてできる。

4. 授業計画

以下では、様々なスケールの模型とスケッチ・図面を用いた口頭発表によるエスキスによって演習が進められ、最終的な成果はプレゼンテーションシートと模型によって表現する。

- 1) 大規模公共施設（7回）

大規模な公共施設の設計を通じて、大人数で使用する空間における設計上の配慮や、多様な機能や社会的要求を考慮に入れながら、これまで習得してきた建築関連科目の知識や技術を統合して、魅力的な建築空間を創出することを学ぶ。

- 2) 集合住宅を含む地区設計（7回）

まちづくりを念頭にいた集合住宅を含む地区設計を通じて、地域や社会の様々な問題について理解しながら、これまで習得してきたすべての知識や技術を総合的に活用し、建築的に提案していくことを学ぶ。

- 3) 講評会（1回）

5. 評価の方法・基準

各課題で提出される成果と各作業段階におけるプレゼンテーションによって成績を評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

本科目は、授業時間外にも課題に取り組み、成果物の仕上げやプレゼンの準備を行うことが不可欠である。

7. 教科書・参考書

●教科書

とくに指定しない。

●参考書

- 1) 日本建築学会：建築設計資料集成、丸善 525.1/N-4

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

建設構造設計製図 Design and Drafting of Structures

学年：3 年次 学期：後期

単位区分：必修（地域環境デザイン・都市再生デザインコース）

選択（建築学コース）

単位数：2 単位

担当教員名 日比野 誠・松田 一俊

1. 概要

●授業の背景

建設技術者として、橋梁など力学的に安全性が担保された構造物の設計のあり方を深く知ることは必要である。

●授業の目的

代表的な構造物として橋梁を取り上げ、設計法を理解し、設計に対する感覚を身につける。

●授業の位置付け

1 年次から 3 年次までに習得してきた基礎科目および専門科目の成果を総合して問題解決にあたる必要がある。特に、建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰ・Ⅱについては履修しておくことが必須である。また、建設振動学、建設材料施工学、コンクリート構造工学Ⅰ・Ⅱなどの講義と関連が深い。

2. キーワード

橋梁、荷重、床版、主桁、性能照査、限界状態設計法

3. 到達目標

- ・構造力学に関する基本的な事項を理解しておりかつ計算が確実にできること。
- ・橋梁を対象として、その果たすべき機能や、設計に用いる荷重などについて理解し、設計が行えること。
- ・鉄筋コンクリート構造の性能照査型設計方法を理解すること。

4. 授業計画

- 第1回 構造物の発展と現状
- 第2回 橋梁の種類と力学特性
- 第3回 橋梁に作用する荷重の種類
- 第4回 床版の設計
- 第5回 主桁の力学特性
- 第6回 主桁の設計
- 第7回 継ぎ手の設計
- 第8回 支承部
- 第9回 鉄筋コンクリート構造物に要求される性能とその照査
- 第10回 限界状態設計法と部分安全係数法
- 第11回 構造安全性とその照査
- 第12回 使用性とその照査
- 第13回 疲労耐久性とその照査
- 第14回 鋼材腐食に対する耐久性とその照査
- 第15回 コンクリート材料の設計とその照査

5. 評価の方法・基準

提出物及び不定期に行う評価試験で評価し、60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

建設力学基礎及び演習、構造力学Ⅰ・Ⅱの履修が必須である。また、建設振動学、建設材料施工学、コンクリート構造工学Ⅰ・Ⅱを履修しておくことが望ましい。授業時間外にも課題に取り組む、提出物をしっかり作成することが必要である。

7. 教科書・参考書

●教科書

●参考書

適宜指示する。

8. オフィスアワー

最初の講義の際に連絡する。

卒業研究 Undergraduate Research

学年：4 年次 学期：通年 単位区分：必修 単位数：5 単位

担当教員名 建設社会工学科各教員

1. 概要

●背景

技術者として社会で活躍するためには、100%の正解のない「工学的問題」に対する、問題設定、解決方法計画、実行および説明能力が必要とされる。そうした能力を身につけるための工学部における教育は、その多くを卒業研究の実施に負っている。

●目的

建設社会工学の最前線の課題に取り組む。

●位置付け

建設社会工学科で学んできたことなどを総動員して行われるもので、学科の「学習・教育目標」すべてに関わるが、特に（G）と（H）は、主に卒業研究によって達成されるべきものである。

2. キーワード

課題発見、知識と技術の統合、プロセスの計画と実行、説明・提案力

3. 到達目標

1. 研究室メンバーと協力して進めることによって、チームワーク力を身につける。
2. 課題に取り組む課程を通じて、学科の「学習・教育目標」を達成する。

4. 授業計画

- ・卒業論文もしくは卒業設計のいずれかを指導教員の下承の上で選択する。
- ・指導教員と十分に相談した上で研究を進める。
- ・論文・設計図面等として卒業研究を取りまとめるとともに、その概要を作成する。
- ・卒業研究発表会において、成果をわかりやすく伝え、質疑に回答する。

5. 評価の方法・基準

研究の進め方、作成した論文・設計図面等と概要、発表会におけるプレゼンテーションを、総合的に評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

1つの問題に長期に渡ってじっくり取り組める貴重な機会である。どれだけ真剣に取り組んだかによって、人生における「問題解決能力」に大きな違いが生じる。積極的に取り組んで欲しい。

7. 教科書・参考書

適宜指示される。

8. オフィスアワー

各指導教員の指示に従うこと。

学外実習 Internship

学年：3 年次 学期：前期 単位区分：選択 単位数：1 単位

担当教員名 学年担当教員

1. 概要

●授業の背景

講義で学んだ様々な専門知識を、実際の現場でどのように生かせるかを体験することで、大学の講義の位置づけを理解することができる。この理解によって卒業後の進路の決定に大いに役立つ。

●授業の目的

建設工学の実務経験に直接接することにより、卒業後の進路の決定に役立てるとともに、建設工学の理解をより一層深めることを目的として行う。

●授業の位置付け

1 年次から 3 年次までに習得した全ての知識および技術を集大成して実習に挑む。また、この経験に基づき、卒業後の進路の決定に役立ててもらう。

2. キーワード

学外、実習、現場

3. 到達目標

既に習得した建設工学の知識を具体的に生かしながら実習を行うことを目標とする。さらに、この経験を卒業後の進路の決定に役立てさせる。

4. 授業計画

約 2 ～ 3 週間程度の期間、建設会社、コンサルタント、官公庁、設計事務所などに出向き、実習受け入れ先から与えられた設計、測量、データ解析、報告書作成などの課題を行うことにより実務経験を積ませる。

5. 評価の方法・基準

実習受け入れ先からの評価と実習内容についてのレポートに基づき総合的に評価する。60 点以上を合格とする。

6. 履修上の注意事項、授業時間外における学習等

- (1) 本人の希望を優先して受け入れ先を決定するが、必ずしも希望先と受け入れ先が一致しない場合も起こりうるので、この点を注意してほしい。
- (2) 受け入れ先に迷惑がかかるので、履修の変更は原則として認めない。ただし、病気等のしかるべき理由で履修が不可能となった場合は、速やかに学年担当教員と連絡を取ること。
- (3) 学生教育災害傷害保険付帯賠償責任保険（自己のけが等を保証するものではなく、他人にけがをさせたり、他人の財物を損壊したことにより賠償金が担保されるもの。）に加入すること。

7. 教科書・参考書

なし

8. オフィスアワー

掲示等を通じて周知する。